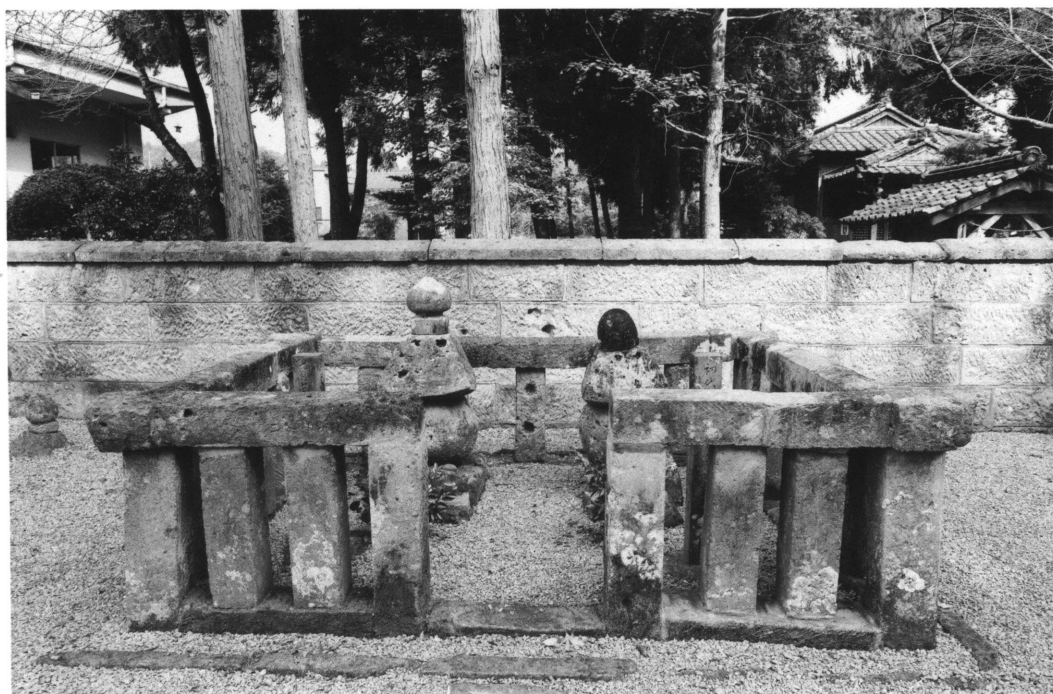


庄内



第20号

庄内の昔を語る会



表紙写真説明

山久院跡（写真は福村修様提供）

都城市は平成二十五年に地域振興基金を積み立て、中山間地域などの活性化を図る地域活性化支援事業を平成二十八年度まで実施することになっています。

庄内地区もその対象地域になっており、庄内地区まちづくり協議会の検討会議で協議した結果「史跡の整備保存事業」、「歴史文化読本作成事業」、「庄内地区をアピールするDVD等作成事業」に取り組むことになりました。

平成二十六年度の「史跡の整備保存事業」では、山久院跡や釣こう院跡の整備を行っています。両史跡は今まで都城島津家で管理されていましたが、平成二十六年四月一日より庄内地区まちづくり協議会が維持管理を行うことになり、都城島津家と覚書を交わしました。

両史跡とも庄内地区にとってはシンボリックな史跡であり、最近見学者も増えていることから、手すりの塗り替えや、石柱の固定、碎石敷設などを行い整備しました。

刊行にあたって

庄内の昔を語る会 会長 山下 謙二郎

『庄内』二十号を発刊します。平成元年十一月に『庄内』が創刊され、以後毎年発行され、平成十六年十一月の十六号まで続いていました。しかし、その後六年間の空白があり、平成二十三年十二月に七年ぶりに十七号を再刊する運びとなりました。その間、本誌読者の皆様にはいろいろとご迷惑をおかけいたしました。

その後、新しい役員体制で再出発することになりました。しかし、新役員のもとでこれまで『庄内』の編集に携わっていませんでした。そこで、先輩諸氏に御指導頂きながらようやく再刊の運びとなった次第でした。でも、かつてのような重みのあるものとはなっていませんが、『庄内』を愛読して頂く皆様のご理解・御助力を得ながら十八号、十九号と刊行してまいりました。

そしてここに『庄内』二十号を発刊することができました。人生で言えば成人を迎えたこととなります。いよいよ独り立ちの時です。これからも新しい道を切り拓くという意気込みで、努力していく所存です。

「昔を語る会」では、現在若い人々に、庄内地区の歴史に興味を持ってもらおうと、小・中学生を中心にした歴史巡見を行っています。子どもたちの感想文を読むと自分達の地域の歴史に興味を持ち、かなり高い精度で理解を示しています。そこには、学校現場の先生方の深いご理解と協力があります。有難いことです。このような中でこれからも『庄内』の発行につなげて行きたいと思えます。今後とも地域の方々、読者の皆様のご協力をお願いします。

平成二十七年一月吉日

目次

刊行にあたって	……	会長	山下謙二郎	……	1
特別寄稿					
『庄内』二十号刊行に寄せて	……	東区	坂元徳郎	……	1
歴史研究					
藩から県へ(二)――明治前期の庄内地区――	……	乙房町	武田浩明	……	3
明治の輝き	……	早鈴町	七牟礼純一	……	6
史・資料					
庄内小学校の昔	……	東区	坂元徳郎	……	13
菅原神社(天神様)の鳥居建立	……	東区	鎌田康正	……	28
史跡探訪の足あと	……	東区	帖佐ミヤ	……	32
田の神さあ	……	東区	園田敏夫	……	37
庄内町情報					
庄内小学校だより	……	校長	逆瀬川秀夫	……	40
乙房小学校だより	……	校長	毛利純宗	……	44

菓子野小学校だより

地域の中の学校 ～「夢・実践・改革」の思いをつなぐ～ …… 校長 山本博昭 …… 48

菓子野小学校五年生校外学習感想文 …… 51

庄内小学校五年生遠足感想文 …… 56

庄内地区まちづくり協議会平成二十五年度事業報告 …… 西区 釘村美千也 …… 64

追憶・随想

日本の故郷、庄内 …… 東区 前田光政 …… 68

兄一也への手紙に見る戦時下のわが家 …… 東区 坂元武 …… 76

「学徒動員」の思い出 …… 東区 山元哲朗 …… 81

庄内のできごとなど… …… 乙房町 馬籠英男 …… 83

「帰郷」Ⅲ …… 久保原町 宮下俊彦 …… 86

庄内空襲 …… 町区 山下謙二郎 …… 95

事務局だより

平成二十五年度 事業計画 …… 100

平成二十六年 度 会員名簿 …… 104

編集後記

…… 105

表紙題字 (故) 大河内 浩爾

特別寄稿

『庄内』二十号刊行に寄せて

東 区 坂 元 徳 郎

「庄内の昔を語る会」会誌『庄内』二十号の刊行おめでとうございます。日頃から会の運営につきましては山下会長さんをはじめ執行部の皆さんに色々御苦勞をお掛けしている所でございますが、この度は『庄内』刊行二十号と言う一つの節目を迎えられた事に対して心からお慶びを申し上げます。

不肖私の力不足から一時は「廃刊」の虞すらあった会誌『庄内』でしたが若い皆さんが結集されて見事にこれを復活させて頂きました。感謝の一言に尽きます。

不肖私も創立以来本会とは一体的に過ごして参りましたのでこの度の記念すべき刊行は何物にも替え難い慶びを覚えています。感一入です。誠に有難うございました。

『庄内』の一冊を刊行するには、原稿の募集から編集、校正、印刷、頒布と続きますが、特に原稿の集まり具合には気を使います。一冊の体裁を整えるには足らざるは不可、多すぎても不可、知る人ぞ知る難儀な作業です。よくぞやって下さいました。思い起こせばもう二十数年前になりますか、帖荘園で発起人会が持たれました。あの時の顔触れは、野海正治さんを中心に伊地知義夫さん、臼杵徳光さん、清水省三さん、木幡敏正さん、馬籠良孝さん、山元昭平さん、片ノ坂登さん、そして末席に私だったと思います。

記憶は薄れましたが、事務所を地区公民館に置き各地区の公民館長さんにも協力を願う庄内全域に会員網を広げる事が決まりました。これは名案だったと今でも思っています。それから「会の名称」がすったもんだで決まらないままシヨチュ飲みに突入、そのさ中一番チンピラの私が「いっそこち『庄内の昔を語る会』にすれば」と呟いた一言が野海正治先生の耳に入りこれが「名譽ある会名」になった事は私の忘れ難い記憶の一つでもあります。

当初数年間の事務局は臼杵徳光さんと清水省三さん、それに山元昭平さんと私だったと思います。史跡探訪の計画、下見、講演の依頼や研究発表、寄稿された会誌の原稿整理等通常活動

の他に市の史跡整備事業の受託事業、稚児ざくらの通年清掃活動も楽しくこなしたものでした。

土地の古老の家に上がり込んで昔話を収録するのは専ら昭平さんと私の役目でした。みなさん我々を喜んで迎えて頂き、熱心に真剣に語って下さいました。

運営委員会なるシヨチュ飲み会が度々開催されました。シヨチュの勢いもあつたと思いますが時々意見の衝突がありました。そして盃の飛んだ事もありました。

このような活気ある会の活動が認められて平成十一年には「地域文化の振興に寄与した」として市の「文化賞」受賞と言う栄誉に輝いた事は御承知の通りです。

あれから時は流れました。「歲月人を待たず」で往時活躍された先輩方の多くは既に鬼籍にあります。今日の日をキツト喜び合っておられると思います。

私達はこれ等先輩方の心を心として会を引き継ぎ今日を迎えている訳で、今後も会員一同心を一つにして「庄内の昔を語る会」を盛り上げなければいけないと思っています。

庄内は史跡の宝庫とも言われています。まだまだ数多くの史跡が身近に埋まっていると思います。また「十年一昔」とも申します。今日の出来事も十年たてば貴重なるさとの歴史であ

ります。

これ等を記録として後世に遺そうと云うのが私達の会誌『庄内』であり、そしてそれは私達のふるさと唯一の「郷土史」でもあります。このような意味で会誌『庄内』には多くの皆さんの大きな期待が掛かっていると思います。

事務局の皆さんにはこれからも御苦勞をお掛け致しますが、私達の誇りある『庄内』です。どうか今後とも五十号、百号の達成を目指して会の運営に尽して下さるようお願いをいたします。不肖この老体既に力及びませんが、会員の一人として協力は惜しまない心算でおります。

老人のたわごとで長くなりましたが、改めて二十号発刊の快挙を讃え併せて「庄内の昔を語る会」の発展を心から祈念して慶びに寄せます。

歴史研究

藩から県へ（一）

―明治前期の庄内地区―

乙房町 武田 浩明

はじめに

来年、「庄内町」が都城市と合併して五十年を迎えます。その「庄内町」も昭和三十一年（一九五六）七月十五日に、「庄内町」と「西岳村」が合併して形成されました。実は、昭和三十年には庄内、山田、西岳の三町村に志和池村を加えた合併の機運が起こり、議会内で合併に向けての研究や調査が行われました。しかし、この四町村での合併は実現せず、先述したように庄内町と西岳村が合併しました。

ところで、地方自治法第五条の第一項に「普通地方公共団体の区域は、従来の区域による」とあります。この「従来の区域」とは、実法自治法の施行時に存在した区域をそのまま踏襲する

という意味で、陸地のみならず、河川、湖沼の水面および海面を含んでいます。また、市町村間で境界に関して争論がある時、最高裁判所の判例は、「まず、江戸時代における関係町村の係争地域に対する支配・管理・利用等の状況から知り得る区分線を基準として境界を確定するべきである」とし、「明治以降における関係町村の行政権行使の実状、国等の行政管轄、住民の便益、自然的条件、地積などを考慮の上、最も衡平妥当な線を見出し、これを境界と定めるのが相当である」としていません。

したがって、江戸時代や明治前期における郷や村の変遷をみていくことは、現在の庄内地区の在り方を考えるうえで重要なことでもありますので、その過程を考えてみたいと思います。

一 江戸時代の庄内地区

まず江戸時代の状況をみていくことにしましょう。

周知のとおり、江戸時代の庄内地区は鹿児島藩領で、都城島津氏が支配する私領でした。都城島津氏が治めていた領地は最大で約四万石もありましたので、領内を十一の区画に分けて、それぞれに地頭を置いて治めました。

『庄内地理志』や「諸村門名調帳」等の史料の絵図や記事を

見ると、現在の庄内地区は安永郷に属し、乙房町・菓子野町・庄内町は「前川内村」、関之尾町は「西嶽村」であつたことがわかります。

二 版籍奉還と庄内地区

明治二年（一八六九）六月に版籍奉還が行われ、藩の土地と人民は朝廷に返えされます。都城の私領主であつた島津元丸は、本藩に領地を返還して鹿児島に移住しました。そして、都城郷の地頭として三島通庸がやってきます。しかし、旧都城島津家の家臣たちは旧領主の島津元丸を地頭にと願ひ出ていたため、彼らと上手くいかず、三島は鹿児島に帰ってしまいました。

鹿児島に帰つた三島は、都城の実情を調査したうえで、都城氏族の旧習を一掃するため、都城郷を同年十一月に上庄内郷、下庄内郷、梶山郷に三分割しました³。

郷		分割郷名	村名
城	都		
上庄内郷	梶山郷	山田、前川内、横市、西岳、中霧島、野々三谷、丸谷、水流、岩満、五拾町	石寺
下庄内郷	木前	郡元、金田、高木、川東、早水、宮丸、鷲巢、上長飯、下長飯、寺柱、田部、後久、安久、梅北、	

※明治三年三月に安久、後久、北田部、鷲巢、寺柱は梶山郷へ編入。では、なぜ三島はこのような方法をとつたのでしょうか。このころは、他の郷に土地を持つことを禁止されていました。下庄内の武士たちの山林や田畑の多くは上庄内や梶山に存在しており、分割により彼らは上庄内や梶山の土地を手放さなければならなくなりました。そのため、下庄内の武士たちは今まで自分の土地から手に入れていた米や薪などを購入することになり、経済的に打撃を受けました。ここに三島の狙いがあつたと思われ⁴。

さて、都城を三郷に分割した三島は、下庄内郷の地頭を高城地頭の前田新之丞に兼務させて、自らは上庄内郷と梶山郷の地頭となりました。そして、鹿児島や下庄内から住民を移住させ、住宅市街地の建設・道路の開鑿・堤防の修理・神社の建立と修理・産業の奨励・学校の創設などの事業を進め、両郷を開発しました。

三島はのちに東京府権参事や酒田、鶴岡、山形、福島、栃木県令などを歴任しましたが、その政治の原型は、上庄内郷と下三俣郷時代にできたといつてもよいのではないのでしょうか⁵。

三 『日向地誌』にみる庄内地区

ここで明治十七年（一八八四）に完成した『日向地誌』（以下『地誌』）から庄内地区の様子を見てみたいと思います。

この『地誌』は、「悉皆実施」の方針をもとに編集され、宮崎県全域を取り扱った最初の地誌で、町村の沿革・古跡・物産などが網羅されており、庄内地区は「安永村」と記されています。安永村は、明治三年三月に西岳村の一部である関之尾と川崎を入れ、これに南前川内と北前川内を合わせて一村として誕生しました⁷。

安永村の戸数は六百六十八戸、人口は三千九百四十四人（男千九百七十人、女千九百七十四人）で、戸数・人口とも宮丸村と下長飯村について三番目に多くなっています。

次に耕地反別をみると、田が三百六十三町一畝二十九歩と旧都城地域の村では一番多く、畑も横市村の六百二町二畝十一步について二番目の五百八十七町五畝二十一步と記されています。このことから、安永村には広大な農地が広がっていたことがわかります。

工業については、『地誌』にはほとんどの村が「農暇工ヲ業トスル」とあるように農閑期に営んでいたようですが、安永村だけ「工ヲ業トスル者三十戸」と記されています。専業で工業

を営んでいた者がいたようですが、残念ながら物産に工業製品が出てこないことから、何を製造していたかはわかりません。商業については、安永村に五十戸の商業者が見られます。これは、三島通庸が下庄内郷（都城）や鹿児島から商家の次・三男を移住させたことに由縁するものと考えられます。そのほか、医師の戸数が「四戸」で、下長飯村の二十戸、宮丸村の十五戸に次いで多いことが特筆されます。

註

- 1 『都城市史 通史編 近現代』P一〇四一（都城市、二〇〇六年）。
- 2 前註1 P三九。
- 3 『鹿児島県史料 旧記雑録追録』八 九三〇の三。
- 4 前註1 P一八。
- 5 三島通庸については、日本史の教科書の記述から「民権運動を弾圧した人物」という悪いイメージがあります。しかし、その人物についての評価は、あらゆる角度から見たうえでくださるべきだと考えます。
- 6 『宮崎県の地名』文献解題（平凡社、一九九七年）。
- 7 山下真一「地名「庄内」の誕生と変遷」（『庄内』第一八号、二〇一二年）。

明治の輝き

早鈴町 七牟礼 純 一

庄内の歴史を振り返るとき、明治の時代がひときわ輝いて見える。周辺の村に比べて人口が多く、財政が拡大し、優良農村の代表格となるその原動力となったモノは何か、そしてどんな輝きかを見ることがしたい。

一 幕末の頃の庄内

庄内は、一五世紀には都城島津氏によって安永城が築かれており、地勢に優れ、今屋の茶は領主に献上されるなど地味豊かなところである。

およそ一五〇年以前、徳川幕藩体制末期の庄内は、島津藩内の都城島津氏の私領地の一部であり、私領の支配が五口六外城によって行われていたことから、安永外城域内にあった。外城の行政運営は、地頭が任地に赴任しなくなったので、噺、横目、組頭、庄屋といった武士身分の役人が担っていた。

城山の麓には主に武士身分の者が居住し、そのほかの地域は、門割制度により六八の門が設けられ、百姓が居住し農業に従事していた。また、領内には武士身分の者が分散して居住していたと考えられる。百姓には年貢と夫役が課せられた。生産は、米が主要作物で、茶などの特産品があった。

庄内（前川内村に西嶽村の関之尾等を加えた地域）の石高としては、三九〇〇石程度だったと考えられる。明治初年の人口は一六〇〇人程度と市史にある。

二 三島通庸地頭の改革

徳川幕府が倒され明治になると、日本は、封建社会を脱し、西洋の政治、社会、経済、産業、教育、文化をとりいれ、西洋化、近代化による国づくりに邁進していった。

明治二年九月、鹿兒島藩庁から都城の地頭として三島通庸公が赴任してきた。

三島公は、近代日本の建設のため明治政府の盾となって傑出した働きをした人である。まずここ庄内において、東区・町区を中心とした市街地を建設し、これと一体となった移民政策により、六〇戸の商家と二六〇戸程度の士族を招いた。移住した人々には屋敷、住宅、店舗、厩、湯殿、田畑等を与えるという

生活の基盤が保障された画期的な政策であった。また教育を重視し、鹿兒島から三原叢五氏を招き、士族の子弟教育を行った。さらに庄内（都城間（現在の霧島公園線）、庄内（谷頭）志和池間の道路建設、庄内川の河川改修、茶や桑の奨励、敬神の心を養うための神社の創建など、今で言う「まちづくり」の基盤を二年足らずで整えたのである。

三 庄内新時代への躍動

まず、移民政策によりパワーの源である人口を増やしたことがある。そして都城の中心部以外には商工業が乏しい時代に、商店街を起こすということは、新たな中核となる町をつくるという大いなる挑戦であり、強い意志と戦略が感じられる。また、幅員七・二メートルの道路整備は、人と物と情報の新たな流れを刺激するものとなったであろう。士族の移住に先行して商家を入れたことは、移住者の需要に応えることと併せて周辺の村々もマーケットに組み込んで、新商店街の一気に活性化を企図していたといえる。願心寺から旧宮竹商店までの三島通りには、染物・大工・指物大工・車大工・茶・木賃宿・鍛冶・蹄鉄・博労・豆腐・下駄・米・たばこ・呉服・肥料・こうじなどの店が並んだ。店の人々は、鶏鳴に起き夕べに星をいただくまで商

いに励み農村とも信頼関係を築いて商いの輪を広げていき、庄内・西岳・山田・志和池・横市・財部・末吉から人々がやってきて大賑わいであった。

三島通りにあった先人達の中には、高橋家初代吉五郎氏、持永家初代善吉氏・太平次氏兄弟、二代善一氏、熊原家初代曾兵衛氏、東家初代乙吉氏、大浦家初代六兵衛氏、大浦家初代利吉氏、南崎家初代常右衛門氏、二代常太郎氏などが知られているが、通りの誰もが一体となってまちの発展を支えたに違いない。さらに、こうした方々の遺志を引き継いだ子孫が政財界等で活躍されている。

四 人を育てる風土の醸成

日本の近代化にとって、教育の拡充整備は最重要課題の一つであり、明治五年の学制により小学校が開校された。これに先立つ三原叢五氏の最初の門下生には、歴代村長を務めた清水彦四郎氏、杉村実徳氏、前田政右衛門氏、丸目健蔵氏、蒲生才蔵氏、福留弥七氏そして国会議員にもなった坂元英俊氏などがいた。

教育を重視する考え方は、三島公や三原氏から薫陶を受けた人々を通して庄内の気風となり、進学や就職で上京した庄内出身者達が優秀な教師として東京在住の島田丑弥太氏を庄内に幹

旋し、庄内村は東京の大学で有為な人材を学ばせている。また明治二〇年創設の観瀾舎は、「小学校卒業生以上もしくはこれに均しき学力あるものにはやや高尚なる普通学科を授く。」という坂元源兵衛氏の発案により、私立学校として創設され、二四年まで運営された。その後は、地区の青少年教育の道場として維持され、昭和二二年頃まで続いた。こうした取り組みが庄内の「頑張る、負けない、向学心旺盛」な精神風土を醸し出し、有為な人材を輩出してきている。

五 願心寺の創設

約三〇〇年もの長い間の浄土真宗の弾圧が終わり、住民の解き放たれた熱い信仰心と、京都の本願寺と開基住職・大河内彰然師（兵庫県出身）の熱意により九州屈指の寺が誕生したものである。門徒数一〇〇〇戸。本堂建設には京都から大工を招き六年をかけ、庭園造りには奈良から梅本栄次郎氏を招き、石垣や石塀は鳥取県出身の石工徳永長太郎氏が携わった。このような大事業をなし得たことは、庄内がそれだけの財力と労力を投入できる協力一致の力があつたということである。

寺が地域における一つの心のよりどころとして、また人の集まりは商店街の賑わいにもつながり、さらに建築や石工の技術

が村に移転され、美しい街並みが創られていった。そして現在、寺の本堂と山門は国指定の登録有形文化財であり、「石垣のあるまち庄内」として町の魅力が発信されている。

六 明治一三年の庄内の状況

日向地誌（明治一七年完成）によると、都城市域の一九村における庄内（安永村）の状況は次の通りである。移民政策の効果がはっきりと見て取れる。

戸数 六六八戸（宮丸村一〇〇三戸、下長飯村八三〇戸に次

ぐ。）

※宮丸村は、都城の商業地域である上町、中町、下町を含む広大な地域であった。

下長飯村は、藩政時代には行政の中心地であった。

次ぐ。）

人口 三九四四人（宮丸村四五八六人、下長飯村三九四七人に

農業 米三〇〇石、楮皮三〇〇貫、茶一〇〇〇斤、紙一五〇〇束。

田 三六三町 （一九村中最大）

畑 五八七町 （横市村六〇二町に次ぐ。）

商業 五〇戸 (宮丸村四八六戸、下長飯村一五六戸に次ぐ。)

工業 三〇戸 (宮丸村五七戸に次ぐ。ほとんどの村が農閑

期に営んでいたようだが、安永村だけは専業で営んでいた。)

牛 六九四頭 (一九村中最大)

馬 一〇六四頭 (一九村中最大)

七 明治二一年の庄内の状況

戸数 七二三戸

人口 四三四六人

田 三六四町

畑 七二二町

八 明治二二年、庄内村誕生

安永村と西岳村が合わさって庄内村となる。

九 明治二四年、庄内村から西岳村が独立

一〇 前田用水路

水流し工法など水路開削技術に長けた坂元源兵衛氏は、三島通庸公が西岳から庄内に招いて重用した人である。源兵衛氏は、関之尾二〇町歩の開田要請を受けて、明治二〇年頃、関之尾の滝の上流から取水すべく隧道工事に着手した。岩盤とシラス層を穿つ隧道(延長二七二メートル)工事は難航したが、二四年に完成し、一六町歩の開田に成功した。次に、千草地区の開田要請を受けたが、神田の地点で資金が不足して工事は停止。このとき、前田正名氏と会し、三二年、源兵衛氏は水利権を前田氏に譲渡し、野々美谷原まで延ばして、六〇〇町歩の開田を目指すことになった。源兵衛父子はこの工事に顧問格で参加することになったが、用地買収は子の英俊氏の奔走によって成立した。前田氏は、ボラ土壌対策や開削工法を主張する源兵衛氏を無視し、東京の技術者のトンネルや架け樋による工法を採用し工事は進められた。またこの事業に付随した志和池三〇〇町歩への丸谷川からの交換水路の建設では、前田氏は五〇〇間のトンネル建設に着手したが地下水に妨げられ中止。そこで、見かねた源兵衛氏が水流し工法によって掘割を完成させた。三三年六月に前田用水路が完成し、開田が行われたが、三五年、堤防の損壊や西谷暗渠の破壊、小田川の架け樋が崩落する事態

が生じ、前田氏によって修繕が行われ、三六年から田を植えることができた。ところが、三七年、架け樋に不安を感じた地元委員会が、決議をもって前田氏に築堤への変更を要請した。これに対して前田氏は資金的に困難と拒否したため、源兵衛氏は奮起してすぐさま築堤工事に取り掛かり、暗渠部分にかかる経費は前田氏の縁者（慶田政太郎氏）から資金提供を受け、住民は田を作る人も作らぬ人も奉仕で工事に参加して築堤が完成した。三七年五月のことであった。前田用水路は、前田氏の資金力と源兵衛氏の技術力そして住民の奉仕によって完成されたものであり、開田面積は二一三町歩。源兵衛氏は、開田により田八町歩贈与の約束が果たされることはなく、もっぱら住民のためになることに力を貸すといった姿勢を貫いた人であった。

一一 明治三九年、庄内村是（村長・蒲生才蔵）

町村是は、「町村の経済等の現状を把握し、将来の町村の方向性を考えさせ、町村財政の改善を図ろうとする事業」で、全国的に展開された運動。宮崎県では、優良町村の調査を先行させるとして、一三町村が指定され、北諸県郡からは「勤勉」、「模範」の庄内村が選ばれた。

風俗人情 質素勤勉にして順良の風あり

繭の生産 昨年、九州沖繩八県連合共進会において一等賞三

名

戸数 九四六戸

人口 五七八四人

農業 七七九戸

歳入 四一万四四〇二円

歳出 三九万一一八四円

収益 二万三二一七円

目標 基本財産の養成、農業教育の普及、普通農事の改良、農具の改良、耕地整理、河川改修、勤勉貯蓄

の励行、植林

七年後の村力増進目標

米作 三万九二五円

養蚕業 二万七九〇三円

財産収入 二万三二一七円

目標達成の手段 「共同一致」、「誠」

一一 大正三年、庄内村治要綱（村長・坂元英俊）

町村治要綱は、町村是策定から八年が経過したため、宮崎県

独自で、町村にこれまでの計画を評価させ、さらに将来の計画づくりを行わせようとしたもの。庄内村治要綱では、次の通り、村是の目標が達成できたことを示している。

戸数 一〇五〇戸

人口 七〇七七人

米作 五万二九一五円の増加

養蚕業 六万七三五〇円の増加

基本財産 五三六二円増加

一三二 先賢の人々

庄内を代表する明治の先賢として、ここでは紙面の都合上四名の方々を紹介したい。

蒲生才藏氏は、庄内村が東京に留学させた学生の一人である。庄内村になって一〇年後の明治三二年、蒲生氏が養蚕業で名を挙げたところ、村長の辞職があり、急遽村長に推薦され、米作、養蚕、教育、税務、基本財産の養成、村役場の改築や事務整理、勤儉貯蓄について村政改革を行い、日露戦争の出征兵士の慰問、救助にも力を入れるなど大いに手腕を発揮し、優良村に導いた。四一年に退いたが、四三年、村長の辞職により復帰し、四五年には優良村として表彰された。

坂元英俊氏は、坂元源兵衛氏の長男で、慶應義塾で英語を学び、帰郷して村議、県議となり民党派のリーダーとして活躍。明治二八年から三二年にかけて台湾民生支部官吏を務め、帰郷後村議、県畜産組合中央事務所長、郡会議員を経て、三五年から四回衆議院議員に当選。そして、大正二年〜四年、昭和一年〜一四年に庄内村長を務めた。また、前田用水路建設においては、源兵衛氏の片腕として、手腕を発揮した。

宮田孝之助氏は、明治一六年、桑の木を植えたことがきっかけで養蚕に魅かれ、小学校教師をやめ蚕の飼育を始めた。

やがて蚕病対策に取り組みこれに成功し、これを村内にも広めた。さらに養蚕の有利性を説き、桑畑用地を貸し付け、組合を組織して養蚕教師を雇った。自らも先進地を視察し、養蚕家の視察も支援した。三三年には蚕種の製造に着手し村内の者にも分与した。また貯蔵庫を建て、貯桑室、蚕具、消毒室の新設など施設を拡充するなど、常に村の指導的立場で、農家の所得向上に貢献した。そのほか庄内小学校への校舎の寄贈、道路、水路、開墾、種籾改良等にも尽力した。

南崎常右衛門氏は、三島地頭の移民政策に応募し、それまでに研究を重ねていた茶樹を植え、茶業を開始した。やがて村内

や周辺の人々に茶を勧誘し、指導した。明治二三年、製茶製法の改良と販路の拡大のため、横浜、神戸、長崎などを調査し、海外輸出には静岡の緑茶がもつとも優れていることを知り、伝習生を派遣し製法を、学ばせた。そして日向製茶の研究を進め、庄内や近辺の同業者を指導し、普及に努めた。こうした努力が実り、二八年には神戸港に出荷した日向改良製茶が「米国輸出向け最適当との好評」を得る。三〇年には、神戸市茶業組合長から銀杯を授与され、日向茶の名声を高めた。また、製茶のほか、紺屋、植林、蚕業、荒物商など事業の多角化を行い、経営の安定化を図った。

十四 結び

そこには、選挙で選ばれた村長が、傑出した見識をもって財政基盤を確保しながら、産業や教育、社会基盤の整備にリーダーシップを発揮することによって、地域を発展させる姿。すぐれたエリートとして学問を積み、地方議会議員から国会議員として政治に関わり、さらには国際経験まで踏まえて首長として地域発展に努める姿。時代の成長産業を嗅ぎ取り、進取の気性で研究に取り組み、その成果を地域に提供し、人々の所得向上に貢献するとともに、幅広く社会の発展に寄与する姿。そして移

住地に自らの夢を重ね、製茶業における製茶法、販路拡大に境地を開き、同業者を指導・支援しながら茶のブランドを確立し地域の発展に寄与するとともに、経営の多角化にも取り組み、地域発展に寄与する姿が見て取れる。

三島公が近代化に向けて準備してくれた基盤をもとに、明治の庄内というステージでは、こうした先人達をはじめとして、様々な個性が躍動し村社会を押し広げていった時代ではなかったかと思う。便利さと豊かさを獲得した現代とはかけ離れていても、厳しさや不自由の中にも、人のきらりと輝いていた時代に見える。

明治の庄内の人々が大事にした「質素勤勉にして順良の風」、「共同一致」、「誠」といったものが、いま改めて戒めのように心を吹き抜けていく思いがする。

参考文献

- 都城市「都城市史通史編中世近世」
- 都城市「都城市史通史編近現代」
- 庄内の昔を語る会「庄内」
- 前田政右衛門「庄内新郷立由緒」
- 川上富三「日向の国の六ヶ月」

史・資料

庄内小学校の昔

東 区 坂 元 徳 郎

はじめに

私は昭和十一年四月、「庄内町立庄内尋常高等小学校」に入学しました。

学校は六年生までの小学校課程と二学年からなる高等科課程が併設されていました。この高等科には、乙房小学校と横市小学校の六年卒業生も通学しており生徒数千八百名を超える県下屈指の有名なマンモス校でありました。そして学業成績も他に比べて秀逸であると先生から聞かされ真否の程はいざ知らず私達は「庄内尋常高等小学校」の生徒である事を大変誇りにしていたものでした。

この誇りある「庄内尋常高等小学校」は明治三年に創立され

た上庄内郷の「郷校」をその起源としており、明治五年の「学制」頒布以来、教育制度改革の渦中で校舎の新築、移転、増築そして不慮の火災、戦災等幾多の変遷を繰り返して今日を迎えています。

今回は、この「庄内小学校」の昔について昭和三十九年三月四日に発行された「庄内町立庄内小学校 学校九十五年史」(※以下『学校史』と略す)を基調にして、『都城市史』や手元の史料を漁りながら明治の昔を辿ってみる事にしました。

なお稿中「庄内」で示す地域は都城市と合併前の庄内町の地域を指しますので念の為

一、「庄内小学校」の起源

明治二年秋、都城から庄内の城山に役館を移した三島地頭が「庄内のまちづくり」に精力を注いだ事は有名な史実であります。

翌明治三年七月には、現小学校正門下の末原齒科医院の付近に教場を新築して上庄内郷の「郷校」を創立しました。教師として鹿兒島から三原叢五先生(三十六歳)を招聘して庄内の子弟の教育に当たらせました。これが通説「庄内小学校の起源」であります。

小学校正門脇の「三原先生顕彰碑」の碑文に『先生ハ三原叢五ト称ス、鹿児島ノ人、明治三年七月地頭三島公ノ招聘ニ応ジ吾ガ庄内ニ来タリ、初メテ学校ヲ興シ親ラ教育ノ任ニ当タラル云々』とあります。

この「郷校」が設立された時、偶々七才であった私の祖父英俊は入学を許され三原先生から直接指導を受けた生徒の一人であり「教場は萱葺きの一間きりの板の間であった事、生徒は土族の男の子だけで、三十人位居た事、三原先生の他に新穂嘉藤太先生から習字や撃剣の型を教わった事、そして三原先生は近くの民家に居住され奥さんと幼児の三人暮らしであった事」等を語っていました。なお、この三原叢五先生の「郷校」に於ける授業の様子は『学校史』に前田政右衛門翁の談話を「明治初年の学校」と題して市園辰夫先生が書いておられます。また『庄内十九号』に「庄内の明治維新」と題した拙稿もありますので重複を控えます。

なお、『学校史』には学校の起源を「明治二年七月三日」と明記してありますが、これについては疑問がありますので後述させて頂きます。

二、「学制」により庄内上等小学校 発足

明治五年八月、政府は「学制」を頒布しました。

これは日本最初の近代的学校制度を定めた法令で、従来の藩校、郷校、私塾、寺小屋等を廃止し、新しい教則を定めて「学校」を開設し、そこへすべての国民を就学させて「必ず邑二不学ノ戸ナク家二不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」としたものでした。そして大体子供百人に小学校を一つと言う計算で設立が進められました。

「そして小学校は上等小学と下等小学、女児小学、村落小学、貧人小学等七種類に分けられています。これは国民個々の生活の状況を勘案して創出された学校種で、すべての国民が無理なく就学出来るように企図されたものでした。

しかし「学問は国家の為にするものではなく、自分の為にするものであるから、学費を国家に依存するのではなく、民費で負担することが原則」となっていました。

この為、学校の運営費は授業料、寄付金、及び市町村費で賄う事が原則でした。庄内の場合どうであったか史料が見当たりませんが、村としては校区の設定や学校の場所、負担金の割り当て等多数の問題を抱え大変だった事が想像されます。

なお、明治三年に設立された庄内の「郷校」は、この「学制」

の頒布により、六才から九才まで四年間の下等小学と十才から十三才まで四年間の上等小学を併設した「庄内上等小学校」として発足しました。

『学校史』には「明治五年都城から教師二人差し入って日課表を制し、机、腰掛けその他の器具を備え、読書、算術、作文等を受け、やや今日のような小学校の体裁を備えるようになった(学制が定まった)」とあります。

『宮崎県公立小学校表(明治八年)』によりますと、当時の庄内に設立された小学校は庄内上等小学校と庄内女児小学校、干草小学校、乙房小学校、平田小学校、の五校が記録されています。

ちなみに生徒数を見えますと庄内上等小学校男百八十名、庄内女児小学校女六十八名、干草小学校男五十一名、女三十四名、乙房小学校男五十八名、女二十六名、平田小学校男三十名、女二十五名と記録されています。

なお北諸県郡内には庄内の六校を含めて五十の小学校が設立されていますが、その中で、都城、三股、高城、庄内の四校が「上等小学校」と記録されています。

三、明治七年、学校移転と、その敷地の事

『学校史』に「明治七年十月、軍神馬場に小学校を新築した」

とありますが、これは「学制」の施行によって生徒数が増加し、従来の教室が手狭になったので「軍神馬場」の広場に校舎を新築してここに学校を移転した事を示しています。(図1)

この「軍神馬場」とは現在のJ A庄内支所敷地一帯を指しますが、この広場はその昔、釣璜院の堂宇の建っていた処で、現存する墓石群はこの境内の南端に位置します。

釣璜院の事については『庄内十八号』の「庄内の重要史跡山久院と釣璜院」と題する拙稿をご参照ください。

(図1)



なおこの広場は、明治初年に結成された常備隊の訓練場として使用されていましたが、明治五年の徴兵令公布に伴い常備隊

は解体されましたので、広場はそのまま放置されていたもの
思います。

『学制百年史』の解説によりますと、「学制」により全国的に
急遽設立された学校の殆どは、お寺を利用したり大きな民家を
利用したりした」とありますが、「荘内上等小学校」は暫くの
間は「郷校」の校舎をそのまま使用していましたが、軍神馬場
に移転した校舎は一体どんな造りだったのでしょうか。記録に
は「新築」とだけあります。

四、明治十年、西南戦争終息後の荘内小学校

『学校史』に「明治十年の西南の役では校舎は病院に代用さ
れ一時廃校の姿になった」との記述がありますが、この西南の
役には庄内からも多数の父兄が出陣し、校長の三原叢五先生も
鹿児島に帰られて薩軍に投じられましたので学校は自然閉校に
陥ったと古老談にあります。

戦役は九月二十四日西郷隆盛の自刃によって終息しますが、
『学校史』には明治十一年に内山校長の元で再び開校したと記
録してあります。

そして明治十一年十二月の「荘内上等小学校」の卒業式には
鹿児島県知事川野道利並びに県学務課長が臨席されたとありま

す。

私の祖父英俊もこの時の卒業生の一人で「卒業式は大変権威
あるもので知事の前で卒業試験を受けた」と語っていました。

学校が始まって暫く経ってから三原校長先生がヒョッコリ
帰って来られました。学校は既に都城から内山校長を迎え新体
制で始動していましたので、村役場としては三原校長先生の処
遇に困り、菓子野に分教場を創り、そこで教鞭を執って貰う事
にしました。現菓子野公民館の場所が分教場跡です。三原先生
はこの分教場で六十歳まで教鞭を執られ六十八歳でこの地で没
せられました。この分教場は萱ぶき屋根の小さな家で家族も居
住されていたそうです。この家は終戦直後の枕崎台風で倒壊し
たと古老谷口さんから聞いています

『日向地誌』に依れば明治十三年に調査された荘内小学校の
生徒数は百四十三名、荘内女児小学校四十名となっています。
ちなみに干草小学校男四十五名、女六名、乙房小学校男六十一
名、女一名、平田小学校男三十二名、女八名とあります。

五、都城市史による当時の状況

就学督励とその対策 「明治五年の「学制」の頒布は従来の
学校を廃止して近代的教育を創出することにあつた。しかし小

学校での学習内容はアメリカの教科書を翻訳したものが使用される等、当時の国民の意識や生活とは大きくかけ離れていた。加えて学校での学習時間は午前八時より午後四時までの長時間で、結果的に家庭から子どもの労働力を奪う事にもなっており、学校に対する不信や反発が子供の就学を妨げていた。さらに女子教育に対する無理解から女子の就学率は極めて低く、就学ゼロの地区も数多くみられた」また「明治七年の就学率は四十%に達せず就学しても三分の一は欠席の状況が続いた。」とあります。

明治十三年、改正教育令が公布、その中に「学校に入らずとも別に普通教育を受くるの途ある者は就学と做すべし」とあります。学校以外で教育を受けている者は就学した事にみなすと云うものです。

明治十九年、「小学校令」が制定され、小学校は尋常小学校「四年制」高等小学校「四年制」との二段階とし尋常小学校を義務教育とした。この小学校令の中に「土地ノ状況ニ依リテハ小学簡易科ヲ設ケテ尋常小学科ニ代用スル事ヲ得」と言う条項があります。この小学簡易科は家庭の都合で就学出来ない児童や授業料を納入出来ない家庭の児童の為に授業料を免除し修業年限を三年以内とし簡易な教育を行うものでした。この結果簡易科

小学校が大幅に増え全体の八十六%ヲ占めたとあり、その中に庄内では乙房小学校、干草小学校、平田小学校、川崎小学校の名が出ています。

なお明治二十三年には、この小学校令が改正され尋常小学校と高等小学校に補修科を設け、簡易小学校は廃止されています。私は、この時乙房を除く他の小学校は「庄内尋常小学校」に併合されたものと推量します。

明治二十五年、第二次小学校令の公布、この中で「市町村長の許可があれば学校に通学しなくとも、家庭学習により就学義務が果たされる」との規定があります。

また子守りの為に就学出来ない女兒の為に「子守り教育を採用し、幼児を連れて登校することを赦し全教科の履習も強制せず修身、読み書き位を標準とした」また「尋常小学三、四年生に達した女兒には他の時間を割いて裁縫を教える事にし就学を促した」とあります。

そして、県は「就学率優秀校に「就学表彰旗」を授与し、表彰された町村役場や学校は常時旗を掲揚してその名誉を誇示した」ともあります。

国民皆学が至上命題であった当時、県は住民意識や生活状況を勘案して、学齢児童をとにかくにも就学させることに意を

用いた事が窺えます。

明治二十三年には「教育勅語を賜る」、続いて明治二十五年、「御真影拝戴」との記述があります。これについて『市史』の一項に「教育勅語は天皇制国家の教育支柱として重要な役割を果たした」また「御真影」について、小学校における祝日大祭日については「天皇陛下及び皇后陛下の御影に対し奉り最敬礼を行い且両陛下の万歳を奉祝す」そして教育勅語の奉読後勅語の内容や歴代天皇の業績などの訓話をなし「忠君愛国の士気を涵養せんことに務むること」とあります。

私もこの教育指針の中で「忠君愛国の士気」を鼓舞されながら小学校生活を過ごしました。

明治三十三年、第三次小学校令が公布、「義務教育は四年間、小学校を卒業するまで」と規定（明治十九年の義務教育令は強制力を欠いた）同年小学校の授業料免除規定が創設され、宮崎県の就学率は全国平均を上回る高い水準を保つ様になった」とあります。

そして「就学率の向上と相まって小学校教員の不足が問題となりその対応が急がれる事となった」とあります。『宮崎県教育史』に教員節区の状況が次の様に述べられています。

「師範学校も定員数を増やし教員数の増加を図ったがそれで

も明治四十年代になっても、正教員は漸く五割に留まり半数の教員を准教員、代用教員、授業生に依って補充しなければならなかった」とありこの小学校准教員の養成は、県内各郡で行われ、講習生の志願資格は年齢十六年七カ月以上の男子とし身体健康品行方正の者、高等小学校を卒業したる者、養成期間を六カ月」としています。

教員不足対策に苦慮していた事が解ります。

明治三十六年、小学校令改正があり、全国的に国定読本を使用することが決まりました。

明治四十年、第五次小学校令で「義務教育期間が六年間、授業料は免除」と規定されました。

私達が卒業した時分もこの制度に拠ったものでした。

以上『都城市史』を拾い読みしました。

六、上ん学校と下ん学校

『学校史』三十三年の項に「生徒次第に増加し運動場、校舎が狭隘を告げるようになり運動場二百六坪を拡張した」とあります。簡単な表記ですが、これは、現校地即ち軍神馬場の校地は三十三年に運動場二百六坪を拡張した。これでもう軍神馬場の校地は校舎、運動場とも拡張の余地が無くなった事が理解さ

れます。(図1)

また『学校史』年表の明治三十四年の欄に「敷地九四二坪を増加し三十五年度にかけて校舎百三十四坪を増築した」とあります。

これは、「軍神馬場の校地には増築余地が無いので「お軍神」を挟んだ北側の上の段(現在の校地)に初めて校舎が建った事を表しています。其の後は新しい上の敷地の拡張工事が続き、明治四十一年には校舎増築も行われた事が記録されています。

これと併せて軍神馬場の旧校舎を上校地への移転も始まりました。記録で明らかのように当時庄内小学校は「お軍神」を挟んで上と下に分かれて学校が存在した事が分かります。

『学校史』大正三年十月二十三日の欄に「明治二十五年に建設した校舎全部を上校舎の敷地に移転し、敷地千五百九十九坪を拡張し、深さ二丈余の谷を埋め校地とした。従来の校地(軍神馬場)は一変して運動場となり、新校地は高燥で生徒教養上最良好の位置を占めた」とあります。(図2)

この上ん校舎への大移転は一挙に行われたものではなく、明治四十一年に始まって大正三年まで約七年間かかって行われた事が徳永こよさんの追憶記で判ります。

私の耳に残っている「上ん学校」と「下ん学校」の呼称には

このような経緯があったのでした。

七、「教員駐在法」の制定

『学校史』明治三十四年の項に「校長山下氏熱心にその職に勉め学校、家庭の連絡を計り社会教育の一端とする為に各区に夜学会を興し教員駐在をはじめ同窓会、婦人会を設ける等計画する所が多かった」とあります。

これについて『都市市史』に「庄内村では明治三十六年山下校長の時、県下に先駆けて「小学校教員駐在法」を制定し夜学所を設置した。この「教員駐在法」は明治三十六年に山下校長先生の発想で庄内尋常高等小学校が始めて実施したもので、教員を各集落に居住させ夜学所を設け補習教育を実施する傍ら父兄会、婦人会などを開いて社会教育の指導に当たり多大の効果を挙げた。そしてこの方法は県内各地に広まった」とあります。その時の庄内での夜学所の所在地は関之尾区、西区、町区、諏訪区、川崎区、平田区、今屋区、干草区、宮島区、乙房区となつています。

この制度は大正時代を通じて行われたとありますが、現在各集落の年輩者が云う「ヤガッコ跡」の地名はこの「夜学所跡」に他なりません。

八、「全国優良校」庄内尋常高等小学校

『学校史』明治四十年に庄内小学校は岩佐校長の元で「学校教育の成績顕著であるによって宮崎県から表彰を受け金三百円を受領した」とあります。

引き続き四十二年「優良小学校として文部大臣から金百円を交付された」とあります。

記録にある通り当時の庄内尋常小学校は就学率、出席率とも県内随一の優良校であった事に間違いありません。

九、男女別学

『都城市史』に依れば「明治六年に創立した庄内女児小学校は引き続き就学率が悪く明治十七年には入学児童二十名、出席者は七、八名となったので庄内小学校に併合せざるを得なくなった」とあります。

しかし校舎は別棟で男女が混じる事は一切無く教科内容も別々であったとあります。

時代が飛びますが、大正十五年四月「女子校分立」との記録があります。その場所は現在の庄内中学校の処でした。しかし僅か五年後の昭和五年三月には「男女両校合併」とありますから、又元の学校に併合された事が判ります。しかしこの時も校

舎は東校舎と西校舎に分けられ教科内容も別々であった事が記されています。

これは儒教で云う「男女七才にして席を同じうせず」の訓へに依ったものと思いますが、基本的には小学校三年生になると男児と女児は分けられて別々の教室で勉強していました。私が過ごした小学校時代もそうでした。

十、大正八年 校舎全焼

校舎の大移動が終わり一段落と言った所に今度は世間を震撼させる大事件が勃発しました

ご存じの通り大正八年九月二十二日の校舎全焼と言う大惨事です。正門脇の記念碑に刻された碑文を転記します。

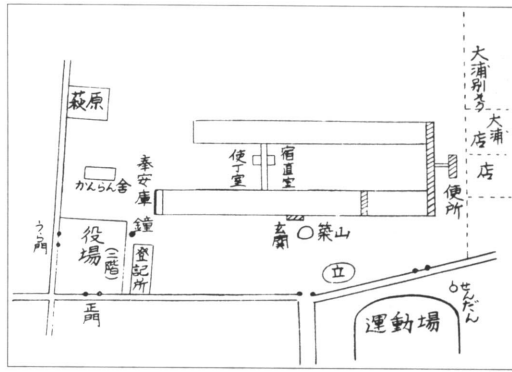
維時大正八年九月二十二日
午前一時庄内尋常高等小学校
ハ祝融ノ災ニ罹リ校舎ノ全部
教具備品悉ク烏有ニ帰セリ是
本村未曾有ノ椿事ナリシ然ル
ニ村ノ民衆ハ期セズシテ猛然



大正8年 校舎火災記念碑

奮起シ経費ノ寄付ヲ競イ新築ノ急ヲ叫ブ其声全村ニ横溢セリ此ノ報一タビ伝ハルヤ異郷ニ在ル者ハ母校再興ノ資ニ義襄ヲ絞リ又都城三股五十市西嶽志和池山田ノ各町村有志者ハ深厚ナル同情ヲ寄セ儀金ヲ贈惠セラル我村ハ寄付者芳名ヲ簿冊ニ録シテ永久之ヲ後尾ニ伝フベシ而シテ其寄附ノ総額実ニ八萬余圓ニ達シ経営九ヶ月ニシテ工全ク竣へ本日落成ノ式ヲ挙ゲタリ由來我村民ハ常ニ和衷共同シ変ニ処シテ動ゼズ公事ニハ私用ヲ欠クモ敢テ辞セズ愛郷心ノ敦キコト後世子孫ノ龜鑑トナスニ足ラン故ニ其ノ梗概ヲ叙シ以テ後世ニ伝フ

大正九年十一月十日



(図2) 大正8年大火当時の校舎のもよう

庄内小学校火災記録(当時の学校日誌より転記)

大正八年九月二十二日 月 晴

嗚呼大正八年九月二十二日コノ日コソハ我校トシテ、我村トシテ終生忘ル可ラザル実ニ悲惨痛恨極リナキ日ナリ。恰モコノ

日午前〇時小使室ヨリ出火シ疾風迅雷の勢イヲ以テ全校舎焰ニ包マレ、発火後一時間ニシテ全校悉ク灰燼ニ帰セリ。然ルニ宿直訓導黒川寿助氏、訓導島田次男氏、使丁南崎藤太郎氏、藤崎武助氏、山之城深氏死力ヲ尽シテノ機敏ナル活躍ニ因リ畏クモ先帝両陛下今上陛下の御影ヲ無事御避難申上ゲタルコトハ実ニ不幸中ノ幸ニシテ右五氏ニ対シテ深く深ク感謝スル所ナリ。又本村民諸氏及他町村消防夫諸氏ノ逸早く駆ケ付ケ身ノ危険ヲ省ミズ必死ノ努力ヲ以テ消火並ニ諸物品ノ持出シ等ニ尽サレ多少ナリトモ諸物品の無事ナリシヲ得タルハ亦深く感銘シテ感謝スル所ナリ。然シテ他ニ類焼セズ単ニ本校ノミニ終リシハ之亦天祐ト云ハズシテ何ゾ。尚火災ニ付テノ詳細ハ左記小牧校長ノ提出シタル報告書ニ依リテ知ルベシ。コノ日小学校校長ハ払曉成合郡長山下郡視学ヲ問イ火災ノ顛末ヲ報告スル所アリシヲ郡長郡視学ハ直チニ出張セラレ火災ノ跡ヲ視察シ尚善後策ニ付坂元村長小牧校長ト協議スル所アリタリ。

一、多方面ヨリ多数ノ見舞ヲ受ク

上
一、児童ニハ登校ヲ禁ジ職員一同ハ焼残品ノ調査ヲナス 以

なお、当時の小牧校長より成合北諸郡長に提出された火災の顛末を記した報告書も『学校史』に転載されていますので重

複を避けます。

十一、昭和十一年 講堂、新校舎、運動場成る

『学校史』の昭和十一年三月二十一日の項に「講堂、二階建教室（十七）平屋立特別教室（七）手工準備室竣工、従来の運動場は役場農協等の敷地となり従来の役場敷地に二階建校舎並びに特別教室建設（現西校舎、南校舎の処）、校舎北側の池を埋め立工事をして運動場とした。上水道、排水工事も併せ行った」とあります。（図3）

私の眼に焼き付いているあのピッカピカの大講堂や二階建の校舎、そして広い広い運動場、県下随一と言われた「庄内尋常高等小学校」の威容はこの時成ったもので、奇しくも私はこの年入学した一年生でした。

なお上記文中の「池を埋め立工事をして運動場とした」と言う運動場は現在の運動場の事ですが、この造成工事の



昭和10年頃の町役場

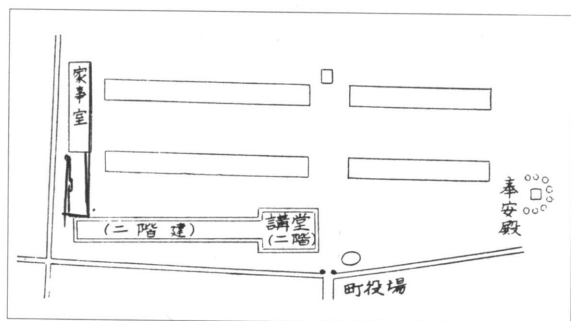
事に付いては『庄内十三号』に「庄内小学校の運動場造成工事」なる拙稿が有りますのでご参照ください。

十二、庄内小学校 戦災略史

昭和二十年八月六日、私の記憶に残るあの講堂をはじめ広大な校舎が正に終戦直前になってアメリカ軍の空襲により焼失すると云う誠に残念な悲惨な結末を迎えました。

『学校史』に登載されている村永迪夫先生の玉稿「庄内小学校戦災略記」を転載します。

昭和二十年八月六日、庄内小学校はアメリカ軍の空襲によって古校舎二棟を残して二階付き大講堂（二〇〇〇名収容可）二階校舎（現在西区に行く道路上の校舎全部）西校舎（現在の所、ここに教室二、理科室、理科準備室、家庭科教室・・広い日本間家庭科実習室、洗濯室、更衣室等があった）中校舎、北校舎、使丁室、宿直室、衛生室、



(図3) 昭和20年戦災前の校舎略図

以上が焼失した。

当時米軍の南九州上陸に備えて集まった陸軍部隊が庄内にも駐屯し学校、お寺、民家等まで其の宿舎になった。(南九州の食糧衣服等の本部が庄内にあった) そのため学校の児童生徒は各部落の夜学校(今の公民館)に分散授業した。学校には軍隊と共に学校の本部があり校長、首席の先生方が居られた。御真影は城山に安置してあり(城山に軍隊が掘った多くの穴があり食糧衣服等が保管されていた)書類一切は農事センターの所に土を掘って穴の中に入れてあった。このため焼失をまぬがれた。ピアノ、理科備品、図書等一切は焼失した。児童生徒は夏休み中であり、分散していたので全員無事であった。

この日昼頃、都城市街の空襲に続いてアメリカの飛行機数機は庄内上空に飛来し、機銃を以て掃射後、焼夷弾を投下した。その一弾が講堂と二階の継ぎ目に命中し燃えあがった。同時に町区、西区の一部が火災となった。

米軍機が飛び去ると町民も軍人も皆が消火に当たり、火災は一部分の消失で済んだ。(筆者註、学校の風下に当たった民家七十二戸が被災)米軍機から発射する機銃弾の音は、防空壕の中で聞いていて不気味で恐ろしいものであった事を思い出す。

間もなく八月十五日の終戦となり、軍隊も引き揚げた。古校

舎二棟を残した学校は、直ちにバラックの仮校舎建設が始まり町内殆どの大工さんが集まり着工され、二十教室位が数日で出来上がり、九月の二学期からは全部の児童生徒が授業を受ける事が出来た。敗戦の中にも教育だけはゆるがせにできないと云う町民各位の熱意があらわれた。短時日にバラックが建てられた事は特に心に強く残った。

それから昭和二十一年度はこの状態で授業が行われ、二十二年度になると新学制が定まり中学校が発足し従来の青年学校校舎が中学校となった。(現在の庄内中)

小学校は二十二年度工事として北側、中校舎新築、昭和二十四年十月二十二日道路上の校舎完成、昭和二十八年一月西校舎落成、戦災を免れた古校舎二棟もここで無くなった。この間、昭和二十六年四月、庄内小学校が分かれ、菓子野小学校が開校した。

戦災の模様について簡単に思い出の一部を記す。

昭和三十八年二月 村永迪夫

十三、『学校史』に見る「庄内小学校の起源」について

最後になりましたが『学校史』の「教育年表」の冒頭に「明治二年七月三日、地頭三島通庸が城山の役館で子弟を集めて教

授した。是れが本校の起源である」と明記してあります。また、昭和四十五年発行の郷土学習史料「しようない」並びに平成二年三月十日発行の学校創立百二十周年記念誌でも「明治二年七月三日」を学校の起源としています。後の二編は先に発行された『学校史』に準拠したものと思います。

ところが「都城市史、通史編、近現代の十七頁」に次の様な記述があります。

『明治二年九月二日、新地頭三島通庸と副役川南東右衛門が着任した。これに先立つ八月二十九日に「明日地頭衆並びに副役衆御差入二付キ（中略）客屋江被罷出居、門外で出迎へる様申し渡され・（古垣文書）」又続いて「九月十一日夜半、地頭役宅の「地頭三島弥兵衛」と大書された門標が斬り付けられる事件が発生するに及んで、三島地頭は九月二十五日鹿兒島に引き揚げた（十月に再び赴任したが地元の反対が治まらず、再び鹿兒島に帰らざるを得なかった）」とあります。この記述の限りにおいては、三島地頭が都城から庄内に役館を移したのは、早くとも明治二年十月以降であり『明治二年七月三日』には、まだ都城にも来着していない事になります。

また『学校史』の「あとがき」に『なお創立の日は「明治二年七月三日」と古い学校の公文書に書いてありますが、その出

典に明らかな方は御一報くださると幸せと思います』との記述があります。察するに『学校史』を編集された市園辰夫先生も学校の創立を「明治二年七月三日」とするのに疑問をお持ちのまま編集されたものと思います。

庄内を愛する一人として敢えて触れさせて頂きました。

十四、あとがき

以上、母校「庄内小学校」の昔について筆を執りました。

明治大正時代の教育振興と言う大きなうねりの中で「庄内小学校」も改革に次ぐ改革、そして下ん学校から上ん学校への大移動、大正八年の校舎全焼、そして昭和二十年六月の空爆による大被害等々壮絶なドラマの連続です。

複雑な改革の歴史、その内容は到底私の筆の及ぶ所ではなく、『学校史』や『市史』の転載に過ぎない薄っぺらなものになってしまいました。

最後に『学校史』に登載されている先輩方の玉稿の中から本稿に関連する興味をそそった項を寸借転記させて頂き稿を閉じます。

清水善左衛門（明治二十六年頃卒業）

私は乙房の今平小学校の簡易科において四年の課程を終え庄内小学校に転入したのですが、その当時庄内小学校は五年課程でしたので其の四年に編入されました。

山下次之助（明治三十二年～三十七年まで校長）

当時の学級数 尋常科八学級、高等科二学級

増築余地が無いので現校地に二教室増築した

当時就学、出席共に悪く県では奨励のため就学優秀町村には表彰旗を授与し、無欠席児童にはメダルを交付した。年長児童には子守りのまま出席させ特別教育をしたりして義務教育を終了させることにつとめたものだ。

私が夜学を始めたのは石川理紀之助翁と対談後の事である。宮崎県では庄内が初めてでこの後大正時代までこの夜学は村々で盛んに行われた。

岩佐彦二（明治三十九年から四十三年まで校長）

明治四十一年全国の奨励規定に依る全国表彰を受け学校は勿論全村の喜びで、茲に村民総出の旗行列が行われ全員小旗を打ち振りながら母智丘神社に参拝の列は延々長蛇を為し、この地

方初めての盛況であった。生徒の服装は和服に素足が普通であった。

吉川重一（明治三十五年四月四日、庄内尋常高等小学校入学
—明治四十二年三月二十七日高等科三学年修了、右修了後県立都城中学校に入学）

当時の義務教育—尋常科四年まで 当時の学年—尋常科四年、高等科四年 当時の学校区域 庄内校—乙房以外の全域
乙房校—乙房区

当時の学習科目—修身、算術、国語、地理、歴史、体操、唱歌、習字

地方的にも総力を挙げて戦争遂行に協力、従って世道は正義人道に徹し人心高揚して尚武の気横溢せり

入木義則（明治四十二年卒業）

鹿児島旅行は一週間前から毎日運動場の廻りを高唱しながら行進の練習、当日の服装は紺の筒袖に紺の袴、学生帽にわらじ脚絆を付け、持ち物は三食分の握り飯六個、雨傘一本、予備用のわらじ二足を長い黄色い木綿袋に入れ其の上赤毛布を左肩から右にかけて木銃を担いで勇ましい出で立ちであった。行程は

旅行歌を高唱しつつ母智丘街道を牧之原、通山、敷根を過ぎ福山に到着、夜営、翌日国分から汽車の旅、汽車を見たのも始めて恐る恐る乗ったもの。

旅館に着いて夕方電燈がついた。電燈を見たのは初めてで何処に油が入っているのか分からない。マッチ一本使わず灯がつくとは実に不思議に思った。

徳永こよ（明治四十三年入学―大正七年卒業）

明治四十一年頃より大正三年にかけて全部の校舎が下ん学校より上ん学校に移転したため私は明治四十三年に上ん学校に入りました。

現在の運動場は深い谷で水田と池があり、私の父がその池を役場より借りて養魚を経営、都城に出荷していました。

大正三年一月十二日の桜島噴火の時は四年生の三時間目の時でした。日光さえ見えず傘をさして学校に行きました。地上は灰が積もり野菜な



埋められて運動場になった

ど不作でした。

大浦福一（大正二年入学―大正九年卒業）

朝礼が済めば足洗い場で水を割ってチヨコチヨコと足を洗って教室へ―

お正月の初登校日にはミカンがお年玉として貰えるので楽しみに登校したものでした。

阿久井康彦（大正四年から二年間在学）

冬の最中、裸足で霜柱を踏んで登校、教室前の水の張った足洗いの泥水の中で足を洗い、その足を拭きもせず障子張りの教室に入った。

新学期前になると都城までテクテク歩いて新しい教科書を買に行った。

木之下政義（昭和十四年から九年間教師）

校門を入ると左側には二千人を収容する県下一を誇る堂々たる講堂、それに続いて二階建十二教室、その北側に平屋建ての長い校舎二棟、少し間隔を置いて同じく平屋建ての木造校舎二棟、その西側の城山に通ずる道路に沿って南北に一棟あった。

生徒数千九百五十名、職員四十五名、五十名であった。

有屋根彦義（昭和十八年から十九年校長）

私はこの時代に他校で見られないプールの設備のあるのは、
町当局の識見の高さを思い・

さらに学校にはラッパ二十丁位が備えられてあり、出征軍人の見送りには何時も進軍ラッパを吹奏し全校児童が意気揚々と見送った。

久保秀光（昭和十四年から昭和二十一年在職）

その頃学校は関部隊が入っていて、校舎には兵隊と物資が入られ膨大な戦略物資が、城山から関之尾、財部方面までガマを掘り、米軍の上陸に備えて保管されていた。学校は各集落の公会堂や関之尾の防空壕で分散授業をした。

終わり



菅原神社（天神様）の鳥居建立

東 区 鎌 田 康 正

学校が夏休みになると各地区で夏祭り（六月灯）が始まり、賑やかになる。七月二十五日は、東区天神通りの菅原神社の六月灯。子どもたちを連れて、学力向上や家内安全を祈願した想い出がたくさんもった神社である。

今から二十三年前、神社への鉄製の鳥居加工建立について、当時の作業日誌を取り出して、昔を思い出しながらペンを執ることにした。

平成二年度に還暦を迎えられた百数名の方々による諏訪神社への還暦祝いとして、第二鳥居（鉄製）が寄贈された。平成三年三月二十八日（木・晴れ）であった。その日、神社への引き渡し式が終了した。

私も、農機具の修理や加工に追われ、お盆までに終わらずだった。お盆も今日までと言う八月十五日（木・晴れ）午後二時ごろに北天神班の森重慶高くんが、「元氣じゃったなあ」と訪ね

て来た。久しぶりの出逢いであった。森重君も当時は、左官業を経営していたので、仕事上の付き合いがあった。いろいろとお互いの仕事の話をしていると、私の同級生で益田正人君（北天神班）の話になり、その中で、諏訪神社の鳥居建立のことが話題となった。森重君は今年度、菅原神社の役員をしているとのこと。そして、天神様の木の鳥居がだいぶ腐蝕しているの、鉄骨で鳥居を加工して呉れないかとの相談であった。私もお盆前からの修理などが溜まっているので、八月末までに何とか終わらせて、九月から天神様の鳥居加工にかかるよう、段取りよく頑張るからと引き受けることにした。基礎などコンクリート関係は森重君が専門だから安心だった。

八月二十八日（水）午後三時頃より天神さまへ行ってみることにした。来住電化店（現在の宇野スポーツ店）へ寄って見る。同級生の芳照君は不在であった。隣の内田自転車店と江口板金店の間の路地を東へ約三メートルぐらいの奥にある神社まで、ユニック車が入るだろうか？「ここへ来るのは何年ぶりかなあ」と考えながら、久しぶりの参拝である。周囲の様子がだいぶ変わっていた。

神社のすぐ前に木製の鳥居があり、下の方がだいぶ傷んでいた。高さや、幅などの寸法を採っていたら、神社の左手前の

野崎兼次さんが出て来られ、「何ごッね」と尋ねられた。私は「お盆に森重さんが来られて、鉄骨の鳥居を作って呉れとのことで現場を見に来た所です」と話しますと、「その木製の鳥居は、鍋倉利美さんが作られたのですよ、三・四年前のことですよ」と教えて下さった。鍋倉利美さんといえば、昭和三十年代に熊襲踊りの副会長をしておられた人で、私も踊り手として頑張っていたので、よく覚えている先輩であった。

八月二十九日(木・雨のち曇り)鳥居加工用の鉄材を注文する。
八月三十日(金・晴れ)、午後、鉄材が入る。

九月一日(日・晴天)、朝のうちに酒・塩などで材料の御祓いをしてから、寸法を採り、切断・加工の仕事に入る。

九月二日(月・晴れ)、早朝から、前の道路がなんとなく賑やかになる。子どもたちの長い夏休みも終わり、今日から学校が始まったのだ。私も元気が湧いてきた。

九月四日(水・晴天)、森重君が出てきて、九月十五日(日)に建立したいのでよろしくとのこと。古い鳥居の取り壊しや、基礎打ちの準備をして下さる都合など、お互い色々と用事があるので、日程合わせが大変であった。私もちよūd農機修理加工が入っていたので、それを早く済ませて、鳥居加工を十二、三日頃までに終わるよう頑張った。九月八日(日・晴れ)、台

風十五号が接近したが九州上陸は免れた。平成三年度も台風発生が多かった。

十五日建立時の鳥居吊り上げに必要なユニツク車を借りる相談に、鍋倉鉄筋店へ行く。夕方、南天神班の同級生・益田正人君が出てきて、「おー、鳥居の材料が来たね。十五日の建立時は加勢するからね」と言ってくれた。大変嬉しかった。

九月十二日(木・晴れ)。鋼材取り付け部の穴あけや、鳥居上部の中心(菅原神社)の名札に錆が来ないように、ステンレス鋼板で加工などを済ませ、大部分で出来上がった。そこで、西諏訪の野崎俊春さん(宮司)宅へ行き、天神様の鳥居を十五日(日)に建立するので前日の十四日に御祓いをしてもらうようお願いする。

九月十三日(金・曇り)は、基礎打ちの準備や錆止めの塗装など済ませる。

九月十四日(土・小雨)。朝八時より野崎宮司さんの御祓いの時、霧雨が降り出したので、傘をさしての御祓いとなった。台風接近で天気悪し。日中に曇りとなる。益田正人君が今日から加勢に来てくれたので、二人で森重君の家から基礎打ちの材料(セメント・砂利・砂)、道具などの運搬を十時までに終え、襲山吉治さん宅で茶を戴いた。その後、森重君、益田君、襲山

さん、私の四人で基礎打ちをしたが、午前中では終わらず、午後三時頃までかかった。

九月十五日（日・曇り、時々小雨）。今日はいよいよ鳥居建立の日。いつもより早く起きて、ウエルダー（移動溶接機）の充電を済ませ、神社への機材や道具など朝食前に運搬を終了する。朝食後、現場で古い木製の鳥居倒しの準備をしていると、森重君、益田君、入来信高君、襲山吉治さんが出て来て呉れる。建立の打合せをしている所へ西区の池田さんがユニック車を運転して来て呉れる。直ぐに中古鳥居を取り除くことが出来る。新しい鉄骨の鳥居を組み立てていると、霧雨が降り出した。「台風十七号の余波じゃろうか」と誰かが言った。「降り込みは縁起が良かッじゃが」と言いながら鳥居をユニック車で吊り上げる。鳥居を吊ったままにして、木材などで固定し、基礎の仮枠を取り付け、コンクリート流し込みの準備などが出来上がる。長さ三メートルの梯子をかけて、溶接など全部終了。小雨降り出す。昼食の時間となる。南天神班の渡司律さん宅に昼食の準備が出来ていると連絡があり、全員渡司さん宅へ行き御馳走になりました。誠に有難うございました。

午後は基礎のコンクリート打ちなどすぐに終了する。基礎周辺を片付け、「立ち入り禁止」のロープを張り巡らして。神社

周辺の大掃除、機材や道具を片付け、車で森重君宅へ運搬。無事終了する。午後四時頃までかかる。

夜、七時ごろより森重君宅で夕食会をするという事であったので、七時に出席する。何事もなく無事、鳥居建立が終わり、みんな喜びを分かち合うことが出来、本当に有難いことだった。

九月十六日（月・晴れ）。今日は祭日の振り替え休日であり、一昨日からの仕事の疲れか、何となく体がだるかったので、工場を少し片付け、ゆっくりと休むことにした。

九月十七日（火・曇り）。今日は鳥居の総仕上げで、森重君と二人で再塗装や基礎コンクリートの最後の洗い出しなど済ませ、神社前の清掃・地ならしなど午前中で終了した。

九月十八日（水・雨天）。森重君が訪ねてくる。「神社の鳥居完成祝いのお事で連絡に来たとよ」と話す。九月二十三日の秋の彼岸の中日午後三時より、天神班（新天神班・北天神班・南天神班）三ヶ班合同で鳥居建立記念式を実施するので、ぜひ参加して呉れとの招待であった。

九月二十三日（月・曇り）。小雨の午後二時頃家を出る。先ず、天神様にお参りする。高さ三メートル五〇、幅三メートルの朱塗りも鮮やかに、大きさも神社にふさわしい鳥居が出来たと思

う。式場には四〇人近い人達でいっぱいであった。祝宴場は、神社の北側、丸目ツタ様宅の後の空き地である。そこにたくさんのシートが敷かれていた。三時になるとお祝いの挨拶である。二・三名の方が挨拶された。三時半頃になると、賑やかな声が聞こえて来るようになる。多くの先輩の方々から励ましや喜びの言葉を戴き、嬉しいお思いであった。いろいろと話がはずむ中、今でも記憶に残っている話がある。それは、鎌田さんの話で、「終戦後、天神三ヶ班で彼岸祈念など合同で実施するのは今日が初めてですよ」と。また、村井忠義さんが、「立派な鳥居が出来てよかったですよ」と話されたことである。

庄内の文教守護神・菅原神社（天神さま）の前に立つ朱塗りの鳥居が神社と共に末永く保存され、参拝者へ幸せを呼ぶ鳥居であってほしい。なお、天神三ヶ班の皆様間のご多幸とご繁栄をお祈り申し上げ、ペンをおくことにします。役員みなさんの御協力、誠に有難うございました。

平成三年当時の役員の方々

新天神班	神社役員・黒島明典さん	班長・竹下四郎さん
北天神班	役員・森重慶高さん	班長・木島勝巳さん
南天神班	役員・渡司 律さん	班長・入来信孝さん



平成3年9月23日建立



史跡探訪の足あと

東 区 帖 佐 ミ ヤ

平成六年に退職して、その後、「庄内の昔を語る会」に在籍し、その間、会計等のお世話をさせて頂きました。その関係で、この庄内地区ライフセミナー「史跡探訪」にはほとんど毎回参加させてもらいました。

この庄内の昔を語る会は発足が昭和六十二年で、すでに十八年が経過、当時中心になって活動していただいた方も何人かは亡くなっておられるし、高齢化しております。

発足時・会長さんに「野海 正治先生」で二代目を平成十二年より「坂元 徳郎先生」そして現在、平成二十二年より「山下 謙二郎先生」が就任しております。

現在、新しい体制のもと、会誌も十六号（平成十六年）を最後に七年間の長いブランクがありました。平成二十三年、めでたく十七号が再刊の運びになりました。本年は、二十号の発刊となっております。ほんとに喜ばしいことです。

そこで、この昔を語る会では、庄内地区ライフセミナーとして史跡探訪を年二回実施しております。会の発足からすでに十八年間という月日が流れていて、探訪した箇所も忘れかけておるようですので、諸資料をもとに調べてここに記載してみました。何かの役に立てばうれしく思います。

第一回探訪 昭和六十三・七・三十一 創刊号記載

坂元徳郎

坂元源兵衛翁の陶像・前田用水路取り入れ口・関之尾馬

頭観音

第二回 昭和六十三・十一・六 右に同じ

北郷資忠館跡・稚児桜・金石城

第三回 平成元・三・二十六 右に同じ

願心寺・山久院・釣璜院跡・仮屋跡・安永城址

第四回 平成元・七・二 二号記載

坂元徳郎

平田かくれ念仏洞・野牧跡・人參場・移転記念碑・平田の田のかんさあ・中平田の馬頭観音・小松ケ尾の古戦場・熊野神社・皿家の仏像・乙房神社・乙房田の神さあ・乙

房馬頭観音・乙房かくれ念仏洞

第五回 平成元年九・七

右に同じ

大隅方面

護安寺跡・今屋上村の田のかんさあ・今屋馬頭観音・庄

鹿屋航空資料館・吾平山陵・横瀬古墳

内古墳・菓子野かくれ念仏洞・三原叢五先生の墓・宮島

第十一回 日付けなし

七号記載

用水路・宮島中央権現

坂元徳郎

第六回 日付けなし

三号記載

豊幡神社・菅原神社・

八号記載

お軍神・三島通庸遺徳の碑・征清記念の碑・日露戦役記

第十二回 日付けなし

八号記載

念の碑・日露戦争従軍者名・三原先生顕彰碑

庄内八坂神社

坂元徳郎

第七回 日付けなし

四号記載

第十三回 日付けなし

九号記載

マリスタン・母智丘周辺遺跡・南州神社招魂碑・城山忠

魂碑・大東亜戦争戦没者碑・城山の石灯籠

川上神社・乙房神社(再掲)・菓子野天神社・

関之尾「やまんかん」

第八回 日付けなし

五号記載

第十四回 日付けなし

十号記載

山田別荘跡・庄内観瀾舎跡・庄内南洲神社の由来

坂元徳郎

第九回 日付けなし

六号記載

第十五回 日付けなし

十一号記載

諏訪神社

坂元徳郎

第十回 平成六・三・十一

六号記載

上・中・下平田の馬頭観音・乙房の馬頭観音・宮島の馬

坂元徳郎

第十回 平成六・三・十一

六号記載

坂元徳郎

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

第十回 平成六・三・十一

六号記載

坂元徳郎

頭観音・千草・菓子野・今屋の馬頭観音・稚児桜の馬頭
観音・妙見坂の馬頭観音・亀沢家の馬頭観音・早馬神社・

西区前ん馬場の馬頭観音・南洲神社広場の馬頭観音・ゲ

ンツド馬頭観音・上ん段の馬頭観音・観音原の馬頭観音

第十六回 平成十・九・四 十一号記載

帖佐ミヤ

北薩路をたずねて

曾木の滝・出水市の武家屋敷・長島黒の瀬戸・宮

之城湯田八幡神社

第十七回 平成十・十二・七 十一号記載

山下謙二郎

志布志の史跡探訪の記

山宮神社・大慈寺・宝満寺・平山氏庭園・志布志湾

第十八回 平成十二・九・十六 十二号記載

山下謙二郎

国分市史跡探訪記

大隅国分寺跡・舞鶴城跡・金剛寺・上野原遺跡

第十九回 平成十二・二・二十九 十二号記載

帖佐ミヤ

宮崎日日新聞社・NHK宮崎放送局・宮崎県立芸術
劇場・宮崎県総合博物館

第二十回 平成十二・九・二十 十三号記載

山下謙二郎

西岳地区史跡探訪記

千足神社・明観寺跡・高千穂牧場・グリーンヒル

第二十一回 平成十三・二・十六 十三号記載

菓子野美和子

西都原古墳・法華岳薬師寺探訪

男狭穂塚 女狭穂塚・西都原資料館・西都原古代生

活体験館・西都原古墳群遺構保存覆屋・法華岳薬師

寺

第二十二回 平成十三・九・二十六 十四号記載

長峰良文

庄内十二外城めぐり 大隅 末吉 財部を中心に

恒吉城跡・恒吉太鼓橋・八幡神社・西南の役官軍墓

地・末吉城(鶴亀城)跡・興昌寺跡・熊野神社、深

川院の跡・財部城(龍虎城)跡・川内の五輪塔

第二十三回 平成十四・二・十五 十四号記載

宮崎施設施設めぐり

帖佐ミヤ

飢肥・日南方面探訪

坂元棚田・伊東家のお墓・城下町飢肥・竹香園・油

第三十回 平成十八・二・二十二 記載なし

津掘川運河

縄文の森・隼人塚史跡館

第二十四回 平成十四・十・二十五 記載なし

第三十一回 平成十八・十二・九 記載なし

都井の岬・串間方面探訪

内之浦ロケット発射基地・鹿屋航空基地資料館

第二十五回 平成十五・二・十四 記載なし

第三十二回 平成十九・三・十五 記載なし

綾町・須木村方面探訪

飢肥城・亜熱帯作物支場他

第二十六回 平成十五・十・十 十六号記載

第三十三回 平成十九・十・二十五 記載なし

福村修

史跡探訪 佐土原方面

日向市方面 西都原古墳他・資料館

宮崎県埋蔵文化財センター・大光寺・鶴松館・巨田

出水方面 曾木の滝・武家屋敷・鶴飛来地他

神社

第三十五回 平成二十・十・七 記載なし

第二十七回 平成十六・二・二十六 十六号記載

鹿児島市内史跡探訪 城山・黎明館・維新ふるさと館

帖佐ミヤ

第三十六回 平成二十一・三・十一 記載なし

神武の里・高原方面を訪ねて

熊本田原坂・熊本城

薩摩迫館跡・霧島東神社・狭野神社・宮崎フリーウ

第三十七回 平成二十一・十・六 記載なし

エイ工業団地・霞神社・東霧島神社

百済の里・牧水記念館

第二十八回 平成十六・二・二十六 記載なし

第三十八回 平成二十二・三・十 記載なし

人吉方面探訪

生目・日南方面 (モアイ像)

第二十九回 平成十七・二・二十二 記載なし

第三十九回 平成二十二・十・一 記載なし

知覧方面 知覧武家屋敷・特攻会館

第四十回 平成二十三・九・二十六 十七号記載

山下紘一

高千穂秘境の地 研修紀行

高千穂峡・天岩戸神社・天安河原

第四十一回 平成二十四・三・二十二 記載なし

吉野ヶ里探訪

第四十二回 平成二十四・九・十八 十八号記載

山下謙二郎

坊津・枕崎・史跡探訪旅行

坊津歴史資料センター（輝津館）・一乗院跡

枕崎お魚センター・明治蔵

第四十三回 平成二十五・三・十五 記載なし

古事記千三百年探訪

宮崎江田神社・都農神社・西都記紀の道・西都古墳

第四十四回 平成二十六・三・十五 記載なし

梅北・安久方面探訪

第四十五回 平成二十六・六・十 記載なし

大分 蒲江方面

高平展望台・北川町の西郷宿陣跡資料館・延岡の内

藤記念館



田の神さあ

東 区 園 田 敏 夫

田を守る「タノカンサー」は、庄内の近郊にも、忘れかけられて、鎮座しています。

また山の神でもあり、安産の神でもある。

豊作をもたらす神として信仰をあつめ、旧薩摩藩支配地域に多種多様の石像が残っている。

手にメシゲ、シヤモジ、スリコギ、お椀を持ち 頭に甌篋（シキ、藁で編んだ敷物）をかぶった田の神石像は鹿児島を代表する石造物です。宮崎県南部にも見られ、えびの市、小林市、西諸県、北諸県郡、都城市は旧薩摩藩であり鹿児島県と同じように、田畑のあぜ道や神社などで見られる。また屋敷内で保管している所もある。

よく知られた農民型だけでなく、神官型、仏僧型、大黒天型など様々ある、農民型の持ち物にしてもメシゲ、鍬、スリコギ、椀、握り飯、俵を背負ったものなど自由な表情になっている。

自由な表現といっても、地域的な特色が見られる。鹿児島はメシゲを持った農民型が多い。

宮崎県は神官が正装して神前に座るような姿や僧衣を着た仏僧型が多く見られる。

「タノカンサー」は、一八世紀初め頃より作り始められたとみられる。この頃は霧島の噴火や天災などが原因で、農家にとって大変きびしい時代でした。

薩摩藩では、もう少しでも収穫を増やそうと、稲作を奨励する政策を行っていました。このような政策の中、農家の人たちは、土着の信仰や風習も加わり、山の終息を願い、稲の豊作を願って「よりどころの像」を作った。

庄内でも五〇〜六〇年ぐらい前には、ほとんどの家で牛馬を使つて田畑の耕作をしていた。当時の田植は、家族総出はもちろんのこと、親戚、近所総出でワイワイと田植をしていた。

田植の後には、サノボイがありご馳走で労をねぎらった。

秋の稲刈りの後は、ホゼの行事をしていた。

時代の変遷とともに、このような年中行事も影を薄め少しずつなくなつて来ている。

また、農家を取り巻く環境が大きく変化してきた。農業機械の発達（トラクター、コンバインなど）で農作業がずいぶんと

楽になり、収穫も大きく増えた。

加えて、生活環境の大きな変化がある。電化製品の普及（洗濯機、冷蔵庫、炊飯器、クーラーなど）、交通事情の変化（くるま社会の到来）、情報通信の普及（テレビ、スマホ、インターネットなど）。

そのような中で「田の神さあ」の存在も薄れて忘れられて来ている。

「田の神さあ」にまつわる 風習①

昔は、タノカンサーをよその集落から盗む「オツトイ」という風習があった。

豊作の地域のタノカンサーを借りてきて置くと、米がよく取れるようになるといわれたからです。また、田を新しく開田したところはタノカンサーが無いので盗んできた。

実際には、借りてくるのですが、盗んだ集落では三年後に返すというもの。お礼として粃や焼酎、ニワトリ、料理などを持って正装し、太鼓、三味線でにぎやかにタノカンサーを送ってきます。盗まれた村では、サカムケ（坂迎、酒迎）の準備をして待ち、合同で盛大な酒盛りをしたそうです。

「田の神さあ」にまつわる 風習②

農家を次々に回って豊作を祈願する「回り田の神」の風習は今でも各地に残っている。

当番の家では、田の神さあに化粧し、ごちそうを作り大事に床の間にまつります。

田の神さあは、春・秋交代で次の座元へ回っていきます。

昔、「平日、村で打ち寄り酒を飲む事」が禁止されていた時代、この日だけはおおびらにお酒を飲んでも良かったそうです。（えびの市地方）

鹿児島市西佐多浦町の民族事例では、「田の神オナオリ」といって、年一回春に、田の神に念入りに化粧が施されたうえ、戸外にかつぎだして花見をさせ、宿うつりを行っている。

「田の神さあ」石像の型 農民型

甌篋（シキ、藁で編んだ敷物）をかぶり、（メシゲ）（しゃもじ）とお椀、スリコギなどを持って表情豊かにユーモラスに踊る姿は農民型の典型です。この型が最も多くあります。

「田の神さあ」石像の型 神官型

衣冠束帯またはそれに近い服装で、手には杓子を持つのが多く、神官が神前に座するような姿をしています。神官型は、霧島噴火の被害地方（西諸県、北諸県）に多くみられます。

「田の神さあ」石像の型 仏僧型

地藏型は最古の田の神像です。鹿児島県鶴田町柴尾に作られたものが最も古い田の神像です。島津藩の一向宗禁止との関係のためか、この型は少ない。

「田の神さあ」石像の型 自然石型

田の神の石像が作られる以前は、自然石を立てて田の神をまつっていたといわれます。

霧島を囲む地域の「田の神さあ」の分布

市町村	農民型	神官型	地藏型	自然石	僧侶型	その他	計
えびの市	八二	一八	三	三五	一	一	一四〇
小林市	一三	二五	二	三	四	二	四九
野尻町	九	二三	二	三			三七
高原町	三	九		一	一		一四
都城市	五二	五八	九	二		九	一三〇
三股町	一	六		一			八
綾町	一	九				一	一一
国富町		八				五	一四
宮崎市	二四	三六				八	六八
計	一八六	一九二	一六	四五	六	二六	四七一

作製年代の判別できる「田の神さあ」

年号	鹿児島県	宮崎県
宝永（一七〇四）	二	〇
正徳（一七一）	二	〇
享保（二七一六）	二〇	一一
元文（一七三六）	一二	四
寛保（一七四一）	六	〇
延享（一七四四）	四	一
寛延（一七四八）	一	一
宝暦（一七五一）	一五	七
明和（一七六四）	一四	〇
安永（一七七二）	二九	三
合計	一一五	二七

そこで私は庄内、および庄内近郊の「タノカンサー」を訪ね歩いてみることにする。

庄内町情報

庄内小学校だより

校長 逆瀬川 秀 夫

学校経営方針

児童の実態を踏まえ、児童一人一人を大切にすきめ細かな教育を実践し、知・徳・体の調和の取れた「生きる力」を十分に身に付け、郷土を愛する児童を学校・保護者・地域が一体となって育成するとともに、児童・保護者にとって安全で安心な学校を全職員の共通理解・共通実践のもとにつくることに努める。

目標一 一人一人を伸ばす学力向上対策の充実

① 個に応じたきめ細かい指導と鍛える指導の充実を図り、基礎学力・思考力の向上を図る。

② 家庭学習の充実と確実な見届けを通して、学習習慣の確立

と学習事項の定着を図る。

③ 読書貯金や読み聞かせ等の活動を通して、読書活動を推進する。

目標二 生命を大切にし、豊かでたくましい心の育成

① 道徳教育・人権教育・体験学習の充実を図り、自他の生命を尊重する心や豊かな心を育てる。

② 生徒指導に全職員一致して取り組み、基本的な生活習慣・規範意識を身に付けさせる。

③ 「心のプレゼント」運動の推進を通して、児童に思いやりの心を育む。

目標三 体力の向上と健康・安全教育の充実

① 体力テストを分析・活用するとともに、外遊びを推進し、体力向上を目指す児童を育てる。

② 「立腰」や「早寝・早起き・朝ご飯」、体力の向上と健康・安全教育の充実など、家庭と連携を図り、望ましい生活習慣を育成する。

③ 教育環境を整備するとともに安全教育の徹底を図り、けがや事故の防止に努める。

校歌二番を歌う

『維新のはじめ 三島氏が 心つくして 世のために

のこせし 功 したいつつ

日毎いそしむ 民あれば 里はとしごと 栄ゆく』

庄内小学校 校歌 二番

本校の校歌は、大正八年に作成された。昭和三十二年に、歌詞の内容が時代にそぐわないという意見が出され、歌詞の見直しがされ、しばらくは歌っていたようである。しかし、その後、何らかの理由で、平成二十四年までの数十年間歌われることはなかった。平成二十三年の地域教育懇談会の中で、「どうして、校歌の二番を歌わないのか。」という意見が出され、審議した結果、二番を歌うようになったそうである。

三島氏を伝える小説の帯には『神か鬼か「あれはとてつもない薩摩隼人だったよ。勝 海舟」「三島は物議をかもし、威圧し、やりとげた。徳富蘇峰』とある。平成六年九月に放送されたNHKライバル日本史の中で、庄内の方が「三島通庸は神様と言っても過言ではない。」また、「三島氏の悪口を言う」と周りの人の目が動きます。」と言っていた。

神という人もあれば、鬼という人もいて、評価が極端に分かれる人物である。民衆から見れば圧政の権化のように見られた

三島通庸だが、その胸臆は、天意にかなっていると信じていると満たされていた。決して、私利私欲のために民衆を苛酷な労働に駆り出したのではない。庄内の発展・国の発展のために力を尽くした人物であることに間違いはない。

この原稿を書いているときに、栃木県那須塩原市の三島神社の宮司様より、次のような電話があった。「今年、三島通庸百二十五年祭を実施します。その時に、庄内小学校の校歌を流したいので、校歌のCDを送ってほしい。」とのことであった。何かしら、三島通庸との縁を感じたことでした。

ピオトープ再生

平成十二年三月に学校ピオトープが完成した。第二回全国学
校ピオトープコンクールでは、優秀賞に輝いた学校ピオトープであったが、校舎の改築工事の影響や防水シートの劣化等により、数年前より水辺のピオトープとしての機能を維持できなくなっていた。

平成二十五年度の学校運営協議会や保護者会の中から、ピオトープを再生させ、子どもたちの自然・環境教育に活用してほしいとする意見が寄せられ、ピオトープの再生事業に着手することとなった。事業着手に伴い資金をどうするかということ、

NPO法人代表の蒲生芳子さんの御発言により、高原環境財団に補助金の助成の申請を行った。結果、五十万円の補助金を受けることとなった。

八月より、南九州大学環境園芸学部の四年生を中心とする学生の皆さんに測量・設計にあたってもらっている。今後、保護者などの協力を得て工事が開始される。二月末までにビオトープが再生する見込みである。

高原環境財団 理事長・高原慶一朗 ユニ・チャーム創業者

環境悪化の阻止と回復に向けた環境改善活動に取り組んでいる。特に都市部における豊かで潤いのある自然環境を創出するための地域社会の人々の自発的な取り組みに補助金を助成している。

あいさつリレー

庄内地区の学校では、これまで学期ごとに『心のプレゼント』運動を実施してきました。今年は、加えて、月末の一週間にもあいさつ運動を実施しています。

本校では、『あいさつリレー』に取り組んでいます。児童玄関では、登校班ごとに大きな声であいさつが交わされています。

毎日、指導にあたられている柿並先生より

《子どもたちが、声をそろえて、相手を気遣う姿勢が見られます。お互いが、「今日もがんばろう。」と、にこやかにしている様子がとてもほほえましく、素晴らしいものと感じています。これからも、元気なプレゼントを送り続けてほしいと思います。》

ある保護者の覚悟

庄内小学校 教諭 柿並祐次

今から二十五年前の秋、ある保護者から『我が家で食事でも：』と私を含め三名の庄内小の先生が招待を受けました。当時はよくあったことで、教師と保護者の距離がとても近かったものです。

約束の時間は午後六時頃。

「いつも子どもたちがお世話になっていますから：」とお父さんが笑顔で迎えてくれました。五年生、四年生、二年生、三人の子どもたちもお母さんも明るく笑顔で、とても仲の良い、幸せな家族だと感じました。その夜は子どもたちの話で盛り上がりました。

それから半年を過ぎた三月二十四日。その保護者の方が、がんでなくなったことを知らされました。まだ三十歳代の若さ

だったと思います。願心寺での葬儀では、残された四人の家族の姿がありました。

死を覚悟したお父さんは、子どもたちの学級担任にまで気を配り、子どもたちの将来のことを考えていたと考えられます。そのため突然家に招待して、あんなに明るく接していただいたのです。私たちはその家族には何もできませんでしたが、その子どもたちを想う気持ちは途絶えることはなく、それぞれの成長を気にしていました。

現在、三人の子どもたちは皆、宮崎県の公務員として活躍しています。彼らとの心のつながりは、実際に会って確かめずともずっと続いているものと私は勝手に思っています。教師と保護者の信頼関係は、そんな結び付きの中で消えずにいるものだと思います。

教諭 柿並祐次・昭和六十一年四月から新規採用職員として庄内小学校に勤務を開始、平成二年三月まで勤務。そして、平成二十六年四月から再び庄内小学校で勤務。



乙房小学校だより

校長 毛利 純 宗

保護者・地域に見守られた、伝統ある乙房小学校

一 はじめに

本校は、明治六年に創設され、今年で百四十一年目を迎える歴史と伝統ある学校である。都城
市市街に近接しながらも、自然豊
かな美しい環境に恵まれている。

県立都城きりしま支援学校との
交流活動や地域の伝統である奴踊
りや三味線の伝承活動、地域のみ
なさんといっしょの「ふれあい祭
り」など、乙房小ならではの地域
の魅力を生かした教育活動に積極
的に取り組んでいる。



また、職員一人一人が、自らのよさをいかしながら、よいと思ふことを積極的に推進する「攻めの教育」と「見届けの教育」をモットーに、日々の教育実践に勤しんでいる。

二 目標をもって進んで学習に取り組む児童の育成

(一) 学習指導の工夫・充実

子どもたちの学力向上が公教育の大きな役割である。そこで、本校では、「わかる・できる」喜びを味わい、学びを愉しむ乙房っ子の育成」を研究テーマとし、算数科の学習指導方法の工夫と改善の在り方について、全職員で、研究授業を行いながら、指導力・授業力向上を図っている。さらに、様々な工夫を行い、子どもたちの学力向上を目指している。

○ 教育課程の工夫

年間十五時間（国語五時間・算数十時間）を乙房タイムとし、それぞれの教科時数に上乘せし、基礎的・基本的な学習の充実を目指している。また、朝の活動の時間に週二回のチャレンジタイム（教科習熟の時間）を設定し、基礎的・基本的な内容の定着を目指している。

(二) 読書指導の充実

登校後の始業前に、学校図書室の貸出・返却活動を行い、ほ

は全児童が毎朝、図書室を訪れるようにし、読書指導の充実を図っている。昨年度は全校児童年間貸出冊数、一万冊の目標を達成し、今年度は更なる目標（年間一万一千冊）達成を目指している。

（三） 家庭学習の充実

家庭学習の充実をめざし、「家庭学習の手引き」を作成し、各家庭への協力をお願いしている。また、学期に一回程度の「家庭学習週間」に合わせて、自学ノートコンクールを行い、お互いのノートを見せ合い、参考作品を全家庭にも紹介し、よいところや工夫しているところを参考にするようにしている。

（四） 文集「せんか山」の作成

毎年、全児童の作文を載せた「せんか山」を作成し、子どもたちの作文力向上に努めている。特に、三年生以上は児童一人一人がパソコンで作成し、パソコン入力の実能向上にも多に役立っている。

三 礼儀正しく、明るく思いやりのある児童の育成

（一） 道徳の時間の充実

心の教育の充実を図るには、その要となる道徳の時間の充実が重要である。そのため、参観日を利用して道徳授業を公開し

たり、研究授業を実施して、道徳指導の研修の充実を図ったりしている。

（二） 命にかかわる事故〇への取組

児童の命の安全がまずは重要と考える。校内外のきまりを遵守させ、生命にかかわる事故〇を目指し、次のような取組を行っている。

ア スクールガードボランティアや家庭・地域との連携

・ スクールガードのみなさんとの対面式

・ 夏休み前の地区懇談会

イ 「乙房小よい子のくらし」の活用と規範意識の向上

ウ 「命の大切さを考える日」の実施

エ 交通安全教室及び非行防止教室の実施

オ 防災教育の充実、避難訓練の実施

・ 親子避難訓練

・ 不審者対応訓練

（三） その他、生徒指導の充実を図る取組

礼儀正しく、明るく思いやりのある児童を育成するには、全

教育活動において、生徒指導の充実を図る必要がある。保護者

や地域の方々、庄内地区の小中学校と協力・連携を図りながら、

次のような実践を行っている。

ア 乙房奴踊り伝承活動

イ 都城きりしま支援学校との交流活動

ウ 福祉教育の充実

エ 心のプレゼント週間の取組

オ あいさつ運動の推進

カ 「生活アンケート」や「保護者アンケート」の実施による

るいじめの早期発見と迅速・的確な対応

キ 親子ふれあい運動の実施

ク 「ようこそ先輩」

ケ 庄内地区小学校合同宿泊学習の実施（五年生）など

四 何事にも積極的に取り組み、最後までがんばりぬくたくましい児童の育成

(一) 体力の向上

体力は、人間の活動の源であり、健康の維持のほか意欲や気力といった精神面の充実に大きく関わり、生きる力を支える重要な要素である。

体力の向上を目指し、次のような内容に取り組んでいる。

ア 「体力向上プラン」の作成

イ 体育学習における運動量（時間）の確保（三分間走・サー

キット運動）

ウ 外遊びの奨励や体力向上プログラムの実践による運動の

日常化

エ 立腰指導による姿勢指導 など

(二) 健康的な生活習慣の形成

子どもたちの心身の調和的発達を図るためには、体力を養うとともに、望ましい食習慣を身に付けるなど、健康的な生活習慣を形成することが大切である。

次のような取組を通して、家庭や地域の関係機関と連携を図りながら、健康・安全で活力ある生活を営むために必要な資質や能力の向上を図っている。

ア ノーテレビ・ノーゲーム週

間の実施と基本的な生活習慣

の定着（中学校の期末テスト

の期間に合わせて）

イ 食育の推進：夏休みと冬休

みを利用した親子で朝ごはん

づくりの活動

ウ 病気の治療や予防の徹底

（とほく歯科の歯科衛生士さん



による「歯の健康」指導)

エ 遠足の日を利用した「弁当の日」の実施 など

五 保護者・地域との連携を目指した開かれた学校づくり

学校が目的を達成するためには、家庭や地域の人々ともに子どもを育てていくという視点にたち、家庭、地域社会との連携を深め、学校内外を通じた児童の生活の充実と活性化を図ることが大切である。本校でも、保護者や地域と連携を図る様々な活動を実施している。ここに、その活動の一例を紹介する。



都城きりしま支援学校との交流活動

六 おわりに

本校の教育について、その一端を紹介してきたが、保護者や地域の方々に見守れた乙房小学校であることを再認識することばかりである。

今後も、地域を知り、地域に学び、地域に貢献する活動を多く取り入れながら、本校の教育目標である「自ら学び、心豊かに、力強く生きる児童の育成」を推進していく。



菓子野小学校だより

地域の中の学校

「夢・実践・改革」の思いをつなぐ

校長 山本博昭

地域が活性化し、「まちづくり」を推進する開かれた学校を目指すことは、学校教育の役割と責任の大きな柱です。つまり、学校は、地域の一員として、家庭・地域の人々と目標を共有し、双方向的に一体となって地域の子どもたちを育てることが重要課題となります。そのことは、「心豊かな子ども」と「生き甲斐をもって関わる大人」の笑顔や喜びとなり、ひいては心の絆を大切にする「まちづくり」そのものにつながっていくと考えられています。

都城市は、平成二十五年度より学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を立ち上げ、市内全小中学校でその取組を推進しています。その具体的な事例として、本校では、『学校支援ボランティア組織の構築と実践』『まちづくり協議会の支援

による「五年生の地域学習」を実施しています。

学校は、地域の未来を託された唯一の公教育の場です。創立以来六十四年もの間、歴代校長がつかないでこられたのは、「夢・実践・改革」という本校に寄せる熱い思いであったと考えています。在職二年目を経過した今、私は、その思いのたすきをたなく菓子野小学校校長としての正念場を迎えます。

*** 霊峰高千穂を仰ぎつつ 刻苦研鑽 他念なき***

菓子野小の学校応援団「学校支援ボランティア」の構築と実践
教職員・保護者・地域の方々（含む・企業等）が一体となり、地域ぐるみで菓子野小の子どもたちを育てることを目的に、既存の組織に加えて五つのボランティア組織を構築しました。

その特色は、「できる人が、できる時に、できる支援活動」、「自発的意思による支援活動」教職員や子どもと一緒に活動し、学校（子ども）をよりよくしていく支援活動」「ボランティア自身の経験や専門性を生かす支援活動」です。庄内地区まちづくり協議会と菓子野校区振興会の関係機関をはじめ、宮島・千草・今屋（菓子野分館）の自治公民館による学校の教育活動支援をいただくとともに、学校の地域貢献を目指すものです。

★学習支援ボランティア

○理科学習（三・四年生対象）

アシスト企業（保護者）による「自然エネルギー（太陽光）」「環境保護」をテーマにした学習

○水泳学習（三年生以上対象）

本校卒業生のインストラクターを講師に迎えての泳力向上を目的にした水泳指導

○ミシン学習（五・六年生対象）

地区婦人会等の支援による家庭科のミシン学習

○伝統芸能の伝承（三・四年生対象）

「たわら踊り保存会」の方々による踊りの指導による運動会やふるさと祭りで発表する総合学習

○避難訓練（全学年対象）

保護者支援による風水害時の児童引き渡し訓練と地域消防



アシスト企業による環境学習



卒業生による水泳指導



俵踊り保存会の方々の伴奏

見学

防団支援による火災時避難訓練の講話及び放水・消防車



たわら踊りの実技指導



風水害想定の子供引き渡し



消防団の支援による避難訓練

★読み聞かせボランティア

○「ひまわりグループ」の方々による絵本の読み聞かせ

★安全見守りボランティア

○各地区の見守り隊の方々による登下校時の安全見守りとあいさつ指導



1年生教室での読み聞かせ



入学式での見守り隊の方々



登校見守りとあいさつ指導

★体験支援ボランティア

○そよかぜグループ

- ・そばつくり〜八月の種まき、十一月の刈りとりと脱穀、十二月のそば打ち体験とそばの試食会

- ・豆腐つくり〜七月の大豆の種まき、十月の刈りとり、十二月の豆腐つくり体験と試食会

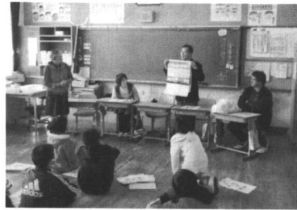
- ・キャリア教育〜四年生を対象に、将来の夢実現についての大切な心構えの講話



そばの脱穀体験



そばうち体験



将来の夢実現のための講話

★環境づくりボランティア

○花つくり

- ・地区婦人会、高齢者クラブの方々による季節の花、卒業式装飾の花苗のポット移植

○親子共汗作業

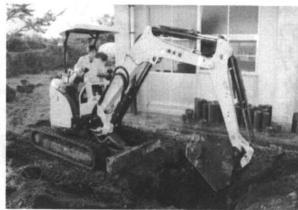
- ・地区ごとに年間三回の親子によるPTA奉仕作業を行っており、地元企業（保護者）による重機の提供で作業効率の大幅向上が図られる。

○PTAのOB会

- ・校門の門松つくり
- ・運動会団装のほり竹の切り出しと設置、駐車場の確保及び整理誘導



夏の花苗のポット移植



共汗作業時の重機の提供



校門に完成した門松

まちづくり協議会の支援による「五年生の地域学習」

その目的は、菓子野小学校の前身を創立された三原叢五先生の足跡をたどりながら母校の歴史を認識させること、また、関之尾を水源にして灌漑水路を開いた先人の偉業を学習することで地域を再認識させることです。このような教育課程の工夫改善が実現できたことは、庄内地区まちづくり協議会の物心両

面からの支援の賜であり、地域の中の学校づくりを推進する学
校運営協議会の実践成果です。



三原叢五先生の学習



紙芝居「坂元源兵衛物語」



さいせい館での環境学習

菓子野小学校五年生

校外学習感想文

和田 伸 天

先日は、三原叢五先生の墓や前田用水路やリサイクルプラザ
について教えてくださってありがとうございました。

ほくは前田用水路が少し暗かったけど長さ二五〇mもあるの
で、とつてもびっくりしました。それに、長さ二五〇mのトン
ネルで、のみとハンマーだけで終わったのですごいなと思いま
した。

先日はほんとうにありがとうございました。

平 山 寛 晃

先日は、どうもありがとうございます。三原そう五先生のお
墓や前田用水路につれていってもらったり、かみしばいを見せ
てもらったり、かみしばいでくわしくおしえてくださったり前
田用水路を見せてもらって、どうやって造ったかがわかりまし
た。分からなかったことが分かってよかったです。ほんとうに
ありがとうございました。



瀬戸山 蓮

先日は、ありがとうございます。前田用水路のとき、かい中であんなにでてらしてくれてありがとうございます。

三原叢五さんのことをお母さんたちにおしえたいです。バスでおくつてくださってありがとうございます。三原叢五さんのおはかをおしえてくださってありがとうございます。

立元 天 晟

先日は、三原叢五先生と前田用水路などいろいろなことをおしえてくださって、ありがとうございます。

三原叢五先生がどのようににじゅぎょうをしていたのかもわかりました。教え方もていねいで分かりやすかったです。

先日は、ほんとうにありがとうございます。また、きかいがあつたら教えてください。

寺 島 啓 祐

先日は、前田用水路、みはらそうご先生のお墓、リサイクルプラザにいかせてもらってありがとうございます。ほんとは、前田用水路の中にはいりたかったけど、雨ではいれなかったので、ざんねんでした。とても楽しかったです。

串 間 凜

先日は、一しよに同行して下さったり、紙しばいをして下さったり、三原叢五さんの事を教えて下さってありがとうございます。

紙しばいは、とても分かりやすく、前田用水路や、坂元源兵衛さんの事が、よく分かりました。紙しばいの後の三原叢五さんの話は、とても分かりやすく、おもしろかったため、あきませんでした。

一しよに同行して下さった方々、紙しばいをして下さった方々、三原叢五さんの事を教えて下さった方、最後になります。ありがとうございます。

西 葵 沙

先日は、菓子野小の五年生のために見学をさせていただいてありがとうございます。三原叢五先生の事や、前田用水路の事についていろいろ教えてくださってとてもうれしかったです。それに、知りたいことなどがたくさんあっていろいろ質問させていただきました。とても感どうするお話や感謝しなければならぬ事などの話もたくさんありました。三原叢五先生、前田正名さん、坂元源兵衛さん方々にすごく感謝します。あい

である日にちがあつたら、そちらにうかがいたいと思います。

先日は、本当に、ありがとうございました。

丸山寧琉

先日のそう合学習はいっしょに同行して下さつてありがとうございます。私がお心に残つたことはかみしばいです。坂元源兵衛や前田正名、前田水路を作るにはどんな人々の努力工夫があつたのかが分かりました。

ほかにも、三原叢五さんはどんな人物でどんなけいけんをしたのかなどを説明して下さつて、とてもわかりやすかつたです。本当にありがとうございました。

大山せな

先日は、坂元げんべえさんのことや、三島通庸さん、三原叢五さんのことを色々おしえて下さつてありがとうございました。紙しばいはおもしろくて、わかりやすかつたです。先日はほん

とうにありがとうございました。

三原叢五さんは、すごい人だつたんだなと思ひました。前田水路は、二五〇mあると聞いたときすごいびっくりしました。

紙しばいはおもしろくて、わかりやすかつたです。先日はほん

清水 萌絵子

先日はおもしろい中わざわざわありがとうございました。私は校長室にある写真にもその人の名前にも正直全然示しませんでした。だけど先日、庄内地区まちづくり協議会の方々のおかげで興味を示すようになりました。

坂元源兵衛、前田正名のこととは四年生のときに習つたけれど、初めて知つたこともありました。前田正名は、お金をえん助してあげたということ。他にも初めて知つたことはいろいろありました。紙しばいは楽しく、分かりやすく学べて良かつたです。先日は本当にありがとうございました。

清水 佳也基

先日は、いろいろなことを説明して下さつてありがとうございました。ぼくが一番心に残つたことは、前田水路に行ったことです。たてが三〇cmよこが五〇cmの石を積みあげて作つていて、すごいと思ひました。紙しばいでは坂元源べいさんや前田正名さんがくろうしたことが分かつたので良かつたです。

山田 悠騎斗

先日は、ぼく達のためにいろいろ教えて下さつてありがとうございました。

うございました。ほくは、三原そうご先生は西ごうたかもりの
でしと聞いたのですごかつたです。前田用水路トンネルを照ら
してくださってありがとうございます。紙しばいは、坂元げんべ
えさんのことがいろいろわかって良かったしおもしろかつたで
す。坂元さんのおじいちゃんが三原先生の学校に通っていたの
ですごいと思いました。先日は本当にありがとうございました。

上 田 那 智

先日は、三原そう五先生や前田用水路、坂元源兵衛さんにつ
いて教えて下さって、ありがとうございます。

ほくが、一番心に残ったのは、紙しばいでした。おもしろい
けど、源兵衛さんの努力が分かりました。先日は、本当にあり
がとうございました。

宮 島 常 志

庄内地区まちづくり協議会のみなさん、ほくたちの学習のた
めにいろいろ教えたり、三原さんのお墓につれていって説明も
して、さらに前田用水路にもつれていって雨の中、前田用水路
の中をのぞかせていただいてありがとうございます。坂元さ
んのすごいやさしさと「あきらめない心」のことをまなびまし

た。リサイクルプラザにもついて来てくださってすごく感謝し
ています。これからもこのことをいかしていきたいです。

中 村 リ コ

先日は、私たち五年生のために最後まで案内、説明をしてく
ださってありがとうございます。私が一番心に残ったことは、
雨がふっていたのに私たちのためにかさもささずにかい中電灯
で前田用水路のトンネルの中をてらしてくださいましたことです。

先日はおいそがしい中、私たちのために案内してください
本当にありがとうございました。

成 枝 潤

先日は、ありがとうございました。紙しばいでくわしく絵で
も分かりやすく、坂元源兵衛さんの話をくわしく、分かりまし
た。坂元さんの話をきけてうれしかったです。ランドセルが木
製だったなんて知りませんでした。

本当にありがとうございました。

編集部注

あいにく雨模様でしたが、菓子野小学校五年生の校外学習は平成二十五年十二月十八日（水）に庄内地区まちづくり協議会の教育文化活動部会（舟津隆二部会長）が協力して実施されました。目的は以下のとおりです。

①菓子野小学校五年生児童を対象に、明治の初めごろ菓子野小学校の前身である菓子野分教場で、長らく教鞭を執られた三原叢五（みはらそうご）先生の足跡をたどり、説明を受けることにより、菓子野小学校の歴史を認識させる。

②江戸時代から明治時代にかけて、関之尾を水源に庄内・山田・志和池などをかんがいする前田用水路の開発に生涯を掛けた坂元源兵衛の紙芝居「坂元源兵衛物語」を見ることで、郷土に対する愛着と誇りを持つてもらう。

③授業で学習したゴミのリサイクルについて、実際に処理をしている都市リサイクルプラザいせい館を見学し、資源ゴミリサイクルの大切さを理解させる。

菓子野小をマイクロバスで出発、まず三原叢五先生のお墓を訪問、校長先生より説明がありました。そのあと東区の前田用水のトンネル出口を見学し庄内地区公民館に移動。前田用水路の建設に尽力した坂元源兵衛の紙芝居「坂元源兵衛物語」を関

之尾むかえびとの会の花原会長と末原さんが披露。つづいて坂元源兵衛のひ孫に当たられる坂元徳郎さんが「三原叢五先生のこと」と題してお話しをされました。

その後、前田用水路を見ながら志和地の都市リサイクルプラザいせい館へ移動、約一時間資源ごみのリサイクルについて学びました。



庄内小学校五年生遠足感想文

得能 崇志

佐藤 由太郎

ぼくが一番印象に残ったのは、お軍神の石ひに戦争でなくな
られたかたがたの名前一人一人がきざまれているということが
一番印象に残りました。

びっくりしたことはもちながてい石垣の石を関之おから持っ
てきて石垣を八カ月で作りあげたのでびっくりしました。ぼく
は願心寺のことや南洲神社のことをくわしく調べてみたいで
す。

宮 寄 恵 基

ぼくは、もちなが邸の石垣が、たった八ヶ月でできたと聞いて
びっくりしました。あなを一つずつあけるのも手作業でやっ
ていて、昔の人はすごいと思いました。それから願心寺のたた
みの間が広がってびっくりしました、七十以上もあるとは思っ
ていませんでした。

ぼくは、これから、石垣と願心寺のことを詳しく調べてみた
いです。いい経験になりました。ありがとうございました。

ぼくは庄内には、石垣がたくさんあることを初めて知りまし
た。ぼくは石垣を作るとき、人の手で作られ、八ヶ月で作られ
たとき、なぜ、そんなに早く作られたのか、くわしく調べたい
です。

諏訪神社の階段は、九十二段あるので、ぼくは、びっくり
しました。

徳 丸 凌 太

ぼくは、もちなが邸石垣の石が一つ一つ手でつみ上げたこと
を初めて知りました。そして釣こう院跡があんなにかくれたと
ころにあったのも初めて知りました。

城山にあったお城は、いったいどれぐらい広がったのか調べ
たくなりました。そしてその城がいつこわされたのかも調べた
いです。

ぼくは、知らないことが多かったので教えてくださってあり
がとうございました。

藤 村 悠 真

ぼくが初めて知ったことは、諏訪神社で毎年祭りがあること

と、南洲神社とはちがつて、おくの方にしよいんがあつたことです。そのしよいんの屋根も特ちよう的だなと思ひました。

ぼくがこれから、くわしく調べたいことは、なぜ北郷相久が自まつしてしまつたかということです。

山口 翔 大

ぼくが、初めて知つたことは、安永城を、北郷氏が北の守りとして造つたこと、北郷相久が金石城で自刃したこと、もちながていの石垣は昔はもつと高さがあつたことです。

そして、くわしく知りたいことは、安永城をどうやってちく城したかを知りたいです。南洲神社の階だんが八十三だんあることにびっくりしました。

田中 優 大

ぼくが一番印象に残つたことは、お軍神の名前のゆらいが、戦いの神様をまつる所だから、「お軍神」ということを知りました。

もつとくわしく調べたいことは、西ごうたかもりが、自殺した理由です。他にも、もちなが邸の石垣が昔ほどのくらいあつたかです。先日は、本当にありがとうございました。

日高 壹 昂

ぼくは、諏訪神社のかいだんを登つたことがなくて、かいだんを数えてみると九十二だんあつたことを初めて知りました。もちなが邸石垣は、八ヶ月で作られたことも初めて知りました。ぼくは願心寺は何年に作られたのか、どんな行事が歴史に残っているのかもくわしく調べたいです。諏訪神社の屋根は、すごい屋根だったので、だれが建てたのか、どうやって建てたのか、なぜさいごうたかもりを反げきしたのかをくわしく調べたいです。

庄内町の歴史をたくさん知ることができました。ありがとうございました。

長谷川 蓮

ぼくが、初めて知つたことはお軍神の下にある石は、せきのおの石だと知りました。

びっくりしたのは、もちなが邸の石垣をほんとうは十〜三十年かかるのに、昔の人は八ヶ月で作らあげたのがとてもびっくりしました。庄内には石垣がたくさんあるんだと思ひました。

山久院跡のことをくわしく調べたいです。

川上 優介

ぼくが初めて分かったことは、城山での説明で、城山で自さつした、すけひさという人を初めて知りました。ぼくは、城山に、いつも、休みの日に遊びに行っているけれど、城山で自さつしたのを聞いて、びっくりしました。

もちなが邸石垣で、たった八ヶ月でできたと聞いておどろきました。あんなに大きい石垣をなんでそんなに早く出来たかを調べたいと思います。

福満 隆美

ぼくが初めて知ったことは、石垣が昔からいっぱいあったことと、もちなががいの石垣がもっと高かったことです。

これからくわしく調べたいことは、城山のことを、もっと調べてみたいです。

庄内の歴史のことを、くわしく教えてくださってありがとうございます。ございました。もっともっと調べてくわしくなりたいです。

内村 峻介

ぼくが、一番印象に残ったのは、願心寺です。ぼくは、ルンビニ保育園でした。保育園では、毎年願心寺のおきょうを

聞いたり、ねとまりをしたことがあります。ルンビニ保育園では、身近だった願心寺にはいろいろなヒミツがあつて、少しびっくりしてしまいました。お母さんたちにこの話をすると、ビックリしていました。

ぼくは、遠足で知ったことをしっかり覚えて、みんなに教えたいです。

谷口 大志

ぼくが初めて知ったことは、さいごうたかもりが、かご島の城山で自刃していたことと、もちなががいの石垣はとても高く庄内が一目で見おろせることです。

くわしく調べたいことは一位がしの木のはばは、何m高さは何mあるかと、願心寺はどのように作られたかです。

坂元 琉唯斗

ぼくが、初めて知ったことは、庄内の町にはこんないろいろなふうが、たくさんあるなんて知らなかったの、良い機会になりました。

例えばすわ神社の階段さんが、全部で九十二だんあったことがびっくりしました。またぼくは、これから調べたいことは、城

山とすわ神社です。

前田 伊武希

久保田 祥大

ぼくが遠足に行って分かったことは、もちながてい石垣が、下の方がかたくて、上の方がやわらかいということ。ぼくは、平田に住んでいて、あんまり知らないことがいろいろあるんだなと思いました。

ぼくは南洲神社の階だんの数が八十三だんあったことを知りました。だから次は庄内のほかの歴史を知りたいです。ほんとうにありがとうございます。

萬代 広夢

ぼくが初めて知ったことは、もちなが邸石垣は、百十年前にできて、石垣の下はずっと田んぼだったということを知りました。

これからくわしく調べたいことは、願心寺、もちなが邸の石垣は、何百年くらい前からあったのか、菅原神社はなぜ勉強の神様なのかを、もつとくわしく調べたいです。

もつともつと歴史の勉強をして、歴史のことを教えてください。さつたみなさんみたいに、人に教えられる人になりたいです。

ぼくは、初めて知ったことで印象に残ったのが二つあります。一つめは、もちなが邸石垣を八ヶ月で作ったことです。二つめは、諏訪神社のかいだんが九十二だんあったことです。

これからは、なぜ諏訪神社は、どうして高いところにあるのか、願心寺はどのくらい部屋があるか調べてみたいです。庄内の歴史を教えてくださいありがとうございました。

久保 愛斗

ぼくは、庄内の歴史のことについて教えてもらったので、庄内の歴史のことについてとてもきょうみをもちました。

ぼくが初めて知ったことは、すけひさが城山で自殺したことです。くわしく調べたいことは、願心寺のことを調べたいです。

眞鍋 希

わたしは、ちょうこう院あとがあまり目立たないところにあつたので、とてもびっくりしました。わたしは、もちながてい石垣は人の手で作ったことを初めて知りました。お軍神の石はせきのおのたきの石だということを初めて知りました。

わたしはこれからくわしく調べたいことは、山久院のことに

ついて調べたいと思いました。

有馬 星来

森 重 柚 妃

わたしは、庄内の町をたんけんして初めて知ったことがたくさんありました。ほんごうすけひさが城山で自殺したことや、さいごうたかもりが中心となり四人でばくふを守ったことです。

もっとくわしく調べてみたいことは、どうして庄内小学校に、お軍神を作ったのかと、どうして神様でないといけなくて、仏はだめなのかをこれから調べたいです。

鵜 島 佳 歩

私たちが行った神社などは、全部初めてでした。私は、お軍神が心に残りました。

お軍神は、庄内小学校の正門の所にあるのにあまりきょう味を持って調べたことはありませんでした。お軍神や釣こう院あとなどにあるせきひは、庄内を守ってきた人たちばかりでした。

私は、もっと庄内の町を大切にしたいです。私は、願心寺についてもっとくわしく調べたいです。

わたしは、釣こう院跡はこんな所にあるということを知りました。南洲神社にはまだどんな歴史があるのかをくわしく調べたいです。

わたしは歴史にもとからきょう味があつたけれど、もつときょう味がわいてきました。とてもびっくりしたことや、初めて知ったことが多かったので、とてもいい機会になりました。ありがとうございます。

竹 内 花 菜

わたしは、庄内の町の歴史で初めて知ったことがたくさんありました。

すけひさが城山で自殺したこと、もちながていの石垣を作った人などたくさん知りました。戦争に参加した人たちなど亡くなった人のいせきがあつたことを初めて知りました。

これからくわしく知りたいことは、なぜ、すけひさは自殺したのか、なぜお寺はいらなないとこわされたのか調べたいです。

山之内 つぐみ

庄内町のたくさんさんの歴史を知りました。わたしは歴史のこと

がよく分からなかったけれど遠足の日によく分かりました。わたしは南洲神社にさいごうたかもりが入っているのは、初めて知りました。

庄内町にも分からないことがたくさんありました。なぜ、さいごうたかもりがかごしまで自殺をしたのかと、なぜ釣こう院をこわしたのかを調べたいです。

山田 幸 魅

私が初めて知ったことは、すけひさが城山で自さつしたことです。他にはお軍神はパワースポットと言われていることも初めて知りました。

くわしく調べたいことは、すけひさが城山でなぜ自さつしたのかを調べたいです。

上 柳 歩 美

わたしは、いろいろなことを知ったけど、その中でも、もちなが邸石垣にびっくりしました。つくり始めて八ヶ月くらいで、作り終えるなんてびっくりしました。あなも一つ一つくりぬいてできているのにもびっくりしました。

石は、せきのおのたきの上の方からもってきているのを初め

て知りました。てつごうと言うとびらだったことも知りました。ありがとうございます。

川 崎 天 音

わたしは、始めて知ったことがたくさんあったけど、その中で一番印象に残ったのは、あの大きな石垣を八ヶ月で作ったということです。

くわしく調べたいことは願心寺の天井に残っている、手跡と足跡のことです。この学習で学んだことをこれからの学習に生かそうと思います。

三 城 彩 桜

わたしたちが、庄内の町をたんけんして知ったことの中で一番印象に残ったのは、もちなが邸の石垣を昔の人たちは八ヶ月で作ったことです。話の途中で聞いたとき、わたしもびっくりしましたが、みんなもびっくりしていました。

わたしはこれから、もつとくわしく調べてみたいことがあります。それは、願心寺ともちなが邸と城山のことです。願心寺はおぼうさんがとまったりするほかになにするところなのか、もちなが邸の石垣はどのように作られたのか、城山は昔ど

んなお城が建っていたかなどを中心に調べていきたいです。

徳重美優

伊妻時羽

私は、もちなが邸の石垣は、ななはらでんきちという人が作り、八ヶ月で作り終わったということを初めて分かりました。

また、私は城山と願心寺をもっとくわしく調べたいと思います。すわ神社の階だんが、全部で九十二だんあったこともびっくりしました。

上野彩月

わたしが初めて知ったことは、もちなが邸の石垣がすべて手作業で作っているのに、たった八ヶ月で作らあげたのを、初めて知りました。

南洲神社の階だんが八十三だんもあったのでびっくりしました。南洲神社は一度こわされたけどまた作りあげたのも始めて知りました。

わたしは、願心寺にどんな願いがあるのか、本などでくわしく調べたいと思います。

わたしは、願心寺が百七十年前にできたことと、お軍神は町に中心だということを知りました。まだ初めて知ったことはたくさんありました。

くわしく調べてみたいことは、なぜ南洲神社は全国に四つあるのか、なぜ願心寺を建てたのか、すわ神社はだれがつくったのかなどたくさん調べたいことがあります、とくに心に残ったのは石垣です。昔はなぜ石垣が多かったのかなと思いました。

中村美咲

庄内の歴史のことを教えてくださったので、庄内の歴史のことときょうみをもちました。わたしがいちばん印象に残ったことは、今の城山、安永城址で北郷相久が自殺したことです。

初めて知ったことは、南洲神社の階だんが八十三だんもあったことにびっくりしました。くわしく調べたいことは、なぜあそこに石垣を建てたかです。

編集部注

庄内小学校区には都城島津家の歴代藩主（初代、二代、四代、五代、七代）の墓や、諏訪神社・願心寺をなどの神社、明治期に造られた多くの石垣群が残っています。平成二十六年五月二十三日（金）にこれらを巡る庄内小学校五年生の遠足が行われ、庄内地区まちづくり協議会教育文化活動部会が協力しました。目的は次の通りです。

- ① 庄内地区の史跡や石垣群を巡り、ふるさとのよさを見直す。
- ② 交通安全や集団行動のきまりを守り、友達に迷惑をかけずに安全に行動する。

史跡等の案内および説明を同部会所属の「庄内の昔を語る会」が行い子供たちと一緒に歩きました。コースは次の通りです。

- ① お軍神（三島通庸遺徳の碑、三原叢五顕彰碑など）
- ② 釣こう院跡
- ③ もちなが邸石垣
- ④ 願心寺山門、本堂、書院
- ⑤ 諏訪神社
- ⑥ 豊幡神社・山久院跡
- ⑦ 地頭仮屋跡経由南洲神社
- ⑧ 安永城址



庄内地区まちづくり協議会

平成二十五年事業報告書

(平成二十五年四月一日から平成二十六年三月三十一日まで)

庄内地区まちづくり協議会 会長 釘 村 美千也

一、事業概要

平成二十五年四月、庄内地区社会教育関係団体等連絡協議会(社教連)の総会で組織を発展的解消し、庄内地区まちづくり協議会に移行することが決議されました。これまで地区社教連が行って来た庄内地区の伝統ある三大イベント(庄内地区スポーツ大会、庄内ふるさと祭り、庄内川一周Y O U 遊駅伝大会)は、皆様のご協力により、まち協で従来通り実施する事ができました。

都城市より受託している城山公園整備事業、庄内川堤防草刈り事業、庄内中学校一年生を対象とした郷土学習事業や関之尾滝ライトアップ事業を継続事業として実施し、他にも各部会の事業や地区総合研修会、豊後高田市の視察研修など実りある事業を実施することが出来ました。

また、庄内地区は都城市の地域振興基金の対象地区となっております。この基金を財源とした活性化案を地域振興基金検討会でまとめました。平成二十六年からいくつかの事業をスタートさせることとなります。今後も一歩ずつ、協議会キヤッチフレーズの「みんなで作る 住みよいまち 庄内」を目指して事業を展開していきます。ご協力をよろしくお願いします。(平成二十五年庄内地区まちづくり協議会役員は表一を参照。)

二、主な事業内容

① 庄内川鯉のぼり駐車場案内看板設置

(平成二十五年四月七日)

庄内商工会青年部による庄内川堤防鯉のぼり掲揚は季節の風物詩となり、見物客の道路上駐車が見られることから、地域づくり部会では都城酒造様のご協力によりエムズガーデン駐車場に誘導する看板を設置しました。

② 城山公園管理受託作業(平成二十五年五月一日)

都城市より受託し、四年目となりました。今年度は九回の除草作業を行いました。以前と比べると見違えるようにきれいに整備されています。今年度からトイレの清掃も受託し、週一回の清掃作業も実施しております。

③ 関之尾滝ライトアップ（平成二十五年七月二十日）

地域づくり部会が担当しています。七月十九日に準備を行い、二十日から八月三十一日まで点灯しました。点灯時間は十九時三十分～二十一時までで、昼間と違って幻想的な関之尾の滝を楽しむことができ、観光客に喜ばれました。

④ 庄内地区総合研修会（平成二十五年七月二十六日）

NPO法人都城歴史と文化のまちづくり会議理事長の田代義博氏を講師に「薩摩の教え『郷中教育』について」という演題で講演を行いました。八十名ほどの参加があり講師の分かりやすくユーモア溢れるご講演に、熱心に耳を傾けておりました。庄内地区の歴史にも触れて頂き、貴重な歴史遺産を今後のまちづくりに活かしたいという思いが湧きました。

⑤ 庄内川堤防の草刈り（平成二十五年八月十七日）

環境整備部会を中心に各自治公民館長・副館長はじめ多くの方の参加があり、四十一名で作業を行いました。前日までに上関之尾橋から鶴島橋まで機械で草刈りを実施してあげましたが、橋や水門の近辺など機械で刈れない部分を人力で刈りました。庄内川堤防は小中学生の通学路や散歩で歩く人も多く、草が背丈ほどに伸びている部分もありましたがすっかりきれいになりました。

⑥ 災害時支援体験学習（平成二十五年八月十七日）

健康福祉部会では、災害時に避難所などで必要になる支援活動の体験学習を行いました。包装食袋（ハイゼックス）を使った炊き出し（講師…都城市赤十字奉仕団庄内分団帖佐さん、満木さん）、ダンボールを使った簡易トイレづくり（講師…防災士権屋藤雄さん）を行い、最後にハイゼックス炊き出し試食を行いました。

⑦ 第十四回庄内地区スポレク大会

（平成二十五年十月十三日）
庄内三大イベントの一つであるスポレク大会（歩こう会）を開催しました。絶好の秋晴れのもと、庄内川堤防を中心とした約5kmを気持ちよく歩きました。ゴール後、抽選会も実施しました。

スポレク大会に先立ち十月五日には二回目の庄内川堤防の草刈りを実施しました。

⑧ 第二十八回庄内ふるさと祭り

（平成二十五年十一月二～三日）
今年からまちづくり協議会主催となり、盛りだくさんの内容で、二日間にわたって実施しました。

イベント（十一月三日、庄内地区体育館）

バザー（十一月二日、庄内地区体育館）

展示会（十一月二～三日、庄内小体育館）

出店（十一月三日、庄内小体育館前）

⑨ 関之尾滝休憩施設建設（平成二十五年十一月十七日）

関之尾滝は近年観光バスなどで訪れる観光客が増加しており、雨の日や日差しの強い日など休憩施設がなくて不自由をかけておりました。「滝の駅せきのお」前広場に休憩所を設置し、合わせてベンチも作成しました。今後は「関之尾むかえびとの会」の活動や、同所で開催する「くまその里よろず市」など、大いに活用し地域の活性化につながることを期待しております。

⑩ 庄内中学校一年生地域巡見学習

（平成二十五年十一月二十九日）

庄内地区まちづくり協議会では、平成二十三年から庄内中学校一年生を対象とした「地域巡見学習」を行なっています。庄内地区には多くの歴史的建造物や史跡が残されていますが、中学生の多感な時期にこれら地域の宝を見学し説明を受けることにより、郷土に対する愛着と誇りを持ってもらうことを目的としています。ガイド役は「庄内の昔を語る会」の会員が務めました。

⑪ 第十九回庄内川一周YOU遊駅伝大会

（平成二十五年十二月一日）

第十九回目となる庄内川一周YOU遊駅伝大会が開催され、全自治公民館十チームとオープン部の部に四チームが出場し、熱戦を繰り上げました。沿道からも熱い声援があり、盛り上がりました。結果は以下の通りです。

一位 関之尾自治公民館 一時間〇四分二六秒

二位 東区自治公民館 一時間〇六分四七秒

三位 宮島自治公民館 一時間〇七分十四秒

⑫ 菓子野小学校五年生校外学習

（平成二十五年十二月十八日）

あいにく雨模様でしたが、教育文化活動部会が協力して菓子野小五年生の校外学習が実施されました。三原叢五（みはらそうご）先生のお墓と前田用水路（東区トンネル出口）を見学し、庄内地区公民館で紙芝居の「坂元源兵衛物語」を関之尾むかえびとの会が披露、坂元徳郎さんの三原先生のお話しを聞き、その後都城市リサイクルプラザさいせい館を見学しました。

⑬ 豊後高田市視察研修（平成二十六年三月十九日～二十日）

十九日は「昭和の町」のガイドによる研修や「昭和ロマン蔵」の見学および「豊後高田市観光まちづくり株式会社」の設立経

緯・運営方法などを研修しました。

翌日は豊後高田市社会福祉協議会を訪問し、ひとり暮らし高齢者等の「安否確認見守りネットワーク事業」の詳細と運用方法を研修しました。運用面での課題等大いに参考になりました。

表一

(平成二十五年庄内地区まちづくり協議会役員)

役職	氏名
会長	釘村 美千也
副会長	馬籠 英男
〃	福村 修
〃	今ヶ倉 毅
自治公民館活動部会長	徳留 次男
地域づくり部会長	福田 定見
教育文化活動部会長	舟津 隆二
健康福祉部会長	大河原 弘子
環境整備部会長	徳丸 義彦
事務局長	朝倉 脩二
監事	今村 壮二
〃	萩原 忠子



関之尾滝休憩施設



スポ・レク大会 (歩こう会)



城山公園整備事業



庄内川一周YOU遊駅伝大会

追憶・随想

日本の故郷、庄内

東区 前田 光 政

(東京都在住)

◎はじめに

『庄内』誌は、兄がおくつてくれますので、毎号ありがとうございますと拝誦いたしております。また、拙著『小説三島通庸』（鉦脈社）執筆のおりには、貴重な基礎資料として活用させていただきました。庄内には大先輩、諸賢が数多くおられます。寄稿のおさそいに、最初気おくれたのが正直なところですが、報恩の気持ちで筆をすすめました。記憶ちがい、事実誤認などあるかもしれません。ご寛恕のほど。

一…諏訪神社

記憶のフィルムを、必死で巻きもどしてみると、最初に像を結ぶのは、昭和二十七年、諏訪神社のお賽銭箱の前になる。数え五才のとき、祖父が節句の参拜で、手をひいていつてくれた。合同の参拜だったのだろう、祭壇の前は同年齢の子供たちとその親で、押しあいへしあいであった。お賽銭箱の前に、やっとの思いですすみでた足もとの石段に、一円や五円の硬貨が、ちらばっていたのをなぜか、あざやかに思いだす。主行事である神主のお祓いは当然あつたと思うが、その記憶は白くかすんでさだかでない。

お参りから帰つてくると、今度は父が自転車のうしろにのせて、安永の自宅から天神馬場、下町通り、役場通りと近所へのお披露目である。役場通りには、警察小屋^レがあり、でつぶりと太った署長がにこやかに敬礼して祝ってくれた。署長は、なにかの式典のかえりだったのだろうか、胸に数えきれないほどの勲章をつけていた。幼い眼にその印象はつよかつたのだろうか、僕はその後、ビール瓶のフタなどを勲章にみためて服の胸につけて悦にいった。

父は妹が七才になったときも、晴れ着の彼女を自転車にのせて、このコースでお披露目してまわり、自慢げであつた。

このような通過儀礼は、通常、幼い者に意味は了解できないのだが、時を経るとその残照がよみがえってくる。そして、その家族愛に頭がさがるのである。

二：「天知る、地知る」

昭和三十年に庄内小学校に入学した。三、四年時の担当は得能哲夫先生で、人として大切な道義をくりかえし教えていた。天知る、地知る、汝知る」の言葉は今でも心の奥底に石彫のようにきざまれている。良いことも悪いことも、天地はすべてお見とおし、正直に、素直に生きなさいというものだ。「汝知る」が最後にあるのは意味がふかい。

この時代、僕たちは甘いものに飢えていた。あめ玉を買うにはお金が必要になる。お小遣いなどという、軟弱なものはない。そこでいろいろ幼い思案をめぐらすのであるが、年長の人達がおこなっていた「茶の実拾い」がよい収入になるというので、近所のN君とつれだつて諏訪神社の裏に拾いにいった。茶の木は、秋も深まるころ、焦げ茶色のかわいらしい実を根元におとす。茶の実からは油がしぼられ、食用油、あるいは洗髪用として利用される。

小一時間ほど精をだすと、麻袋に半分ほどの収穫があった。

それをついで下町のM家の倉庫にもつていった。そこにはおだやかな感じのおじいさんがおられ、麻袋をそのまま台秤で計り、十円とか、十五円とかくださるのである。この、あめ玉につながるアルバイトにN君と僕は狂喜した。せっせ、せっせと茶の実拾いに精をだすようになった。

茶の実拾いが第二の本業のようになってきたとき、「袋の底に小石をいれたらもつと、もうかる」という、とんでもない悪知恵がうかんた。そして小石を二、三個袋の底にしよばせてM家の倉庫にもつていった。異常な緊張感のなか、計量されるおじいさんの顔をうかがっていたが、おじいさんは、いつものおだやかな笑顔で代金をくださったのである。

ところが、その作戦が成功したあとの心地は、満足とは、ほど遠いものだった。「汝知る」得能先生の教えが、起き上がり小法師のように眼前に立ちほだかり、あめ玉の甘さを味わうどころの騒ぎでは、なかったのである。

さらに、いまにして思えばこのおじいさんは、子供の小さなたくらみ事など先刻ご承知で、慈善事業半分の気持ちで、施しをしてくださったのだろうか。

僕は今でも、帰郷のときこの倉庫があった近辺にさしかかると、こころがチクチクする。

三…カンナ

昭和三十年代のなかばころ、我が家では屋外の厠を建てかえることになった。遠戚にあたるという、年よりではあるが、かくしゃくとした大工さんが建築にあたられた。敷地の西側にあった主屋とは別棟の、一階の物置が片付けられ、作業場がつくられた。

この作業場で大工さんは、用材の寸法出し、カンナがけ、切り込みなどをおこなった。墨壺というふしぎな格好をした道具があつて、彼がピンと張った糸をパチンとはじくと、板の上にもあざやかな直線があらわれた。この線にそってノコギリを引いていくのだ。僕は小学校五、六年になっていたが、彼がつぎつぎと繰り返すこのような技や、ノミ、曲尺などの道具類をながめて、あきることがなかった。

あるとき、カンナがけをジーツとみつめている僕に大工さんがやおら「お前もやつみいか」と声をかけてきた。製材所から運ばれてきた用材の表面はささくれだつていて、そのままではつかえない。天井裏につかうものをのぞいて、用材は、すべて表面をなめらかにするのである。料理の下ごしらえと同じ。鉛筆を削つていて、ざつくりと割れてしまったことはないだろうか。これは木の目が小刀に対して逆目（さかめ）になったと

きにおきる。カンナがけも同じで、老大工はまず板をカンナの刃に対し準目（ならいめ）に置くことを教えた。こうしないと、刃が木目にくいこんでしまうのである。そのあと、体を僕の手と体に添えて、要領をしこんだ。

最初こそまごついたものの、ひとたびコツをつかむと、この仕事は楽しいことこのうえない。

カンナがシウルシウルと心地よく板の上をすべって、うすいカンナくずが煙のように立ちのぼり、えもいわれぬ良い香りがあるのだ。僕は小学校からかえると、この作業場に入りびたつた。そのうち、老大工さんがやっているように、削りの調子がわるいと、片眼をつぶって、刃の高低をたしかめ、トンカチで調整することまでやるようになった。ちなみに、刃を出すときは刃の頭を直にたたき、逆に引つ込めるときは台木の頭をたたく。

事情を知らない人には、大工が連れてきた見習いの小僧がいる、と見えたことでしょう。

四…水くみと薪

子供のころはさまざまな家事をこなした。

このころ、水道がまだなかったので、敷地北側にあつたつり

ん（井戸）から、庭を通って別棟二階の台所に水をはこんだ。今日でも、アフリカなど後進国の子供たちが、水はこびをして、いる映像を見ることがあるが、これは重労働で、しかも毎日のことであるからいささか難儀した。しばらくして水道が通水したときは、水の主宰者たる母にもまさる喜びをかんじたものだ。

当時の燃料は薪かプロパンガスである。薪は大人が太い木をマサカリで割って、縁側の下につみあげていたが、僕たち少年も誰に言われるともなく、北方の林などに、枯れ枝を拾いに行った。これらはおもに本体の薪を燃やす前の火種として重宝されたのだ。枯れ枝の束を背中に三段、四段と積みあげてオミケンザカなどをおりてきたものである。尊徳のように、本を読みながら運んでおれば、いっぱしの人物になっていたか。

五・ミヨウガと蚊

夏になると、父にいわれて、茶の生け垣の下に生えているミヨウガを採った。彼は一個一円で買いつけてくれるのである。一口にミヨウガを採るといっても、そこには慎重な経営センスがもとめられた。まだ細くて小さなものは父（顧客）に喜んでもらえないし、第一明日の商売がなりたたない。十分に成長して、白い花を咲かせる寸前のものだけを、もぐのだ。芽生えてきた

子ミヨウガの成長具合を観察して、その収穫時期に見当をつける。そして、明日は一円、明後日は二円などと、おおまかな収入計画すなわち、あめ玉購入計画を立てておくのである。

こうして採ってきたミヨウガを、父はかるくあぶって、あの独特の風味を強め、醤油をちよいとかけて晩酌のツマミにしていた。僕はそのわきで、あのヒトスジシマカなどにさされて赤くなつた足や首筋を、千手観音の手つきで引っかいていた。

六・貯金箱

夕方になると、大ぶりの菓子箱に似た木製の貯金箱をもって組の各家をまわつた。この貯金箱の上面には、硬貨をいれる細い入れ口が十本ほど開けてあり、箱の中にはそれに対応した小部屋がつくられていた。各家は自分のそれに、わずかばかりの硬貨を入れていくのである。「きゅはねが（今日は無い）」という家もあって、その家計の具合が子供にもわかつた。

一定の期間がたつと寄りあつて解錠していたが、そのつかいみちについてはわからない。

時代をさかのぼる明治三十五年の庄内について新聞記事。「頼母子講が多く有る：これ等は全て焼酎飲みを目的とし、村内に害毒を流すこと多々あり。改良又廃止すべきものなり」かたち

をかえて、善良になった相互扶助の制度が残っていたのだろうか。

七…おだやかな桜島、こわい霧島

父の教育法はもっぱらゲンコツという、シンプルこの上ないものだった。前田用水のトンネル潜り、屋根のぼり、けんかなどをしても、むしろ喜んでいふふうだったが、来訪した父の友人にあいさつをしなかつたり、近所の年少を泣かしたりすると、きつーい一発がとんできた。

ところでゲンコツにも二種類あるのをご存じだろうか。

ひとつは、指三本を平たく突きだして握るもの、もうひとつは中指一本だけをとがらせて握りしめるものである。そのシルエットから前者を桜島ゲンコツといい、後者を霧島ゲンコツと称する。

「同じエネルギーをもった物体は、衝突面積がせまいほど破壊力が大きい」父はわれわれ兄弟の悪さの程度におうじて、この二種類のゲンコツを微妙につかいわけていた。霧島のその威力は物理法則のとおりだ。

八…子守り

僕には四才下の妹がいる。彼女はめずらしく、産婆さんによってではなく、庄内病院で生まれた。当時、屋敷の入口には竹の柵が組んであって、葉影に大小のカボチャが見え隠れしていた。その緑のアーチをくぐり、白い制服の看護婦さんに抱きかかえられて、はじめて彼女が家にやってきた。しばらくすると子守りは僕の仕事になった。帯をたすきにかけて、おんぶして、校庭や願心寺のあたりをまわったり、近隣の仲間とあそぶのである。ところが、悪童がいて、背中の赤子をつねったりして泣かすのだ。僕は枯れ枝などで対抗するのだが、敵は身軽である。火のように泣きはじめた彼女をあつかいかねて、家路につくのがあった。

九…焼酎

母の都城高等女学校の同級生で、一番の友達は霧島酒造創業家のお嬢さんであった。卒業後もつきあいがあつたらしく、母の生家である都城本駅の裏、川東に帰ったときなど、よく江夏家につれていかれた。僕の背たけよりおおきな、陶製の焼酎かめが無数に並んでいたのを思い出す。

いまはどうか知らないが、当時は酒宴が盛り上がりつつあると

必ず、数あてゲームの「ナンコ」がはじまった。対戦する二人のあいだに、足付き膳がおかれ、僕らこどもは「稚児」とよばれて行司の位置に正座する。そして、ナンコに負けた相手の盃に、うやうやしく焼酎を注ぐ役目をはたすのである。相手が三杯のとき、一杯程度しかのまないナンコ名人の父は、一目おかれる存在のようにみえた。座がみだれてくると、きまって「山芋掘り（口論）」がはじまり、終宴がちかいことを告げるのである。この頃はじめて、大人の目をぬすんで焼酎を口にくんでみた。のち、麦酒をのんだときもそうだったが、大人があのような奇妙な味を好むのを、不思議にかんじたものだ。だが、わけもわからず、大量にのんでしまう子供もいたようで、そのときは「首だけ出して土に埋めると酒のぬげがはいそうだ」と、都城の祖母は話していた。

父は普段でも、役場で牟田町で安永旅館で友人宅で家の晩酌で、—ようするに春夏秋冬のんでいた。ときには夜、九時すぎに仲間たちを自宅につれてきて盛大な二次会をはじめた。母の苦勞を見ていた僕は、ある日宣言した。

「カーちゃん、おいは大人なんっても、ぜったい焼酎はのまん」
半世紀以上たった今、おやじをしのぐ酒豪となった自分がいる。

十・台風

いま思えば安永馬場、庄内は町全体がアドベンチャーワールドのような空間だった。その最大のイベントは、次からつぎへとやってくる台風で、真空管ラジオから予報がでると、祖父は竹の竿と荒縄で内外から雨戸を固定し、強風と豪雨にそなえた。

いよいよ台風が襲来すると、「ぼつけもん」の僕は農業用の厚い雨ガッパに身をつつみ、家人にさとられないよう家を出ていくのだった。安永馬場と元町馬場が交わるところで、小学校に避難する四、五人の一家に遭遇した。私設救助隊の出番である。かよわそうな婦人を中心に抱きかかえるようにして講堂まで援護した。そのあと願心寺の北門のあたりを偵察に行ったのだが、ここは丘陵の突端という地勢から、一段とすさまじい暴風雨であった。経験された方も多いと思うが、大型台風の風と雨は、真横、あるいは下から体を直撃する。木の枝、トタン板、バケツなどは水平に飛行していく。竹林は歌舞伎の「連獅子毛振り」のようにうねり狂う。危険きわまりない。家にかえった僕は母にこっぴどくしかられた。台風一過の翌日、田んぼをみにいったら、たわわに実っていた稲が、カーペットの柄のように平たく田地に張り付いていた。丹精こめた農家の悲嘆は、はかりしれない。

講堂まで援護した一家の婦人は僕のことを分かっていたらしく、後日、母は礼をいわれたという。

十一…火事

昭和三十七、八年ころだったと思うが、庄内中学校に隣接する、菜種油工場が自然発火により、全焼する火災にみまわれた。時刻は、夜半を過ぎていたと思う。我が家の二階から見る真東、五百メートル程の距離の夜空が赤々とそまった。いく度か民家の火事はみたことがあったが、この工場火災は規模がちがっていた。工場には何本もの、油をいれた業務用ドラム缶が保管されている。火災が燃えひろがるにつれて、これらが熱せられ、大音響とともに夜空に壮大な火柱が噴出するのである。消火の手はずはなかった。翌日学友と焼け跡を見た。四、五本の炭化した柱をのぞいて工場は跡形もなかった。

十二…体験入隊

自衛隊は昭和二十五年の創設当初は警察予備隊、その後二十七年には保安隊と改称され、さらに二十九年に現在の名称となった。ときどき五十市の駐屯地から彼らが威風堂々隊列をくんで、庄内橋をわたり、役場通りの方に行進してくるのを見る

ことがあった。僕らは「保安隊がきた！」と胸を高ならせた。また、中学校下のレンゲ畑で小ウサギをあそばせていたとき、突然、迷彩服にツルをからませた野戦訓練の兵士たちがあらわれて、びっくりしたこともある。

あるとき、東区出身のジェット戦闘機パイロットが、近くの訓練空域からちよつと寄り道し、生家の上を低空飛行した。その爆音にびっくりして人々は屋外に飛びだし、事情がわかると皆で喝采をおくった。晴れて戦闘機乗りとなった先輩の凱旋飛行だった。

敗戦後まもなくの時期ではあったが、庄内では子供から大人まで、彼らに変わらない親しみをかんじ、また敬意をはらっていたように思う。

昭和三十八年春、十六才の僕は親に二百五十円の費用を負担してもらって、都城第四十三普通科連隊に体験入隊した。訓練項目には火炎放射器の実演見学、手旗訓練、時計をつかって方を割りだす練習などがあった。

朝一番の日課は、国旗掲揚であった。青空へと、のぼっていく日章旗に敬礼しているとき、おごそかな感情がわきおこってきたことが、心にのこる。

◎おわりに

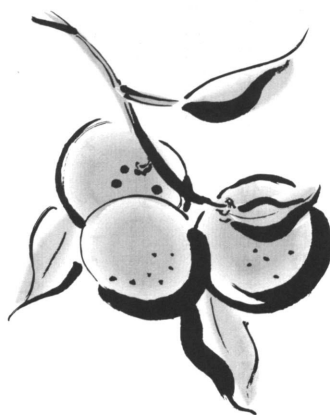
思いだすままに書きつけてきました。庄内には、日本のうるわしい価値のおおくが、調和したかたちで息づいていたと思います。

身近に関之尾の瀑布や、高千穂の霊峰をのぞみ、自然への畏敬の念はおのずとはぐくまれました。また諏訪神社や母智丘、願心寺は神仏や祖先への尊崇の気持ちをめばえさせました。各家庭の一番よい部屋には、明治大帝と西郷隆盛の肖像がかかけられ、かけがえのない大切な国柄や、それをまもる、尚武を重んじる気風がうけつがれていました。さらに、教育熱心な先人たちは、子供たちに仁義知信などの徳目をくりかえし説いて、訓導したのです。

「庄内は日本の故郷である」

この地に生をうけたことは、奇跡にちかい僥倖であった、と思う今日このごろです。

(まえだ・みつまさ 著書『庄内新郷立由緒・前田政右衛門』小説三島通庸
いずれも鉾脈社)



兄一也への手紙に見る

戦時下のわが家

東区 坂元 武

(宮崎市在住)

戦争が終わってすでに六十九年が経ちます。当時を知る人たちも少なくなり昭和も遠くなりつつあります。戦争を知らない私ども戦後世代の一人として、戦時下、庄内の人たちはどんな暮らしをしていたのか知りたいし、そのような記録を後世に残しておくべきではないかと思えます。

ところで、私は七人姉妹の末っ子ですが、いちばん上の兄一也は中国長沙で戦死しています。大正一三年生まれですから、生きておれば今年九〇歳。昭和一九年に出征し、翌二〇年に戦死しています。私が三歳の時の出征ですから、私は兄一也についての記憶はまったくありません。

兄一也は出征する前の昭和一七年から昭和一九年まで中国河北省の塘沽(タンク・天津の近く)の華北塩業事務所というところ就職していました。兄一也が当地でどのような日を送っ

ていたのかわかりませんが、庄内の家族は兄宛に手紙を出して、出征のために帰った兄は、これらの手紙も持ち帰っています。家族みんなが出していますから、それらを読むと当時の我が家の生活ぶりがかいま見えてきます。

母の手紙(昭和十七年九月、母三十八歳)

「徳郎の勉強部屋をもう少し勉強室らしくしてやらなければとお父さんをお願いしているけれども、今は釘もなし、なにもかもタマガルほど高いので何もできません」「それから石けんをほんとにほんとにありがとうございました。皆大喜びしましたよ。久し振りに石けんを潤沢につけてノドクビやセナカを洗ってほんとに嬉しかったですよ。あの石けんは支那のにおいがしますよ」「洗濯石けんの方は送ってこないのだから、あきらめていたところへ送ってきたので、クワン声をあげているところへ、また四個送ってきて勿体ないようでした。支那のシナはたいへんシナがいいですよ。荷づくりが少しザツトでしたよ」

手紙の最後には「折角男子と生まれてきたのですから、修養して一身の向上につとめてください。これが即ちお国へのご奉公だと思えます」と結んであります。

石けんを送ってくれたことにことのほか母は喜んでいました。

あの頃は石けんのかわりに何を使っていたのでしょうか。「何もかも高い」と書いていますが、統制経済下にあつて日用品は不足し、あつても高くても買えないというのが当時の生活だったようです。母の手紙の最後のくんだり「折角男子と生まれながらには・・・」という母の息子への訓示？はいかにも戦時中の言葉なのですが、まさかお国の為に命を捧げるとはこの時は思つてもいかなかったことでしょう。兄の遺骨が帰つて来た時は半狂乱の母だったそうですから。

父の手紙（昭和十七年十一月、父四十八歳）

「お前が出発してから早七ヶ月余りになる。ほんとに早い。夢のような気がする。朝起きると外は霜で真っ白だ。まるで雪のようだ。俺は朝は六時前に起きて朝飯の支度にかかる。英子は自動車で七時過ぎに出発するが、徳郎は七時には出るの朝は大変忙しい。お母さんは夜中、武坊や康子が泣くので、起きづらいから、父が飯焼きをやることに決めて実行している」「英子に送つてもらつた靴もローソクもついた。ローソクは殆ど折れていたが使えないことはない。大変助かる。値段が高いそうだから今後は送らなくてもよい。今日送つた洋服の中にキヤラメル四個（小）を入れておいたが、これはこの前の配

給品だ」

父の手紙（昭和十九年三月）

「さて、貴殿の徴兵検査も愈々間近に迫り・・・この上なき喜びに堪えぬ次第に御座候。検査には首尾よく合格する様、爾今、益々御注意の上今より一層の体格練成に努力せられるよう遥かに祈り居り候」

最近「まるで雪」のように見える霜の朝は見られなくなりました。私が小さい頃も霜でからいも畑が真っ白に見えるものでした。「霜どけ」などという言葉も使われなくなりました。父のこの手紙にも、靴、ローソクを送つてくれたことへのお礼が書いてあるのですが、一也の居たタンクという町は物がたやすく手に入るようなところだったのでしょうか。そもそも昭和一七年ごろは日中戦争のさなかで戦地から離れていたとはいえ、近辺は緊張した環境にあつたと思います。まだ一八歳、なけなしの給料からわが家からの催促にせつせと荷づくりする兄のけなげな姿が想いかびます。

私と康子が生まれて（昭和十六年）子供六人になり、父も母も子供たちの世話で朝からたいへんだつたようです。姉は当時都城高等女学校へ通っていました。この手紙は昭和一七年のも

のだから、徳郎兄は都城中学校へ通っています。姉はバスで、兄は歩いて（下駄ばき？）で都城まで通学していました。あの頃は、弁当など持って行けたものだろうか。守雄、庸は小学生だったのだが、昼飯はどうしていたのでしょうか。戦後、私が小学生のときは、家まで帰って食べていたものですが。朝から子供たちのために、カマドに火を付けて飯を炊く父の姿が彷彿としてくる。とにかく子だくさんで、子供たちの世話がたいへんだった。

一也の徴兵検査の日が迫り、父も目出度く合格するようにと励ましています。昭和一七年当時はまだ日本軍は南方戦線で勢いを得ていた頃ですから、父も息子にはお国のためにひと働きしてほしいと思っていたのでしょうか。戦地には行ってほしくないという気持ちはなかったのでしょうか。

姉英子の手紙（昭和十七年、十五歳、都城高等女学校二年生）

「私たちは今、田植えの加勢に行って居ります。・・みんなと一緒に田植えをしていますと、あちこちに悲鳴があげられます。それはひるが吸い付いていたので皆おどろいているのです。人が悲鳴を上げるとおかしくなりません。自分でも実際はこわいのです」「今から注文を少々。あのね、そちらに靴はありま

せんか。私、靴を一足も持たないので何かの場合に困るんです。靴があったら送れたらおっくつてください」

女学校生徒だった姉たちは、毎日勤労奉仕にかりだされていたようで、勉強の方はテゲテゲな毎日だったようです。姉は「思い出の記」で「勉強が嫌いだっただから、勤労奉仕の方がよかったです」と書いていますが、この手紙からもそれが少しわかるような気がします。靴がないから送ってくれ、とありますが、当時、女子も下駄ばきで通学していたのでしょうか。

兄徳郎の手紙（昭和十七年八月、十三歳、都城中学校一年生、夏休みの時の手紙）

「宿題は英語、国語、代数、それから頭の痛い軍人勅諭はあと少し覚えられません」「くわん欄舎はおもしろいです。また怖いです山田対庄内の武道交換試合は庄内の勝ちでした。みんなが、よかむんがのさい、というので楽しんで行きましたが、ソーメンだけでした」「肝試しは一回ありました。私は諏訪神社でした。恐ろしいと思っていました、どうもありませんでした。」

かん欄舎は元役場の裏にありましたが、私たちにはまったく縁のないところで、古びた建物の印象しかありません。当時の

青年たちはここで上級生からしごかれたということですが、多感な少年時代でもあり、ここに寄り集まった当時の少年たちの思い出は、語れば盡きぬものがあるかと思えます。

兄徳郎の手紙(昭和十八年十一月、十五歳、都城中学校三年生)

「私は今日は欠席しました。傘がないので雨の日は欠席します。庄内からは去年、得能、肥後、森山の諸兄を送りましたが、今後、海兵に坂元、福留、大峰、甲種飛行に福留、少年航空兵に福村の諸兄を送りました。なお中学校では五十三名の将校学校合格者がありました。私も二月に受験します」

この頃になると世の中は「撃ちてしゃまん」の戦時体制が強化され、軍国主義教育を受けて来た少年たちは、「今こそお国のために」と勇壮な志をもって中学校を卒業していったようです。徳郎兄も甲種飛行予科練習生として、福岡海軍航空隊へ入隊、その後大村海軍飛行隊に配属され、そこで終戦を迎えています。兄たちはまだ中学校を卒業していません。終戦後、都城中学校へ復学しています。皇国日本、神州不滅を叩きこまれた軍国少年たちは「あの戦争は何にだったのか」という思いをどこかにひきずりながら生きてきたと思えます。

兄守雄の手紙(昭和十八年、十一歳、庄内小学校四年生)

「お手紙ありがとうございました。梅の花も咲いてウグヒスが朝は鳴きます。ウグヒスの声を聞くとほんとうに春らしい気持ちになります。……」

今では鶯の鳴き声を近くで聞くこともありませんが、昔は、庄内あたりの庭先では春先になるとよく鶯の声を聞いたものです。こんな便りに、兄一也もさぞかし庄内が恋しくなって、庄内の家に帰りたくなったのではないのでしょうか。

兄庸の手紙(昭和十八年七月、庸八歳、庄内小学校二年生)

「かくこうのぶうるができました。けいほうだんのひとたちがきて、どくわんをはめてくださいました。水がどんどんきまします。まだ汚れ水ですからあぶりません。私も水をあびてくろいからだになっていっしゅうけんめいべんきゅうしてよいひとなりたいたかんがえます。」

小学校のお軍神の東にプールがありました。私たちが小学校の頃は、このプールでよく遊びました。城山の方から水を引いていましたが、なにしろ溜めた水なので水温が高くなると水の色が変わってきます。それでも私たちは泳ぎました。庸兄は十歳の時、庄内中学校一年生のとき終戦を迎えています。

おわりに

昭和一七年、一八年といえは国家総動員法の下、すべてが戦争の為に政策が打ち出されていた時代です。「欲しがりません勝つまでは」と日本中が辛抱生活を強いられた時代でした。物価統制で物がなく、我が家も「ないないづくし」で苦労していたようです。私は双子として生まれ、オモユで育てられたという事です。まるで猿のように痩せひぼけていたと兄が言います。戦中戦後と生活難が続いたわが家でしたが、なんとか切り抜け、こうして兄弟人並みな生活ができていることを幸せに思います。若くして戦地に果てた兄一也のことを思いながらこの稿を閉じます。



「学徒動員」の思い出

東 区 山 元 哲 朗

私たち、都商三年は大東亜戦争末期、学徒動員の名のもとで新田原飛行場（現在の自衛隊新田原基地）に動員された。地上にある飛行機を守るための掩体壕作りである。期間は二週間程度だったと思うけれどはつきりした記憶はない。飛行場なのに日中、一機の飛行機も飛ばない。地上には一機の機体も見なかったのを覚えている。

あれから七十年以上経過した昨年七月十六日、東区第一高齢者クラブ三十名で現在の新田原基地研修視察に行った。旧隊員であった松下敏男さんの世話でいろいろ便宜を図って貰いありがたかった。動員されたときは十歳代、今の私は八十歳代、七十数年前を思い起して感無量なるものがあった。

新田原の動員から帰るとすぐ今度は飛行場造りに動員された。場所は沖水地区だったと思うがはつきりしない。ここでは現場近くの旧青年学校校舎に宿泊して一カ月程度働んだ。記憶

の薄いものばかりではどうかと思うので、今でもはつきり覚えていることを記して見たい。

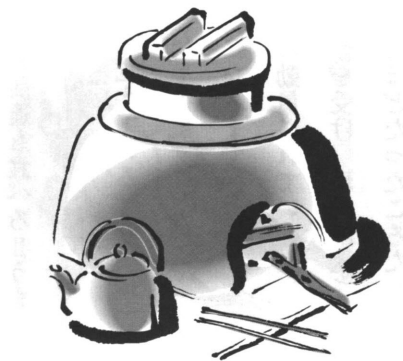
この動員では、韓国の人も動員されてきており、一緒に仕事をしたが、ある日、土手を崩したら蛇が出てきた。韓国人の一人がそれを素手でつかまえ、口で頭の方から皮をはぐと、真っ白な身が現れた。私はビククリしてただ見ているだけだった。翌日昼食のおかずを持ってきて、「御前達も食べる!! うまいぞ」と言いながらおっかけられたけど、前日の事を見ているので、「食べられない」と逃げ回ったのを覚えている。期間は一カ月程度だったが、「キツイ」と思ったことはなかった。

三度目は飛行機製造工場に終戦になるまで行った。私達より外に都中、小林中、都高女と同時に動員されていた。

一カ月程度、工具の使用法の研修を受け、現場配置され、鋳打ちの仕事が主な仕事だった。どれほどだったころだったろうかアメリカ製のグラマン戦闘機の翼の一部が置いてあった。鋳の打ち込みがとてもきれいに揃っていた。自分達の仕事と比較して米国のの方がはるかに上手で比較にならないと秘かに思った。誰にも言ったことはなかったが、技術的に私達は負けていた。戦争にも負けるのではないかと何となく思った覚えがある。日数・時間を重ねる中、徹夜作業もするようになった。工場ま

では歩いて二時間程度かかった。弁当も二食分持って行くことになったが、一食は米に麦、カライモまじり、もう一食は「カライモンダゴ」などを持って行った。

真面目にしたいけれど、時には「キツイ」時もあつてサボリもした。庄内小学校と付近の人家が米軍空襲により、焼失した日はサボリして家にいた。八月六日、広島原爆投下と同じ日だった。続いて八月九日長崎に投下された。十日早く終戦になれば原爆投下もなかったろうし、立派なあの講堂や校舎、更に一般の人家にも被害はなかったらうにとの思いが強い。平和が良い、戦争はダメ、二度と戦争のない事を願い、思い出の終わりとなります。



庄内のできごとなど…

乙房町 馬籠 英男

(一)「まずは乙房から」

このほど、乙房公民館から「ふるさと乙房の記憶」という本が発刊されました。これは、平成二十年二月に刊行された「ふるさと乙房をさるく」に続く第二弾としてまとめられたものです。第一回の「乙房をさるく」が、主として「地域をテーマに構成されたのに」続き、今回は乙房区民が「明治、大正、昭和をどのように生きて来たか」をテーマに取り上げられたものです。明治維新から一五〇年になんなんとするこのときに、このようなすばらしい事業が実を結んだことは、誠に喜ばしいことでもあります。編集に当たってこられた、大重信昭委員長をはじめ、相原初男、武田浩明、宮元雄次郎の各氏にエールをおくります。さらに、第三弾を検討されんことを念願するものです。

(二)「六月灯」のこと

六月灯といえは夏の風物詩であり、各地区とも年々賑やかさを増しているところですが、乙房でも観客は増加の一途を示しています。例年では、千人以上の観客と、二十数件の夜店の出店で賑わいますが、今年はいくらの雨天で観客はいくらか少な目でしたが、テント張りの舞台を、傘をさしてみつめる人たちは最後まで舞台とひとつになつて動ずることはありませんでした。

ちなみに、乙房の六月灯は七月十一日と決まっていたものを、直近の日曜日に変更したことも、観客の増加に結びついたことでもあるかと思っています。

(三)「敬老まつり」のこと

乙房敬老まつりは、例年、「敬老の日」の前日の日曜日に開催されるのが恒例となっており、今年は九月十四日に開催されました。今、乙房の高齢者は、七十五歳以上が二七五名ということで、その約半数の方が参加されました。保育園児のダンス、小学生の奴踊り、カラオケ教師の歌、高齢者クラブの踊りなど、多彩の催しで、高齢者を楽しませていただいた一日でした。孫、曾孫の踊りに目を細めて拍手している姿は何ともほほえましく

思ったことでした。

(四) 「茶話会」のこと

このほど、乙房地区のボランティアの皆さんが開いていただきました「茶話会」は、本当にうれしいものでした。一人暮らしの方々、七十五歳以上の高齢者をお招きいただき、七十名の参加者がありました。お茶とお菓子をいただきながら、岩佐先生による歌謡教室等もあり、久し振りの会合で話は尽きることもないほどでした。ともすれば、こもりがちになりがちな高齢者、一人暮らしの方々を、このようなかたちでお招きいただいたことが、気分も晴ればれ、生きる力が湧いて来たところでおります。

(五) 「乙房の便り」のこと

今、乙房内で発刊されている便りは、次のようなものがあります。

一、「乙房公民館だより」(月一回発行)

二、「乙房駐在所だより」()

三、「乙房っ子」(小学校だより)()

「公民館だより」は、他地区でも発刊されていますが、公民

館行事の周知等が主であり、駐在所だよりは、地区内の安心、安全、防犯等で、地区内に住んでいる者にとっては、心強いものです。乙房っ子は、子供たちの元気な姿がみえているようで、本当に好ましいものです。このようなお便りを全家庭に配布していただくことで、情報の共有ができ、より連帯が深まって地区全体のまとまりが強まってくるものと思っています。

(六) 「庄内での動きを」

「庄内を紹介するDVDの」作成のこと

私たちのふるさと庄内を紹介するDVDの作成がすすめられています。庄内地区まちづくり協議会によれば、「庄内地区の自然、文化、暮らし等を撮影し、目的に応じて編集したものを各種媒体で発信することにより、地区住民の意識向上と対外的アピールの強化を図り、観光客の誘致や定住促進に資する」ことを目的に目下その作成に着手されています。まずはそこに住んでいる地区住民が自分たちの地域の歴史や文化などの魅力を再発見することによって意識の向上を図り、まちづくり事業を加速させようとのねらいもある。また、小中学校の児童生徒は歴史を学ぶ教材として利用することによって郷土を誇りに思う心を育てる。さらに対外的には関之尾などの観光地の紹介と、

四季を通じた行事、花などや、歴史を感じさせる町並み、史跡、民俗芸能等の魅力を発信し外来客の誘致と定住促進を図るとい
う画期的なもので、今からその完成が待たされるところであり
ます。

なお、これと同時に、まちづくり協議会では、「庄内地区歴
史文化読本」の作製、「庄内地区史跡保存整備事業」もあわせ
てすすめられる計画であり、まちづくり協議会の事業が一つひ
とつ形として見えてくることになり、その成果が期待されます。

(七)「ホタルの話」を一つ

「今年の夏は、ホタルがたくさん出てよかったですわ」。かつ
てホタルの名所といわれるほどだった川崎地区や、平田地区の
友人から、期せずして同じ言葉を引き、うれしい気分になった
ことでした。原因がどこにあるかわからないことはわからない
が、これが一過程のものでないことを願っています。最近、環
境の変化でホタルも姿を見せずさびしい思いをしていた矢先で
あり、まちづくり協議会でもホタルの養殖場を作ったかどうか、
真剣に議論し、候補地の現地調査まで実施した経緯もある中で
のことで、ホタルが住める環境が復活したかと、よろこんだこ
とでした。



「帰郷」 III

久保原町 宮下俊彦

一、墓の穴掘り

班員になって、最初の夫役は、森さんの子供さんの葬儀の加勢でした。村八分の家でも、火事と葬儀の二つは欠かせない班の大事な共同作業です。葬儀社もない田舎町なので、家業はさにおいて、各戸一人宛参加して、班長の指示で、葬儀の一切を分担して実施します。

賄い場所の山本様宅の広い台所には女の方、座敷には男の人がつどい、今城正夫様の作る棺桶以外の、葬儀用の物品はすべて班員の自前です。その上葬儀に参加の人々の香典とお供物だけで経費の一切が賄われます。

お通夜の「目覚し」から、お寺及び親類筋への「つけ」（連絡係）は必ず二人。賄い方は、葬儀に参会の方の内「別れ膳」の必要数の把握と作製。

受付係は、香典をあけて、賄い方への支出。葬儀を引き立た

せる青色・白色ののほりになる反物代、供花を作る金色及び銀色の紙代の支出。

のほりの旗、供花の製作は、座敷に陣どった男の人達の分担で、皆、てきぱきと進められます。玄人跣のこれらの作業を見ているだけの私に与えられたのは、西墓地に穴を掘る等、埋葬地を作ることでした。スコップ作業なら、勤労奉仕作業で鍛えられているので、もう一人の大人の人の指図で穴を掘りました。深さや直径等、法の定めがあるのでしようが、只夢中に掘りました。色々教えて下さった相棒の方を今は思い出せません。

墓の入口の処の小屋に、棺を乗せて運ぶ荷車があつて、それを引いて、葬儀の場に帰りました。

仏事が終わって、出棺となると、子供の持つ、青や白の旗を先頭に、葬列が出来ます。子供達には、普通送りか上等送りかで、倍額の持賃が渡されます。

葬列の中頃に、お棺を乗せた荷車を引いて並びます。西墓地の入口は、五十段位の階段になっているので棺を下し、その後埋葬地迄どうしたかは記憶にありません。荷車を小屋に納めて、早朝から一日かかって葬儀は終わりました。そして、墓の穴掘りの二人には、その頃では貴重品だった焼酎を一本宛頂いて、穢れを払いました。江戸時代刑死の埋葬など非人の行なった役

なので、これも村の掟なのだろうなと思いました。

二、庄内町町区青年団員となる

昭和二十三年三月一日、県立小林中学校を卒業して帰郷し、庄内町の住民になると、隣保班の一員となり、青年は、居住地の青年団に入らなければならないということで、四月初めに、青年団の集会に出ました。公会堂は、町の十字路の坂を下りた左側にあつたと思つていましたが、同級生の児玉米蔵君の家が天神馬場の新居に転居されて、旧宅が町区公民館になっていました。

二階の広間には、男女の若者が集まつていて、青年団は男女混合なのだなど初めて知りました。昭和十一年四月入学の庄内小学校一年及び二年は男女半々のクラス編成で男女共学でしたが、以後男だけのクラスで、更に先生も師範学校出身の海江田フサ先生をはじめ女学校を卒業早々と思われる黒岩先生、亀沢先生、江口先生、前田先生と子供心にも花のような女の先生がいらっしやるのに、一度も縁がなくて六年間の義務教育を終了（六年生になつて、小学校が国民学校になり、立案者の方の義務教育でもないのに高等科二年に進学するのが一般的な状況に即応して、六年間の義務教育期間を八年に延長し、六年は終了

で、八年間の義務教育を卒業とされたい御意向だったようで、その反映かも知れません）して、進学した旧制中学校五年間が男子校でした。更に上級の中学校進学の願書に必要な戸籍抄本で知つた出生の秘密のこともあつて、私と母だけに分かる三訓（①勉学に励め。②金のことは考えるな。③女に気をつけろ。）を忠実に守つて、学校では硬派に属し、二兎を追う者の故事も、「男の一兎は希望校に入学して己の生活基盤を作ること。後の一兎はその成果によつて自ら生ずる」の先輩の教えを守つてきました。これからは男女共同社会の一員として生きることになり、今まで女の方が三保の松原で天の羽衣をなくした天女のように清く美しい最善のものから、身近なものになります。

イ、青年会の役員になる

集会の議題は、二十三年度の役員を決めることでした。執行部の案があるでなく、話し合いでもなく、選挙で宮竹繁美様が会長に決まりました。副会長等三役が決まつて、平委員の段になつて、不思議にも私にも一票がありました。初めての会で何にも分からない私のまぎれ票には気にもかけずにいると、繁美ちゃんが「俊ちゃんも今年一年役員として頑張つて呉れ。意見があれば言つて呉れ」と。繁美様にはすでに会長としての品格

が感じられ、重みもありました。

また、委員の選任は会長の権限でもあるのか、会員からの異議もなかったので、「初めて会に出会しての感じを言って良いですか」と申し上げると「遠慮なく言え」と言われました。「この会は、男女一緒のなごやかな会で、良い会に入れたと思います。ただし入会の原因が義務として参加しているのは。戦後四年目の民主団体とは、しつくりきません」と申し上げました。

繁美会長の決断は、①町区青年団は、即刻解散。②即、自由意志による参加申込書による町区青年会の発足。となりました。

私は何時も良き友、先輩、上司に巡り会えて幸せです。つたない考えを直ちに取り上げて頂いて有難いです。後日、汾陽松一様が会長の時、社会教育の指導者としては、県下で第一人者と言われた四元茂先生から、県下の民主的青年会模範として表彰されますが、この時の繁美様の決断に因すること大ではないでしょうか。

口、草場入札

青年会役員の初仕事は五月初旬の草場の入札でした。明治の初め、地頭三島氏が随伴した二人の奉行の方は有能な人達で、一人の奉行は周辺の大工、左官、瓦職人等総動員して、三島通

りを造り、通りに沿った商家を作り街づくりに励みます。もう一人の奉行は、庄内川を治水して用水を確保します。その一つが堤防であり、以後集落の人々が地区毎に管理します。

庄内橋の北側から下川崎橋の中間までが町区の管理としてあり、更にこの堤防の草を青年会が管理し、一頭当たり田三反位の藁を必要とする役牛役馬の飼料の補足の為に刈草権を西区・町区の農家に買って貰う。これは青年会の収入になります。

入札を前に繁美会長は、店から持って来させた焼酎を振る舞われます。その意図は双方分かっていて、酒盛りで空気がなごみます。自分達の金で青年会活動が出来るとの思いが話のはしばしに感じられ、「繁美ちゃんはやっぱし商人じゃわ」と褒め言葉も聞かれました。頃合いを見て入札が始まりました。

ハ・お祇園様（オギオンサー）

東区の青年会の人々は、成人の方も含めて伝統の「くまそ踊」の伝承が大きな責務で、本誌に東区の鎌田康正様が詳しく説明されていますが、町区青年会には夏祭り（六月燈）の花「お祇園様（八月十四日～十五日）の山車がありました。「ヤマ」と言っていました。

町区六班の山元正二様のお家で組立てて、ここを起点に、八

坂神社までは「上り囃子」、帰りは「下り囃子」で東区の諏訪神社まで、庄内の表通りを練り歩きます。中村義美様の牛が引くスピードですからのんびりしたものでした。

京都の祇園祭りをはじめ、全国各地の立派な山車と違って素朴を通り越して、みすばらしい山車ですけれども。夜になって、明かりがつくと結構それらしく見えます。このようなことが言えるのは、テレビで全国のが見られてからのことで、テレビ普及の十年以上前の話ですから、当時はハナ（御祝儀）も沢山頂いて、金額も貰った額以上に書いて景気づけして、お名前と一緒に、山車の廻りの網にいっぱい貼り出して心から楽しかったです。

三味線、太鼓はそれなりに、私の担当の鼓方は、触ったこともない楽器ですから正式に手で打っても音は出ません。唐竹を割った竹べらで叩きます。俄仕立てですが祭り気分を盛り立てるには充分です。バイオリンの山口敦美様、今村忠士様、汾陽松ちゃんは、ベテランと見ました。

山元正二様のお座敷で、浴衣、鉢巻の前に女子青年の方から、顔に真白に化粧して貰いました。お昼には、お化けみたいでしようが、夜のガス燈やほのかな灯りではそんなに目立たずに見えますから、私もそうなのかなと恥ずかしいけれど我慢しました。

三、庄内町区消防団員となる

昭和二十三年の秋口と思いますが、町区消防団の団員となりました。庄内町には消防署はないので、庄内小学校高等科を卒業した十四歳から三十歳位までの青年は、皆夫々の居住する集落（区）の消防団員になります。

庄内町消防団

一部	乙房区	二部	平田区
三部	川崎区	四部	関之尾区
五部	西区	六部	町区
七部	東区	八部	今屋区
九部	千草区	十部	宮島区

消防車は、六部の一台きりで、他部は手引きのポンプ車でした。昭和二十三年ごろは、地域共同体の一員としての義務の気持ちで加入しました。青年会のように、自由意志とは言えませんが、ただし各戸から一人入れば、各戸の義務は果たされたと理解されたようで、私の年齢では又木茂ちゃんと二人だけだったようです。

年末年始の火災シーズンの夜回りや正月早々の出初式を前に、誘われて入団したように思います。夜回りの期間は、十二月一日から二月末日までで、四人で一組の組を作り、一週間に

一回位のローテーションだったように思います。

私達の組は、浜畑光盛様、今村忠士さま、又木茂ちゃんと私です。私と同年の浜田秀美ちゃんも今村孝男ちゃんも入っていません。四人共町区六班の住人ですから、幼友達だったり、年上の人も、何時も顔を合わせているのでチャンづけで呼び合っていました。

夜回りは二人で回ります。「火の用心」と大声で叫んで拍子木をカチツ、カチツと叩きます。町区の地域を一周すると、一時間少々かかりました。そして一晩に三〜四回回ります。詰所での、男四人の夜長話も楽しい思い出ですが、最年長の光盛様が、時には俊ちゃんや野菜を持ってこいということ、大蒜を葉のついたまま持っていくと、夫々が肉や鍋を持って来て、すき焼きをつきました。光盛様、忠士様は結婚されていて、茂ちゃんと私には負担が少ないよう気配り頂いたのじゃないかと思えます。

年が明けて早々、「出初式」がありました。「提灯落とし」と言って、昔々の手押しポンプを引っ張り出して、各部二十五人づつの人数で二百メートル位走って来て、エッサ、エッサと提灯が落ちるまで漕ぎます。現在の操法競技と違って子供でも分かります。子供の頃は、胸をわくわくさせて見物しました。

競技が終わると、ポンプ車をプールの横に並べて、プールに赤や青の染料を入れて一斉に放水します。これも綺麗でした。そしてその夜は、町区の役員の人々が慰労会をして呉れます。未成年ですけれども、誰もが焼酎を勧めて呉れて、大人扱いでした。夜警（夜回り）がすむと又慰労会で、日帰りの林田温泉行きにも参加しました。

そして私は、青年会員、消防団員でありながら、下剋上の波は、未成年の私を父に替わって町区六班の班長にしてしまいました。以後、町区区長来住実雄様の指揮の下、町区班長六人衆として青年会を守り育て、消防団をサポートすることになりました。私が火事の報に現場に駆けつける団員の立場と、火事後の慰労の用意をする班長の立場で、二足のわらじとはいかないので、消防団六部部長の宇野様が、三十歳までの消防団員の責務は打ち切ってくださいました。

私は青年の世界から大人の世界に入り、五年間公務員になって専念の義務の生じるまで、町区六班の班長という立場で町区共同体の一翼を担いました。

四、松田農場に行く

イ、私が松田喜一先生に初めてお会いしたのは、都城市須田

会館（当時市公会堂で、現在福祉会館の場所）での農事講演会の折でした。私が農業を始めると早速駆けつけて呉れて、農業の良き仲間であり、指導者になって呉れた都城農学校出身の級友山田勝郎君と福留福一君が誘って呉れました。

私達は、昭和四年（五年生まれの、昭和の二桁生まれで、一般的に十五年戦争と言われる一九三一年（昭和六年）の満州柳条湖事件に端を発した満州事変・日中戦争・太平洋戦争、最後には世界的戦域に広がった第二次世界大戦になり、一九四五年（昭和二十年）に、米國を初めとする連合國に無条件降伏して終戦を迎え、昭和前期の二十年間を生に体験し、軍國主義から民主主義、天皇主權の國体から、主權在民の國体へとの大變動の社會を日本をすべて体験させられた世代です。

もう戦後ではないと新聞にも書かれ、人々も口にするのは昭和三十年代からで、戦中戦後の苦しさは経験のない人には理解して貰えないでしょう。一粒の米、一個のカライモでもより多く収穫したい人々で、講演会場は満員の盛況でした。先生は姿勢の良い方で、お元氣なお声で話し上手でユーモアがあり、長時間聞いても飽きない話しぶりでした。

農地改革で自作地にはなつたけれど、殆どの人が専業農家として必要な田畑一町五反、薪炭林二反位の規模には程遠く、典

型的な日本人の五反百姓の生活を改善したい、今よりましな生活をして欲しいという先生の熱意を感じました。

根本的には後述する人づくりから、農業経営学的思考に基づく行動等にあるけれども、さしあたって適地適作による地区の特色を生かした換金作物について話されました。そして都城盆地の氣候、シラス・ボラ等の土質等から「深ねぎ」が良いのではと話されました。昭和の末期に市議會報告で東京築地市場での「都城ごぼう」の調査に行かれた話を聞きました。改めて松田先生は先見性のある方だったのだなと尊敬の念を深めました。

口、ある日山田、福岡の両君が、熊本県八代市千丁の松田農場での、先生の三日間の集中講義と作物の展示会に行こうと誘って呉れました。

三人で谷頭駅を夜九時頃出発する夜行列車に乗りました。この列車は乗り換えなしに門司港まで行けるし、夜明けには目的地という便利さで以後良く利用しました。近頃夜行といえば、駅弁とかご当地グルメとか賑やかですが、その時は酒等飲み物は勿論、うどん等も一切食べた記憶がありません。車内販売や売店で品物を売っていなかったか、私達の懐具合も汽車賃が

やっとの状態だったのでしよう。

八代駅の次の千丁駅で降りて、多くの人々と共に歩きました。広い広い干拓地を海に向かって一直線の道を歩きました。

ハ、農場では用意された宿泊所に入らずに、近所の農家の藁小屋に泊めて貰いました。藁のつもりが、土地の名産品畳表（ゴザ）用のイグサだったので、顔が泥で真っ黒になりました。各戸電動で畳表製作をしていて、特に色ゴザはきれいで丈夫そうに見えました。宿泊させて貰ったお礼に一枚買って帰りました。

二、朝九時頃から夕方五時まで先生のお話を聞きながら、農業技術については想像を絶する展示物を見て、作物は人の工夫・努力に正直に応えることを教えられる見事さで、心に「よし」とやる気が起きました。

「作物量産の技術に加えて経営の才覚を磨け」

安易に唇とか言い伝えに頼らず、リスクを恐れず、作人ごろに終わらず、人としての生き方、論理を守れ。農業を通じて作物のみならず人格形成を願っておられるのだなと思い、先生の風格から古武士のような人柄だなと尊敬の心が湧きました。

私は先生のお考えを一生守るべき人生訓として受け止め、西

郷さんの「人を相手にせず、天の道に殉ずる」の教えと一致するのではと思いました。

①「七桁農業（年収百万円）の実現」

②「理想は高く、生活は低く」

③「人なみならば人なみぞ、人なみ外れに外れんぞ」

④「人造れ、土作れ、作物つくれ」

今も覚えている先生のお話、お論しを列記しましたが、相互に関連があつて、どれが先、どれが重要とかは言えませんが、農作物は「有機農業」を基本に考えておられて、牛は乳もだけれど尿を多く製造してくれるホルスタイン種を飼い、作物の畔肩に青刈大豆を植えて、次作の時田畑にすき込んで、毎年土作りに励めば、作物の分量が自然多くなる。

伊勢暦や土地特有の農事暦や言い伝え等を参考に作付すれば安全だけれど、「供給と需要」の原理を考えて

・作付の時期をずらす

・種の種類を変える（青首大根のピークが過ぎて、品薄の時に出来る三浦大根を組み入れる）

・高冷地など土地の特色を生かす

このように作文下手な私が書けば味のない素っ気ないものになります。先生に口にかかる、話し方もうまいが間の取り

方、例の取り方のうまいこと。

「三浦大根をブリと煮て、ブリ大根にすればブリより旨い」と聞くものをその気にさせる。私もその気にさせられて、母に相談すると「大根よりブリが良い」とそっけない。この話だけでなく、今屋の鶴島様が「この補助牛を予備牛に変えて、本登録の資格のある子牛を市場に出したら」とご指導の話同様で、この時期の母は二代目の医者になるべく修業中の兄の学費が最優先でつまらぬ出費はしたくない。私も農収を上げて母の加勢がしたい。それで、先生の尿尿のお話から、牛小屋より小さな豚小屋の床を改良し、尿尿溜を作ってみると予想以上に量が多まる。

農業の月刊誌に、ジャガイモは茎の変形で芽が一寸伸びる毎芋になる。現在地上に芽が出てから土寄せするが、種芋を最初から六寸プラスアルファの深さに植えよ。との記事通り深耕し、豚の尿尿をたっぷり施しました。形・大きさの揃った芋がたくさん出来たけれど、発芽に休眠時間を必要とする生理のため、種芋が自給できず当地の生産時の芋値の五倍の高値で北海道産の芋を買わねばならないので、少し位多く獲れても割に合わずこれも熱が冷めた。

有機農業でたくさん取れたカライモで加工した「朝鮮飴」を

と話されるので、帰りに熊本市で健軍行の電車に乗り、水道町の直営店で店の規模や味を試しました。おいしい飴でした。ちなみに父の実家の中村家は薩摩七十七万石の北の守り大口の山野の住民で、代々農閑期には近辺（遠隔の者は住み込み）の若者の労力を利用して、藩が既存の田には五十%以上の地租なのに、自力で開墾・水利した開田には九%しか課税しない奨励策に沿って田を増やし、産米で焼酎を作っていたと母から聞いて、喜一先生のお考えに通ずるものを感じ、私もやれないことはないと思いつつ、これには資本が先行しますので後回しにしました。

「理想は高く・・・」は容易に理解出来ませんが、特に「庄内の理想倒れ」「山田のガッツイ倒れ」「中郷の喧嘩倒れ」・・・等風評の庄内の住民としては、喧嘩倒れより良いのではないかと反論していると、安久・梅北・豊満を立派にまとめ、一万票にも満たない中郷を基盤として村長↓県議↓市長↓国会議員↓大臣と一歩一歩着実に政治家の道を進まれた方には無条件に敬意を表します。「低さとは・・・」と何十年も考えていましたが、人それぞれのことなので結論が出せません。そして文明の利器テレビが、日本一の倒産企業再建王中坊公平氏は昨年、日本一の石油王土光敏夫御夫妻については先日、御日常が放映されま

した。その低さは想像を越えました。

自称十石二人扶持で、お江戸八百八丁を駆け回る同心で最低収入層の木端役人の私でさえ考え及びません。更に追い打ちをかけるように、土光氏の母上の「個人は質素に、社会は豊かに」の御言葉に感動しました。「この母にしてこの子あり」と感じ入りました。「メザシニ匹」は素晴らしい！



庄内空襲

町区山下謙二郎

一九四五（昭和二〇）年八月六日昼頃、アメリカ軍は庄内小学校（当時庄内国民学校）を目標に空襲を行った。これにより、小学校を起点として南西方向の地域・住民が被害を蒙った。

この日、私は昼前から母方の祖母の家に遊びに行っていた。祖母宅の庭で当時ともに五年生の叔父（隆ちゃん）と外で遊んでいた。突然サイレンが鳴り、都城の方から爆音と共に「ドーン・ドーン」という音が響いてきた。早速、何人かの友達と柿の木に登って見ると、都城市街地の上空をグラマン機が旋回、急降下、上昇を続けながら攻撃している。モクモクと煙が上がっていく。それがしばらく続いたかと思うと、突然、機首がこちらを向いて迫ってきた。

「こら、こっちせえ 来っど」と、慌てて防空壕へ走りこんだ。祖母や叔母達も駆け込んできた。と同時に、「バリ・バリ・バリ・バリ」と防空壕脇の道路を機銃掃射していくようである。「ズ

シン・ズシン」と地響きも伝わってくる。私たちは防空頭巾などをかぶり、ヒシツと真ん中に固まっていた。

やがて爆音と銃撃音が消えたので、壕の外に出てみると、小学校の方にモクモクと煙が上がリ、「パチパチパチ」と音を立ててこちらにも迫ってくる。皆、家に駆け込むと、家財道具を持ち出し始めた。祖母は私と隆ちゃんに釣手のついた鉄鍋を持たせた。私たちはその鉄鍋の釣手を片方ずつ持って川崎橋の堤防へと走って逃げた。庄内の町はあちこちで火の手が上がっていた。

やがて、飛行機も去り空襲の心配もなくなったようなので、祖母の家に帰った。しかし、祖母の家は飛び火により全焼していた。自分の家に帰る時、道の両側の焼け跡は、まだ煙が燻っていた。そしてまだ、裸足の裏は道路の熱で熱かった。幸い私の住んでいる祖父母の家は戦災を免れていた。その後小学校の火は二、三日納まらず、住民がその消火のために動員させられていたのを記憶している。

この日の空襲により、機銃弾によって負傷した方の様子や家を焼かれた方々の手記のいくつか次に「庄内・第四号 特集 あの日、あの時」より抜粋して紹介する。

「私の家は宮原の高いところがありましたので都城方面がよ

く見えました。もくもく立ちのぼる煙の量からして相当の被害と察知されました。そのうち横市方向より真つすぐこちらに突っ込んでくる飛行機がありました。庄内上空で何かばらまいたようでした。それは液体のようにも感じられまし。そして二回三回旋回しながら機銃掃射を浴びせてきました。ほんの一瞬の出来事でした。やがて静かになりましたがまず黒煙を噴き上げたのは小学校の講堂でした。(中略)

西俣家には二十才になる家内の妹と家内の弟の子である三才になる女の子がいるはずで。私は夢中で走りました。……西俣家にたどり着きました。家の屋根はもう燃え上がっており妹たちも避難したかのようにでした。一安心の私は火の中に飛び込みます米びつを探しましたが見当たりませんでした。今思うと恥ずかしいようですが当時は食うものがなく一粒の米が何より貴重品だったので。屋根は藁葺きでしたので火の回りが早く床には火の塊がボタバタ落ちてきますので無我夢中でダンスの引き出しを外に放り出しました。(中略)……

庭の隅の防空壕に義妹たちがいることが分かり慌てて中をのぞいてみました所、中には義妹と三才になる初子と隣の三才の子供の三人が折り重なって倒れて居るではありませんか。子供

二人は無傷で大丈夫でしたが義妹はうつ伏せになったまま動きません。びっくりして抱き起こしますと胸の辺りからドツと血が噴き出しました。胸に大きな傷をしているようです。まだ死んではいませんでした。……軍医さんが駆けつけてくれました。応急手当の結果幸いにも命は取り止めたが何日も高熱が続きました。(中略)

それにしても大変な事でした。男手は兵隊に取られ義妹と三才児二人の生活の中で家は焼かれて住む家なく動くに動けず何という不運だったのでしよう。外にもたくさんの犠牲者はありませんでした。私たちがばかりではありませんでしたがほんとに情けないことでした。(後略)〔庄内・第四号 特集 あの日、あの時〕久保田武美「忘れえぬ大惨事」より)

「私は当時満二十才で、庄内の郵便局に勤務していました。男性は召集で戦地にかり出され、郵便局を女性の力で支えるのは大変な事でした。たくさんの部隊が駐留していましたので、その分仕事の量がふえたのでした。(中略)アメリカ軍が志布志湾に上陸するだろうという噂も聞くようになり、女性も竹槍で決戦にいどむのだという悲愴な気持ちを持っていたと思います。竹槍で戦うなんて今考えるとあほらしい精神論だと考えさせられます。昼食のため、八月六日、家に帰っていました。

その時、空襲警報と同時に都城が空爆され大火災の煙が上がりました。都城が焼けるのを見ておりましたら、艦載機が庄内へ飛来し、私達親子五人（母、私、弟三人）は、城山の梨園におびえながらのぼりつきました。見下ろしたと端、わが家が燃えているではありませんか。アツという間の出来事でした。敵機が去って城山からおりて来た時は、一面焼野が原で、道路が焼けて歩けませんでした。庄内小の向かい合わせでしたので、飛び火かなと思っていました、やはり焼夷弾だったのでしょうか。

（中略）

焼けた当時は、二、三日親戚の家にお世話になり、其の後バラック生活が始まりました。しかし、いつまでもバラックで過ごせないで家を建てなければなりません。女・子供でどうして家が建てられるか心配でした。親戚の家から帰ってからの生活はそれはそれはみじめなものでした。バラックを建ててもらっても、敷物一枚もなく、炊事をするのに焼けたはがまでふたはなし、ご飯を食べるにお茶碗、お箸一本もありませんでした。戦災者へ渡されたものはアルマイトのなべ一個だけで本当の情けない思いをしました。平田のおじからお金を借りて、山の本を切り、やっと家を建てました。（中略）

このような悲劇的体験を、二度と味わってはならないと思い

ます。私共の青春は灰色の時代といいますが、まさにその通りです。戦争体験者も高齢化しました。戦争が風化されようとしています。戦争の悲惨さを伝えて、二度とくり返してはならないと訴えたい思いでいっばいです。」（前掲書 岩切サキ「わが家が焼失した!!」）

手記にあるように、当時の藁葺き家が多く、焼夷弾の直撃や、類焼・飛び火によって瞬く間に焼けてしまったのだった。男手は戦地に借り出され、女・子どもの家庭が多く、被災後の生活、復興も大変だった。しかし、当時の人々は助け合ってバラック住宅を建て、励ましあいながら暮らしを立て直していきました。「戦災者同志で話し合ったことは、怒りと悲しみと人の情けでした。」と手記にはある。

この空襲で、七十二軒が焼失しました。住民二名機銃弾を受け負傷。兵士一名機銃弾により死亡。小学校の校舎は二棟を残し他は焼失した。焼失した校舎は、二階付大講堂（二千名収容可）二階校舎、西校舎（二教室・理科室・理科準備室・家庭科室）日本間実習室・洗濯室・更衣室）、中校舎、北校舎、用務員室、宿直室、保健室等だった。この日は広島への原爆投下の日でもあった。しかしこの惨劇を国民は知るよしもなかった。

当時、アメリカ軍の志布志湾進攻を昭和二十年十月と予想し

た軍部は、庄内地区に五個師団を配置・駐屯させることにした。そして、「本土決戦」に備え陸軍糧秣廠を庄内青年学校（現・庄内中学校）に設置し、十九年末頃から物資搬入が行われていた。それら食料・医薬品・被服は十万人が約六ヶ月間生活できるものだと言われていた。庄内を中心に鹿児島県財部（曾於市）や山田町（都城市）などの町、七〇〇箇所を集積されていた。九州では最大規模のものだったという。

庄内の城山には縦横に防空壕を掘りめぐらし、糧秣、衣服の貯え、工機類の準備をしていた。陸軍部隊の駐屯は、小学校だけでなく、お寺や民家等が宿舎になっていた。私の家にも将校や兵士（尉官級三名、付き人兵士三名）が宿泊していた。小学校高学年の児童は、農家の子供は自宅での農作業に、非農家の子供は農家の手伝いに行かされていた。また、教科の授業は分散授業と言って、地区ごとに民家や木陰での青空教室が行われていた。戦争のために国民の生活は踏みにじられていたのである。

「B 29による日本本土空襲は、一九四四年六月十六日の北九州爆撃によってはじまった」と言われている。その後のB 29の都市爆撃により、日本本土は壊滅的打撃を蒙っていった。これら本土空襲については三つの時期に分けられると言う。

『マリアナ基地からのB 29による日本空襲は、四十四年十一月二十四日から四十五年八月十五日まで続けられたが、その間をおおむね次の三つの時期に区分できる。』

〔第一期〕 四十四年十一月二十四日～五年三月四日

軍事工場（航空機工場を中心とする）に対する高々度精密爆撃が行われた時期。主要投下爆弾は五〇〇ポンド高性能爆弾で、焼夷弾の使用例は少ない。投弾は、主として目視で行われた。

（略）

〔第二期〕 四十五年三月十日～六月十五日

大都市市街地への無差別焼夷弾空襲が行われた時期。東京・横浜・川崎・名古屋・大阪・尼崎・神戸が目標とされた。B 29は、編隊を組まず、低空に降下し、AN-APQ-13レーダーによって投弾した。なお、四月十六日から五月十一日までは、沖縄戦応援のため九州の航空基地が爆撃目標となり、大都市への空襲は中断された。

〔第三期〕 四五年六月一七日～八月十五日

中小都市空襲の時期。五十九都市が目標となった。第二期同様の形態での無差別焼夷弾空襲が行われた。この時期の最終局面で広島・長崎への原爆投下が行われた。』（鹿児島大学 社

会科学雑誌第十九号 一九九六年九月発行（別刷） 米軍資料

にみる六・一七鹿児島空襲 — 米軍第21爆撃機集団「作戦任務報告書」（試訳）— 小原 実・柳原敏昭より引用。

都城空襲が始まるのは二十年三月十八日からである。いうまでもなく、都城空襲は第二第三期に当たる。「沖縄戦応援のため九州の航空基地が爆撃目標」とされたのである。そして、初めは都城の飛行場が目標とされた。「米軍の都城大空襲作戦計画書」によると、都城には三つの飛行場があり、重要な特別攻撃隊の基地になっていることが把握されているからである。米軍の沖縄占領後は、沖縄の飛行場からの中・小型戦闘爆撃による空爆となっていた。

その後たびたびの米機来襲があり、庄内空襲は、敗戦間近の八月六日に行われたのである。庄内地区の人々は、まさかこんな田舎への空襲はないだろうと思っていた。しかし、アメリカ軍の攻撃目標は的確であった。目標とされたのは、九州最大規模と言われる糧秣廠があったからである。それだけではない、「市街地や施設への攻撃は、市民へのダメージと主要な鉄道や道路に多大な損害をもたらすことで、軍隊の防衛や軍隊の訓練にも大きな打撃を与えることになったのである。

かつて、「一億一心火の玉だ」撃ちてし止まむ」というスロー

ガンも、この頃の国民の心からは色あせ・遠のき、国民生活そのものが疲弊していたのである。そして、「いろいろ考える余裕などもなく、これから一体どうなるのだろうか」と、只、茫然としていた。「米軍が来て何をされるかわからないと聞かされ、不安な日々が続いた」などという状態であった。

こうした中でもなお、天皇はじめ軍首脳部・政治家たちは、体制保持のためにだけ汲々としていたのである。そして、国民の生命・財産は失われ、塗炭の苦しみに陥れていったのである。戦争は決して許してはならない。戦争の結果、残るのは破壊と滅亡だけである。

〔参考にした資料・図書〕

・年刊誌「庄内 第四号 特集 あの日

あの時」平成四年十一月刊

・「鹿児島大学 社会科学雑誌第十九号 一九九六年九月発行

（別刷）米軍資料にみる六・一七鹿児島空襲 — 米軍第21爆

撃機集団「作戦任務報告書」（試訳）— 小原 実・柳原敏昭「

・「都城市史 通史編 近現代」

・「昭和の歴史」七 太平洋戦争 木坂順一郎著



事務局便り

編集後記

一頁

十六名

一〇七頁

販 売…一冊千円

平成二十五年度 事業報告

庄内の昔を語る会

庄内地区まちづくり協議会一括購入

配布先 冊数

市役所関係各課 五

地区小・中学校 四

報道各社（市政クラブ） 十二

願心寺（題字） 一

執筆者・関係者 三十九

まちづくり協議会 三十九

合 計 一〇〇

一、季刊誌「庄内」第十九号の発行

発行日…平成二十五年十二月二十日

発行者…庄内地区まちづくり協議会、庄内の昔を語る会

発行部数…三百冊

印刷所…(株)文昌堂 投稿 頁数

内容…発行にあたって 一名 巻頭

特別寄稿 一名 二頁

歴史研究 二名 三十四頁

史料 三名 二十三頁

庄内町情報 三名 十八頁

追憶・随想 五名 二十三頁

創作民話 一名 四頁

事務局だより 二頁

二、史跡探訪

平成二十五年十月に平戸の歴史探訪を計画しましたが参加希望者が少なく中止

三、庄内歴史講座（庄内地区ライフセミナー）

第一回

日 時…平成二十五年六月一日（土）

十四時～十六時

場 所：庄内地区公民館

内 容：講演「近代都城の歴史」

講 師：山下謙二郎氏

参加者：二十四名

第二回

日 時：平成二十五年六月二十九日（土）

十三時半～十五時半

場 所：庄内地区公民館集合、解散

内 容：「庄内地区の史跡めぐり」

案 内：坂元徳郎氏、山下謙二郎氏

参加者：十九名

第三回（庄内地区まちづくり協議会主催総合研修会）

日 時：平成二十五年七月二十六日（金）

十九時半～二十一時

場 所：庄内地区公民館

内 容：講演「薩摩の教え『郷中教育』について」

講 師：NPO法人都城歴史と文化のまちづくり会議

代表理事 田代義博氏

参加者：二十名

第四回

日 時：平成二十五年八月三十一日（土）

十四時～十六時

場 所：庄内地区公民館

内 容：講演「庄内の明治維新」

講 師：坂元徳郎氏

参加者：二十五名

第五回

日 時：平成二十五年九月二十八日（土）

十四時～十六時

場 所：庄内地区公民館

内 容：講演「三島通庸と幕末・維新・明治」

講 師：七牟礼純一氏

参加者：十七名

第六回

日 時：平成二十六年三月十五日（土）

十三時半～十六時半

場 所：庄内地区公民館集合、解散

内 容：中郷・梅北史跡めぐり

黒尾神社、金見岳、興玉神社（こだまじん

じゃ）、正応寺跡（しょうおうじあと）、六ヶ

城跡（ろっかんじょうあと）

講師…武田浩明氏、山下謙二郎氏

参加者…十六名

反省会

日時…平成二十六年三月二十二日（土）

十八時～二十時

場所…琴吹寿司

内容…平成二十四年度の反省と来年度に向けて意見

交換

参加者…二十二名

四、会議等

平成二十五年通常総会

日時…平成二十五年四月二十七日（土）

十四時～十五時半

場所…庄内地区公民館

内容…議事①平成二十四年度事業報告

②平成二十四年度決算報告及び監査報告

③平成二十五年事業計画（案）

④平成二十五年収支予算（案）

紙芝居鑑賞「坂元源兵衛物語」

講師…関之尾むかえびとの会 佐々原 幸子氏
理事会

①平成二十五年四月十六日

②平成二十五年五月十七日

③平成二十五年六月十二日

④平成二十五年九月十二日

⑤平成二十五年十一月九日

⑥平成二十六年二月二十七日

五、その他

①都城市健康課主催「鯉のぼりウォーク」に協力

日時…平成二十五年四月二十一日（日）

九時半～十一時半

主催…都城市健康課

内容…庄内市民広場出発、庄内川（鯉のぼり）、

平田かくれ念仏洞跡、諏訪神社、山久院跡、

安永城址、釣こう院跡、庄内市民広場到着、

各史跡で説明

参加者…約三百人

ガイド役…坂元勲氏、花原恵子氏、佐々原幸子氏、

山下謙二郎氏

②庄内中学校地域巡見学習

日 時…平成二十五年十一月二十九日(金)

十三時三十分～十六時

主 催…庄内中学校、庄内地区まちづくり協議会

内 容…庄内中学校一年生(七十一名)を対象とした歴史伝承。バス三台に分乗し庄内地区の

史跡などを巡った。

ガイド役…坂元勲氏、七牟礼純一氏、佐々原幸子氏、

山下謙二郎氏

③菓子野小学校校外学習

日 時…平成二十五年十二月十八日(水)

八時半～十一時半

主 催…菓子野小学校、庄内地区まちづくり協議会

内 容…菓子野小学校五年生(十六名)を対象に

三原叢五先生のことや前田用水路などについて学ぶ校外学習を支援。マイクロバスで

三原叢五墓地、前田用水路トンネル出口などを見て、庄内地区公民館に移動。関之尾

むかえびとの会の紙芝居「坂元源兵衛物語」

の鑑賞と、坂元徳郎顧問による「三原叢五

先生のこと」の講話を聞いた。

④庄内ふるさと祭り

日 時…平成二十五年十一月二日(土)～三日(日)

主 催…庄内ふるさと祭り実行委員会

内 容…庄内小学校体育館に庄内地区の遺跡や神

社・人物などの写真を展示

「庄内の昔を語る会」への入会勧誘

⑤庄内地区まちづくり協議会

山下会長が教育文化活動部会に所属

⑥都城地域観光ネットワーク会議に参加

地域観光資源のネットワーク化を図ることを目的に都城地域雇用創造協議会が主催

平成二十五年八月三十日、都城総合文化ホール会議

室で開催

平成二十六年二月十八日、観光ガイド実地研修(庄

内町、関之尾滝)庄内町ガイド役(七牟礼純一氏、

花原恵子氏、佐々原幸子氏、山下謙二郎氏)

平成二十六年三月十一日、都城総合文化ホール会議

室で開催、反省会・まとめ

平成二十六年 度 会 員 名 簿

庄内の昔を語る会

氏名	住所	TEL
坂元 徳郎	庄内町一二五七一	三七一〇三五〇
江口 保	庄内町一三九〇八一三	三七一〇二八一
鎌田 康正	庄内町一二五五一	三七一〇二六五
海老原 宗平	庄内町一二三四五―三	三七一〇三二九
佐藤 幸三郎	庄内町一二五四八	三七一二一五二
坂元 勲	庄内町一三九三八	三七一〇七七五
園田 満彦	庄内町	
池田 平八郎	庄内町八〇四五	三七一〇六一一
持永 節	庄内町一二五三八―一	三七一三六八一
松元 郁子	庄内町一二五七八	三七一一一七一
今村 トミ	庄内町一二五四〇―八	三七一二一四一
溝下 和子	庄内町一二五三四―一	三七一二一三九
西嶋 正文	庄内町一二七〇八一―一	三七一二七七五
猪俣 剛	庄内町一二七〇八	三七一一七七一
朝倉 脩二	庄内町一二六九四	三七一〇〇七八
田代 加代子	庄内町七四三二	三七一二〇五六
池田 良子	庄内町七九九五―一	三七一〇三一四
山下 謙二郎	庄内町一二四六九―二	三七一〇八三一
萩原 忠子	庄内町一二六八二	三七一〇一二二
城村 勇	庄内町一二三六四―四	三七一〇一二八
年神 シキ	菓子野町一一七一〇	三七一〇三〇一

大池 烈子	庄内町一二三四六	三七一二一八三
江口 高見	庄内町一二三四〇―口	三七一〇一六一
永山 豊子	庄内町一二三四九	三七一一六五五
佐藤 とし	庄内町八九八六一―一	三七一一六九六
帖佐 ミヤ	庄内町九〇一九―イ	三七一〇〇二一
花原 恵子	関之尾町六三二四―二	三七一二〇〇〇
鶉島 節男	菓子野町一一六二―一	三七一〇八九三
馬籠 英男	乙房町一七八二	三七一二五六五
武田 浩明	乙房町三七七―一	三七一一二三八
山下 真一	鷹尾一丁目二一―一六	二六一三六四五
井上 ミツル	庄内町一二三四三―三	三七一〇四二三
満木 敏公	庄内町一二四九三	三七一〇三一八
山下 紘一	庄内町一二四六九	三七一一九一七
山下 和代	庄内町一二四六九	三七一一九一七
福村 修	関之尾町五四二四	三七一三〇四七
池田 昭子	庄内町八〇四五	三七一〇六一一
七牟礼 純一	早鈴町二〇―一九	二五一八六七
門松 房子	庄内町一二七四六一―一	三七一二〇六七
釘村 美千也	庄内町七八七四―二	三七一〇六六六
大川原 紀美生	庄内町一二五二四	三七一二二〇〇
鶉島 兼貞	庄内町八六七八―二	三七一〇一四七
宇野 勝利	庄内町一二六五九	三七一二一二八
宇野 秀子	庄内町一二六五九	三七一二一二八
田中 ミヤ	庄内町八六八八―二	三七一〇二一五
山元 芳子	庄内町一二五〇―一	三七一〇六七〇
財部 千鶴子	庄内町一三八七〇	三七一〇六四七
宮下 俊彦	久保原町四―五〇	二二一六九四一
佐々原 幸子	三股町稗田六二―三	五二一八二八八

編集後記

今年には戦後七〇年を迎えます。戦時中を経験した人も、また、戦争時代のことを伝える人々も少なくなってきました。その中で「学徒動員の思い出」、「戦時下の我が家」「庄内空襲」等を掲載しました。貴重な思い出をご投稿頂きありがとうございます。

また「庄内の昔を語る会」の発足当時から現在も顧問をお願いしている坂元徳郎氏に特別寄稿として、『庄内』二十号刊行に寄せて」を寄稿して頂きました。

歴史研究には、歴史講座で講演して頂いた内容を掲載させていただきます。

「庄内町情報」では、各小学校から学校の様子をいろいろと伝えて頂いています。さらに庄内小学校五年生には、遠足で庄内史跡巡りをしていただき、その感想文を掲載することが出来ました。子どもの時から自分の町の歴史をこのように実際に歩き、目で確かめて行くことは大切なことです。その中で地域への愛着・歴史への興味が培われて行くものだと思います。各学

校で「庄内を語る会」を大いに活用して頂ければ幸いです。

最後に、二〇号も刊行が大幅に遅れてしまいましたことを、ご投稿いただいた方々や「庄内」刊行を待ち望んでいらつしやる方々へ深くお詫び申し上げます。

(編集子)

平成二十七年一月吉日

編集委員

朝倉 脩二	池田 良子
猪俣 剛	坂元 勲
田代加代子	武田 浩明
西嶋 正文	花原 恵子
山下謙二郎	

庄内 第二十号

平成二十七年二月五日 印刷

平成二十七年二月十日 刊行

刊行・編集

庄内地区まちづくり協議会
庄内の昔を語る会
宮崎県都市庄内地区公民館
電話（〇九八六）三七一〇八八番

印刷

株式会社 文昌堂
都城市都北町七一六六番地
電話（〇九八六）三六一六六〇番

